

平成28(2016)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

下味野所在遺跡
曳田所在遺跡
宮長竹ヶ鼻遺跡
倉見古墳群
乙亥正屋敷廻遺跡
山手地ユノ谷上分遺跡
天神山遺跡
岩吉遺跡
鳥取城跡(第35次)
鳥取城跡(第36次)
鳥取城跡(第37次)
鳥取城跡(第38次)
鳥取城下町遺跡(第4次)
鳥取城下町遺跡(第5次)

2017

鳥取市教育委員会

序

この報告書は、開発事業に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成25年度から平成27年度に実施した鳥取市内遺跡の試掘調査の記録です。

鳥取市内の平野部や丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。中でも「鳥取西道路」建設に伴って行われた発掘調査では多くの遺跡から膨大な量の遺物が出土し、地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく関係諸機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、鳥取県教育委員会事務局文化財課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

本報告書が郷土の歴史の解明や今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成29年3月

鳥取市教育委員会

教育長 木下法広

例　言

1. 本書は平成25年度から27年度に国・県補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した発掘調査の記録である。
2. 平成25年度に実施した調査は、鳥取城下町遺跡(第4・5次)である。
平成26年度に実施した調査は、曳田所在遺跡、鳥取城跡(第35～38次)である。
平成27年度に実施した調査は、乙亥正屋敷廻遺跡、山手地ユノ谷上分遺跡、天神山遺跡、曳田所在遺跡、岩吉遺跡、倉見古墳群、宮長竹ヶ鼻遺跡、下味野所在遺跡である。
3. 曳田所在遺跡、乙亥正屋敷廻遺跡、岩吉遺跡のトレンチ番号は前年度以前からの通し番号を使用した。
4. 山手所在遺跡は調査後に遺跡名を山手地ユノ谷上分遺跡に変更したため、本書では調査時から名称を変更して報告した。曳田所在遺跡は調査後に遺跡名を曳田小寺遺跡に変更したが、本書では曳田所在遺跡として報告した。
5. 本書における遺構図はすべて磁北を示し、レベルは基本的に海拔標高である。
6. 発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
7. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体　鳥取市教育委員会

事務局　　鳥取市教育委員会事務局文化財課

調査担当　加川崇　坂田邦彦　山田真宏　野崎欽五　神谷伊鈴　横山聖　谷岡陽一　大川泰広

8. 発掘調査から本書の作成にあたっては、多くの方々からご指導・ご助言並びにご協力をいただいた。
明記して深謝いたします。(敬称略、順不同)

鳥取県埋蔵文化財センター　鳥取県教育委員会事務局文化財課　(公財)鳥取県教育文化財団

本文目次

序

例言

第1章 発掘調査の経緯と経過 1

第2章 調査の結果 3

第1節 下味野所在遺跡	3
第2節 曜田所在遺跡	4
第3節 宮長竹ヶ鼻遺跡	16
第4節 倉見古墳群	20
第5節 乙亥正屋敷廻遺跡	21
第6節 山手地ユノ谷上分遺跡	23
第7節 天神山遺跡	29
第8節 岩吉遺跡	36
第9節 鳥取城跡(第35次)	40
第10節 鳥取城跡(第36次)	42
第11節 鳥取城跡(第37次)	44
第12節 鳥取城跡(第38次)	48
第13節 鳥取城下町遺跡(第4次)	49
第14節 鳥取城下町遺跡(第5次)	52

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 調査遺跡位置図	2
第2図 下味野所在遺跡 調査トレンチ位置図	3
第3図 下味野所在遺跡 第1トレンチ実測図	4
第4図 曜田所在遺跡 調査トレンチ位置図	5
第5図 曜田所在遺跡 第1トレンチ実測図	7
第6図 曜田所在遺跡 第2トレンチ実測図	7
第7図 曜田所在遺跡 第3トレンチ実測図	8
第8図 曜田所在遺跡 第4トレンチ実測図	8
第9図 曜田所在遺跡 第5トレンチ実測図	9
第10図 曜田所在遺跡 第6トレンチ実測図	9
第11図 曜田所在遺跡 第7トレンチ実測図	11
第12図 曜田所在遺跡 第8トレンチ実測図	11
第13図 曜田所在遺跡 第9トレンチ実測図	12
第14図 曜田所在遺跡 第10トレンチ実測図	12
第15図 曜田所在遺跡 第11トレンチ実測図	14
第16図 曜田所在遺跡 第12トレンチ実測図	14
第17図 曜田所在遺跡 出土遺物実測図	15
第18図 宮長竹ヶ鼻遺跡 調査トレンチ位置図	16
第19図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第1トレンチ実測図	17
第20図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第2トレンチ実測図	17
第21図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第2トレンチ出土遺物実測図	18
第22図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第3トレンチ実測図	18
第23図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第4トレンチ実測図	19
第24図 倉見古墳群 調査トレンチ位置図	20
第25図 倉見古墳群 第1トレンチ実測図	20
第26図 乙亥正屋敷廻遺跡 調査トレンチ位置図	21
第27図 乙亥正屋敷廻遺跡 第11トレンチ実測図	22
第28図 山手地ユノ谷上分遺跡 調査トレンチ位置図	23
第29図 山手地ユノ谷上分遺跡 第1トレンチ実測図	24
第30図 山手地ユノ谷上分遺跡 第2トレンチ実測図	24
第31図 山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ実測図	26
第32図 山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ出土遺物実測図	27
第33図 山手地ユノ谷上分遺跡 第4トレンチ実測図	28
第34図 山手地ユノ谷上分遺跡 第5トレンチ実測図	28
第35図 天神山遺跡 調査トレンチ位置図	30
第36図 天神山遺跡 第1トレンチ実測図	31
第37図 天神山遺跡 第2トレンチ実測図	31
第38図 天神山遺跡 第3トレンチ実測図	32
第39図 天神山遺跡 第4トレンチ実測図	32

第40図	天神山遺跡 第5トレンチ実測図	33
第41図	天神山遺跡 第5トレンチ出土遺物実測図	34
第42図	天神山遺跡 第6・7・8・9トレンチ実測図	34
第43図	岩吉遺跡 調査トレンチ位置図	37
第44図	岩吉遺跡 第8・9トレンチ実測図	38
第45図	岩吉遺跡 第10・11・12トレンチ実測図	39
第46図	鳥取城跡(第35次) 調査トレンチ位置図	40
第47図	鳥取城跡(第35次) 第1トレンチ実測図	41
第48図	鳥取城跡(第35次) 第2トレンチ実測図	42
第49図	鳥取城跡(第36次) 調査トレンチ位置図	43
第50図	鳥取城跡(第36次) トレンチ実測図	44
第51図	鳥取城跡(第37次) 調査トレンチ位置図	44
第52図	鳥取城跡(第37次) 第1トレンチ実測図	45
第53図	鳥取城跡(第37次) 第2トレンチ実測図	46
第54図	鳥取城跡(第37次) 第3トレンチ実測図	46
第55図	鳥取城跡(第37次) 出土遺物実測図	47
第56図	鳥取城跡(第38次) 調査トレンチ位置図	48
第57図	鳥取城跡(第38次) 出土遺物実測図	48
第58図	鳥取城跡(第38次) トレンチ実測図	49
第59図	鳥取城下町遺跡(第4次) 調査トレンチ位置図	50
第60図	鳥取城下町遺跡(第4次) 第1・2・3・4トレンチ実測図	51
第61図	鳥取城下町遺跡(第5次) 調査トレンチ位置図	52
第62図	鳥取城下町遺跡(第5次) トレンチ実測図	53
第63図	鳥取城下町遺跡(第5次) 出土遺物実測図	54

図版目次

図版1

下味野所在遺跡第1トレンチ掘下げ状況(北から)
曳田所在遺跡第1トレンチ掘下げ後(北東から)
曳田所在遺跡第2トレンチ掘下げ状況(西から)
曳田所在遺跡第3トレンチ掘下げ状況(南から)
曳田所在遺跡第4トレンチ掘下げ状況(西から)
曳田所在遺跡第5トレンチ完掘状況(北西から)
曳田所在遺跡第5トレンチ杭検出状況
(北北東から)
曳田所在遺跡第6トレンチ完掘状況(南南東から)

図版2

曳田所在遺跡第7トレンチ完掘状況(南西から)
曳田所在遺跡第8トレンチ完掘状況(南南東から)
曳田所在遺跡第9トレンチ完掘状況(北西から)
曳田所在遺跡第10トレンチ完掘状況(北東から)
曳田所在遺跡第11トレンチ完掘状況(東北東から)
曳田所在遺跡第12トレンチ完掘状況(東北東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡第1トレンチ完掘状況(南西から)
宮長竹ヶ鼻遺跡第2トレンチ遺構検出状況
(北東から)

図版3

宮長竹ヶ鼻遺跡第2トレンチ土層断面(北西から)
宮長竹ヶ鼻遺跡第2トレンチ土層断面(南西から)
宮長竹ヶ鼻遺跡第2トレンチ遺物検出状況
(北東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡第2トレンチ遺物検出状況
(北東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡第3トレンチ完掘状況(北東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡第4トレンチ遺物検出状況
(北東から)
宮長竹ヶ鼻遺跡第4トレンチ完掘状況(南西から)
倉見古墳群遠景(西から)

図版4

倉見古墳群第1トレンチ完掘状況(東から)
倉見古墳群第1トレンチ土層断面(南から)
乙亥正屋敷廻遺跡遠景(東から)
乙亥正屋敷廻遺跡第11トレンチ完掘状況(西から)

乙亥正屋敷廻遺跡第11トレンチ土層断面(南から)

山手地ユノ谷上分遺跡遠景(南東から)
山手地ユノ谷上分遺跡第1トレンチ完掘状況
(東から)
山手地ユノ谷上分遺跡第1トレンチ土層断面
(南から)

図版5

山手地ユノ谷上分遺跡第2トレンチ完掘状況
(東から)
山手地ユノ谷上分遺跡第2トレンチ土層断面
(南から)
山手地ユノ谷上分遺跡第3トレンチピット検出状況
(北東から)
山手地ユノ谷上分遺跡第3トレンチ遺構検出状況
(北西から)
山手地ユノ谷上分遺跡第3トレンチ遺構検出状況
(南東から)
山手地ユノ谷上分遺跡第3トレンチ完掘状況
(北西から)
山手地ユノ谷上分遺跡第3トレンチ遺物検出状況
(西から)
山手地ユノ谷上分遺跡第3トレンチ焼土面検出状況
(北東から)

図版6

山手地ユノ谷上分遺跡第3トレンチ土層断面
(南から)
山手地ユノ谷上分遺跡第3トレンチ溝状遺構
(SD02)検出状況(北から)
山手地ユノ谷上分遺跡第4トレンチ土層断面
(西から)
山手地ユノ谷上分遺跡第4トレンチ土層断面
(南から)
山手地ユノ谷上分遺跡第5トレンチ完掘状況
(南西から)
山手地ユノ谷上分遺跡第5トレンチ土層断面
(北西から)
天神山遺跡第1トレンチ掘下げ状況(西から)
天神山遺跡第1トレンチ土層断面(北から)

図版7

天神山遺跡第2トレンチ掘下げ状況(北から)
天神山遺跡第2トレンチ土層断面(西から)
天神山遺跡第3トレンチ土層断面(南から)
天神山遺跡第3トレンチ土層断面(西北西から)
天神山遺跡第4トレンチ土層断面(南から)
天神山遺跡第4トレンチ土層断面(北西から)
天神山遺跡第5トレンチ第1面SD01掘下げ状況
(北から)
天神山遺跡第5トレンチ最終掘下げ状況(北から)

(南西から)

図版8

天神山遺跡第5トレンチ土層断面(南西から)
天神山遺跡第5トレンチ泥炭層付近遺物出土状況
(北から)
天神山遺跡第6トレンチ土層断面(北から)
天神山遺跡第6トレンチ土層断面(西から)
天神山遺跡第7トレンチ土層断面(北から)
天神山遺跡第7トレンチ土層断面(西から)
天神山遺跡第8トレンチ土層断面(北から)
天神山遺跡第8トレンチ土層断面(西から)

図版11

鳥取城跡(第36次)トレンチ土層断面(北東から)
鳥取城跡(第36次)石垣検出状況(南東から)
鳥取城跡(第37次)第1トレンチ全景(南西から)
鳥取城跡(第37次)第1トレンチ土層断面
(南東から)
鳥取城跡(第37次)第1トレンチ(南から)
鳥取城跡(第37次)第2トレンチ土層断面
(南東から)
鳥取城跡(第37次)第2トレンチ石垣検出状況
(南から)
鳥取城跡(第37次)第3トレンチ全景(南東から)

図版9

天神山遺跡第9トレンチ土層断面(北から)
天神山遺跡第9トレンチ土層断面(東から)
岩吉遺跡遠景(北から)
岩吉遺跡第8トレンチ完掘状況(西から)
岩吉遺跡第8トレンチ土層断面(北から)
岩吉遺跡第9トレンチ完掘状況(西から)
岩吉遺跡第9トレンチ土層断面(北から)
岩吉遺跡第10トレンチ完掘状況(東から)

図版12

鳥取城跡(第37次)第3トレンチ土層断面
(南西から)
鳥取城跡(第37次)調査区遠景(西から)
鳥取城跡(第38次)トレンチ全景(北西から)
鳥取城跡(第38次)トレンチ土層断面(南東から)
鳥取城下町遺跡(第4次)第1トレンチ全景
(西から)
鳥取城下町遺跡(第4次)第2トレンチ全景
(南から)
鳥取城下町遺跡(第4次)第3トレンチ全景
(西から)
鳥取城下町遺跡(第4次)第4トレンチ全景
(南東から)

図版10

岩吉遺跡第10トレンチ土層断面(東から)
岩吉遺跡第11トレンチ完掘状況(北から)
岩吉遺跡第11トレンチ土層断面(東から)
岩吉遺跡第12トレンチ完掘状況(東から)
岩吉遺跡第12トレンチ土層断面(東から)
鳥取城跡(第35次)第1トレンチ全景(南から)
鳥取城跡(第35次)第1トレンチ土層断面
(南東から)
鳥取城跡(第35次)第2トレンチ土層断面

図版13

鳥取城下町遺跡(第5次)トレンチ全景(北東から)
鳥取城下町遺跡(第5次)トレンチ土層断面
(南西から)
曳田所在遺跡 出土遺物
宮長竹ヶ鼻遺跡 出土遺物

図版14

宮長竹ヶ鼻遺跡 出土遺物
山手地ユノ谷上分遺跡 出土遺物
鳥取城跡(第37次) 出土遺物
鳥取城下町遺跡(第5次) 出土遺物

第1章 発掘調査の経緯と経過

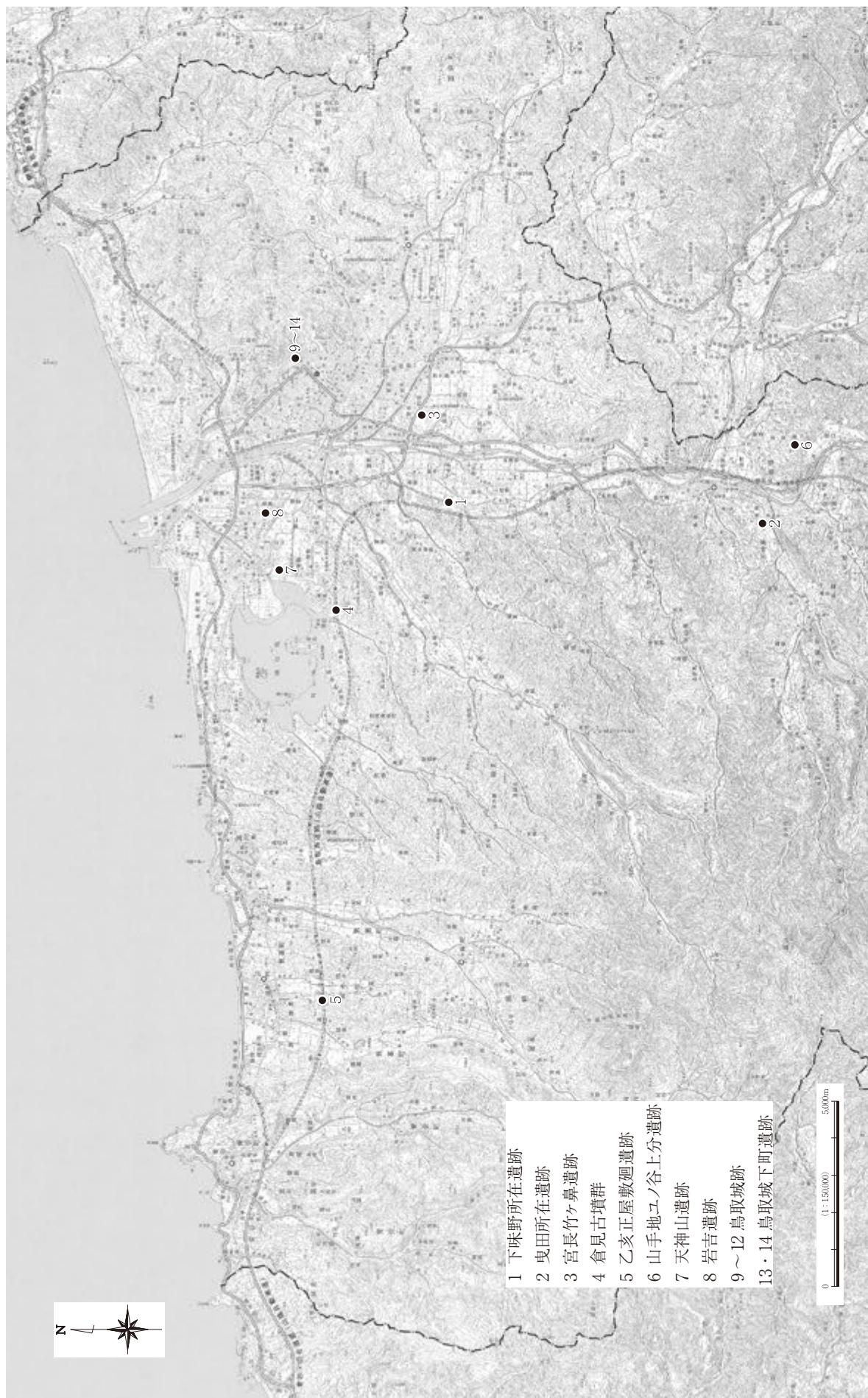
鳥取市は、周辺8町村との合併により面積765.31km²、人口約20万人を擁する都市となった。鳥取市域の遺跡数も市域の拡大や青谷町、国府町等多くの遺跡を有する町との合併によりその数を増し、古墳、集落跡、散布地等4,800か所以上となった。このような中、現在進められている鳥取西道路の建設は、市域でも有数の遺跡密集地である湖山池南岸に計画され、路線内で順次実施されている発掘調査では、重要な発見が相次いでいる。

今回の調査遺跡は鉄塔移設事業計画に伴って実施した下味野所在遺跡、道路整備事業計画に伴って実施した曳田所在遺跡、宅地造成計画に伴って実施した宮長竹ヶ鼻遺跡、天神山遺跡、岩吉遺跡、鳥取西道路整備事業計画に伴って実施した倉見古墳群、乙亥正屋敷廻遺跡、可燃物処理施設建設計画に伴って実施した山手地ユノ谷上分遺跡、社屋建設計画に伴って実施した岩吉遺跡、公共下水道事業整備に伴って実施した天神山遺跡、鳥取県立鳥取西高等学校の改築に伴い実施した鳥取城跡(第35～37次)及び鳥取城下町遺跡(第4・5次)、公共排水路敷設に伴い実施した鳥取城跡(第38次)の10遺跡14地点である。

試掘調査はトレーニングによる遺構・遺物の包含状況の確認に主眼を置いて実施し、層ごとの遺構確認と包含遺物の把握を行いながら掘り下げを行った。トレーニングの掘削は基本的に人力によって実施したが、天神山遺跡、岩吉遺跡、鳥取城跡(第38次)、鳥取城下町遺跡(第5次)は重機を用いて表土除去を行い、その後人力による掘り下げを行った。整理作業は基本的には調査終了後から行い、本格的な報告書作成は平成28年10月から実施した。本報告の調査面積は626.0m²である。各調査遺跡のトレーニング数、調査面積、現地調査期間は次の通りである。また、報告順に関しては、紙面の都合上順不同となっている。

遺跡名	トレーニング数	調査面積(m ²)	現地調査期間
1 下味野所在遺跡	1	15.0	20150428～20150430
2 曳田所在遺跡	12	240.0	20150224～20150313 20160226～20160318
3 宮長竹ヶ鼻遺跡	4	59.7	20151019～20151113
4 倉見古墳群	1	4.2	20150831～20150903
5 乙亥正屋敷廻遺跡	1	15.0	20151120～20151201
6 山手地ユノ谷上分遺跡	5	57.0	20150423～20150511
7 天神山遺跡	9	81.7	20150522～20150613 20151116～20151117
8 岩吉遺跡	5	48.0	20150827～20151218
9 鳥取城跡(第35次)	2	15.3	20140408～20140421
10 鳥取城跡(第36次)	1	4.2	20140729
11 鳥取城跡(第37次)	3	12.0	20141007～20141016
12 鳥取城跡(第38次)	1	8.3	20150106～20150107
13 鳥取城下町遺跡(第4次)	4	11.6	20140210～20140214
14 鳥取城下町遺跡(第5次)	1	54.0	20140227～20140312

第1図 調査遺跡位置図



第2章 調査の結果

第1節 下味野所在遺跡

下味野所在遺跡は、旧鳥取市街地南東の河岸段丘上に位置する。周辺には中国山地から派生する丘陵上に50基あまりの古墳(下味野古墳群)が分布し、平成12・14年には古墳時代中期から後期の15基の古墳が調査されている。その際には、古墳以外にも弥生時代中期の竪穴住居、埋葬施設、土坑、溝状遺構なども調査され、丘陵上に同時期の生活面も存在することが明らかとなっている。また周辺平野部では、服部遺跡、菖蒲遺跡、山ヶ鼻遺跡などがよく知られており、縄文時代後期から人々の足跡がたどれる地域となっている。今回の調査は電力会社の送電鉄塔移設工事に伴うもので、水田耕作地の対象地内に1ヶ所のトレーンチを設定した。



第2図 下味野所在遺跡 調査トレーンチ位置図

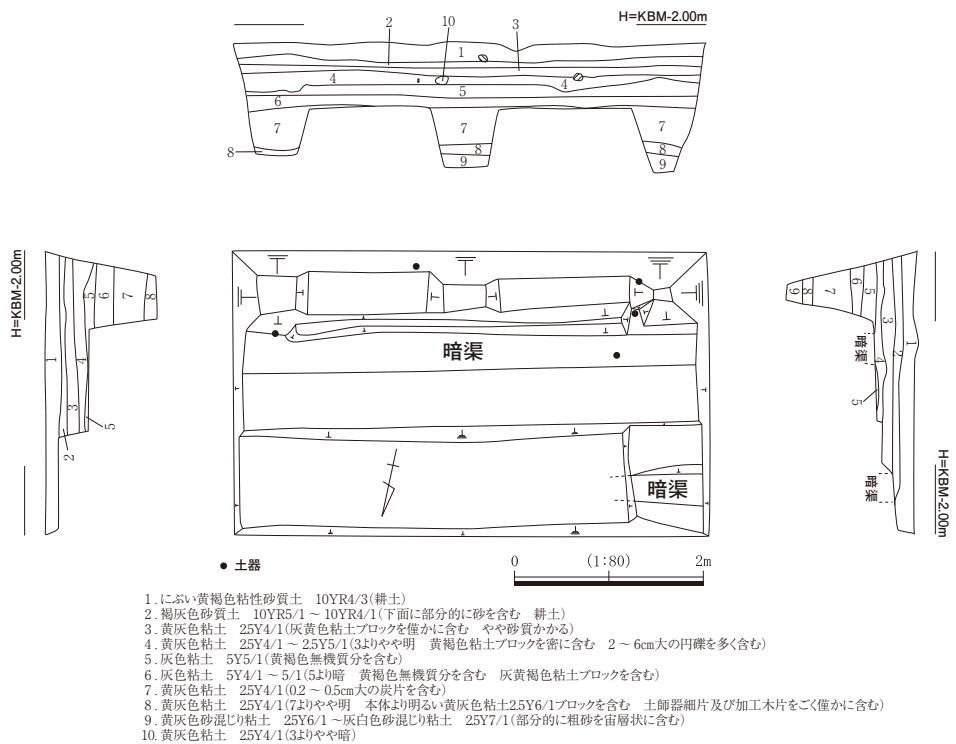
第1トレーンチ(Tr 1) [第2・3図 図版1]

対象地内で河岸段丘に直交方向の東西に長い5×3mのトレーンチを設定した。新旧の暗渠が調査地内を貫通する中、地表面下1.3m強の黄灰色～灰白色の砂混じり層(第9層)中まで掘下げを実施した。

地表面下25cm程度が現在の耕土(第1・2層)で、その下に15～30cm程度のは場整備時の客土とみられる第3・4層が認められる。以下約20cmの灰色粘土層(第5・6層)、約50cmの黄灰色粘土(第7・8層)、黄灰色砂混じり粘土～灰白色砂混じり粘土層(第9層)と続く。このうち耕土(第1・2層)、客土(第3・4層)および暗渠埋土中から近代以降の陶磁器片が出土したほかは、第8層から僅かながら土師器細片と加工木片1点が出土した。第8層からの遺物は、その出土状況からいずれも自然堆積層中の流入遺物とみられる。なお、遺構は検出されなかった。

小結

今回の調査地周辺からは以前の踏査時に土器細片が認められたということで調査を実施した。結果としては耕土、客土中の遺物であった可能性が考えられるが、地表面下1m強付近には密度は低いものの遺物包含層も認められる。周辺の段丘上に遺構が遺存する可能性も否定できないことから周辺での開発等には注意が必要である。



第3図 下味野所在遺跡 第1トレンチ実測図

第2節 曜田所在遺跡

曳田所在遺跡は、千代川支流1級河川曳田川の下流域北岸の河岸段丘上に位置し、曳田集落から天神原集落にかけて広がる水田地帯に所在する。周辺の遺跡は、曳田川を挟んだ南側の丘陵上には全長約50mを測る前方後円墳である嶽古墳が位置し、北側丘陵上には中世の大振袖山城跡が位置している。また、天神原には、調査地より西北西約500mの丘陵斜面に6世紀後半から6世紀末にかけて操業した天神原須恵器窯跡が所在している。

今回の調査は、県道袖小屋曳田線(曳田工区)道路改良事業に伴う試掘調査で、道路改良予定地内に12ヶ所のトレンチを設定し、遺跡の有無と広がりを確認した。なお、第1～第4トレンチは平成26年度に実施し、第5～第12トレンチは平成27年度に実施している。

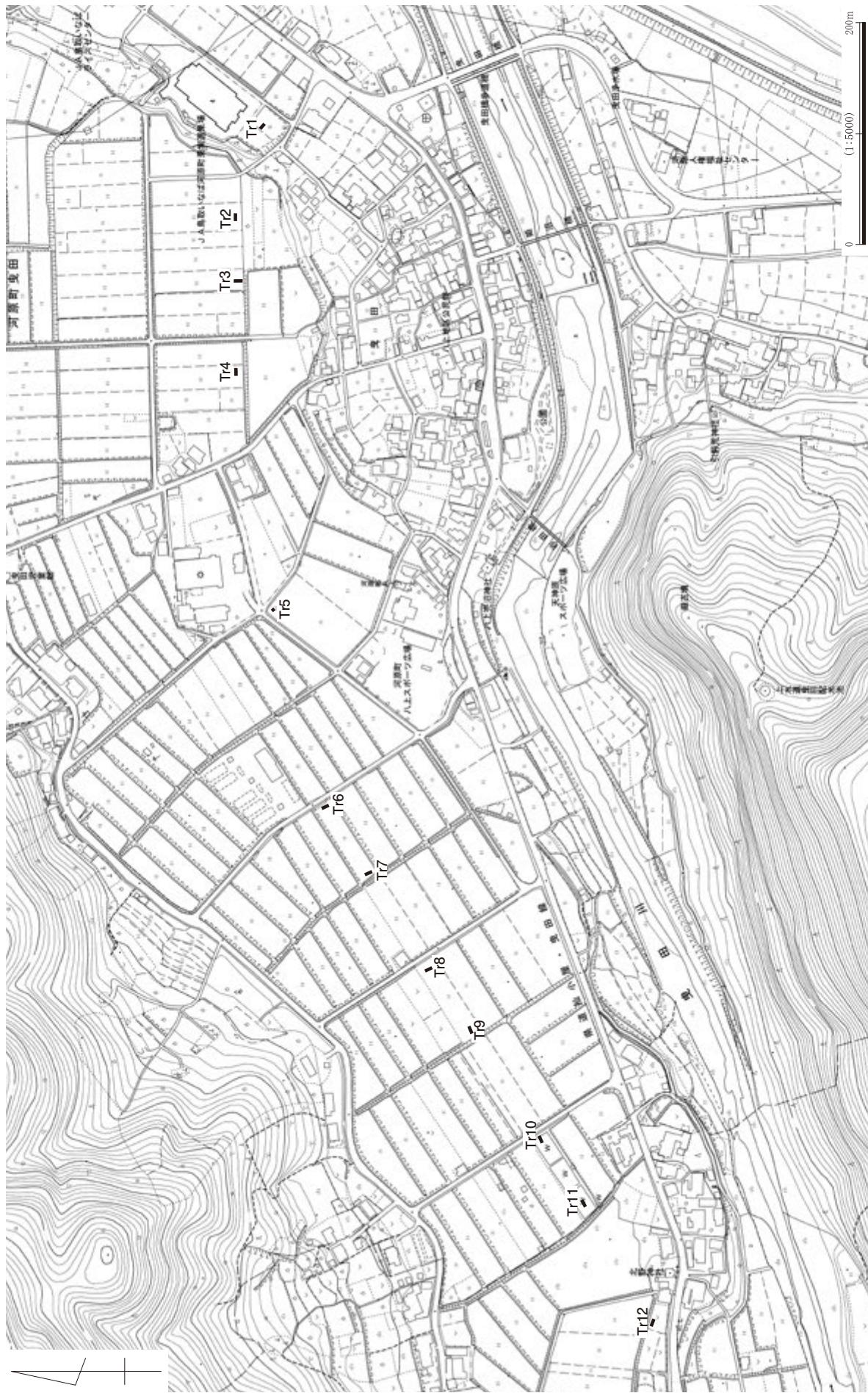
第1トレンチ(Tr1)[第4・5図 図版1]

調査対象地内の最東部にあたり、現在の県道の東側取り付け口近くの水田に設定したトレンチである。規模は3×6m、地表面標高は30.55m余りで、地表面下1.7m程度の標高29m付近まで掘下げを行った。

地表面下20cm程度が現在の耕土(第1・2層)で、その下の褐灰色粘質土層(第3層)上面にはプラスチック片が見受けられる。明黄褐色砂層(第4層)から黒褐色・褐灰色・灰黄褐色の粘土層(第6～8層)、にぶい黄褐色のシルト層(第9層)、灰黄褐色粘質土層(第10層)およびにぶい黄色砂層(第11層)が古代～中世の遺物包含層で、地表面下0.7m程度の第8層に比較的多くの土師器・須恵器片が認められる。地表面下約1m以下は砂層(第12～15・18・19層)が続き、遺物は第15層に流木とみられる自然木が認められるのみである。地表面下約1.4m以下には自然流路の堆積物とみられる1～4cmあるいは20～30cm程度の円礫が多く堆積する。

遺構としては第3層上面から掘り込まれる幅1m程度で東西方向の暗渠と、その埋土状況から同様に第3層付近から掘り込まれたとみられる南西～北東方向にやや長い隅丸長方形状の土坑1基を検出した。規模は長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.65m程度で、流入とみられる土師器細片が僅かに出土している。

第4図 曳田所在遺跡 調査トレンチ位置図



第2トレンチ(Tr2)〔第4・6・17図 図版1・13〕

第1トレンチの北西約80m、段丘上の水田に設定した東西方向に長い $3 \times 7\text{m}$ のトレンチで、地表面標高は約40.2mである。地表面下40cm程度の地山とみられる明黄褐色ローム層(第6層)まで掘下げを行った。

地表面下30cm程度の耕土(第1～3層)下の黒褐色粘質土層(第5層)が遺物包含層で、古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器片等が認められる。標高39.8m程度の第6層上面からは9基のピット状遺構と北西～南東方向に延びる溝あるいは比較的規模の大きな土坑の外縁部が掘り込まれており、埋土の第7層中から土師器皿片、糸切りの土師器底部片、須恵器体部片、鉄器片が出土している。

出土遺物のうち遺構外遺物ではあるが遺存状態が比較的良好な土錘(1)を図化した。やや大ぶりな管状で中央が膨らむ形状である。

第3トレンチ(Tr3)〔第4・7図 図版1〕

第2トレンチの西約50m、段丘上の水田に設定した南北方向に長い $3 \times 8\text{m}$ のトレンチで、地表面標高は約40.3mである。地表面下0.7m程度の標高39.6m付近まで掘下げを行った。

地表面下20cm程度が現在の耕土(第1・2層)で、その下に古代～中世の土師器・須恵器片を含む厚さ10cm程度の黒色系堆積層(第3・4層)が認められるが、その下の地山とみられるにぶい黄色粘土層(第5層)上面からは昭和40年代のほ場整備時のキャタピラーによるものとみられる痕跡が見受けられ、搅乱土と判断される。この搅乱土層(第3層)上面からは北西～南東方向の暗渠が掘り込まれる。当該期の遺構は、その遺物の出土状況から削平された可能性も考えられるが、検出されなかった。

第4トレンチ(Tr4)〔第4・8・17図 図版1・13〕

第3トレンチの西約80m、段丘上の水田に設定した東西方向に長い $3 \times 7\text{m}$ のトレンチで、地表面標高は約41.5mである。地表面下0.8m程度の標高40.7m付近まで掘下げを行った。

地表面下20cm程度の耕土(第1・2層)下、灰黄褐色粘質土層(第3層)～黒褐色粘質土層(第5層)が遺物包含層で、古代～中世の土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器片が出土している。以下は無遺物層の黒色粘質土層(第6層)を挟んで、標高約41.1mで地山とみられるにぶい黄褐色粘土層(第7層)となる。

出土遺物のうち遺存状態の比較的良好な土鍋(2)、羽釜(3)を図化した。(2)は口縁端部を丸くおさめ、頸部から浅い張りをもって下方へ続く。調整は、体部外面はハケ目、内面はヘラ削り後ナデ調整がなされる。(3)は口縁端部が僅かに内傾する面をもち、外面は鍔部貼り付けのちヨコナデ、内面はハケ目のち一部ナデ調整である。

なお、遺構としては時期不明の南北方向に延びる杭列が検出されたほかには検出されなかった。

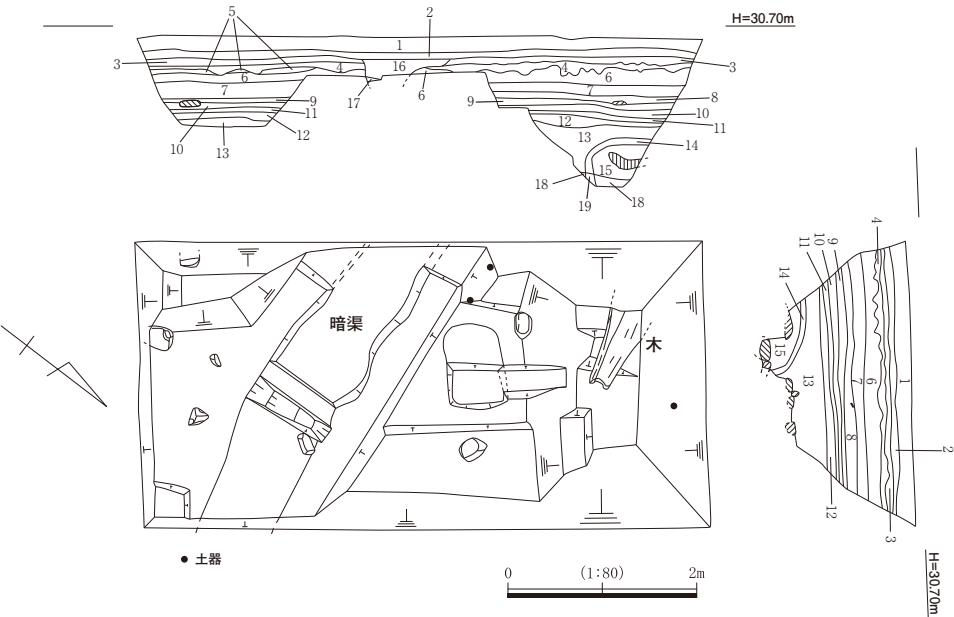
第5トレンチ(Tr5)〔第4・9図 図版1〕

市道曳田中井手線東側の水田北隅、路肩から3.5mに位置する。トレンチの規模は $3 \times 3\text{m}$ である。地表面の標高は、約41.4mである。

地表面下約30cmまで掘り進めたところ、耕作の影響を受けていないと考えられる黒色粘土を検出した。トレンチ中央よりやや東側において角礫を含む砂利が多く検出され、ビニール管を使用した南東～北西方向の暗渠が確認された。またトレンチ北西側で暗渠と同様の角礫を含む砂利層が検出され、湧水が多くみられたため、暗渠に関連する施設と判断した。これらを避けて黒色粘土を掘り下げたところ、トレンチ南西部で砂や礫を多く含む黒色粘土からなる第8層の上面で杭1を検出した。さらに掘り下げたところ約30cm北で杭2を検出した。

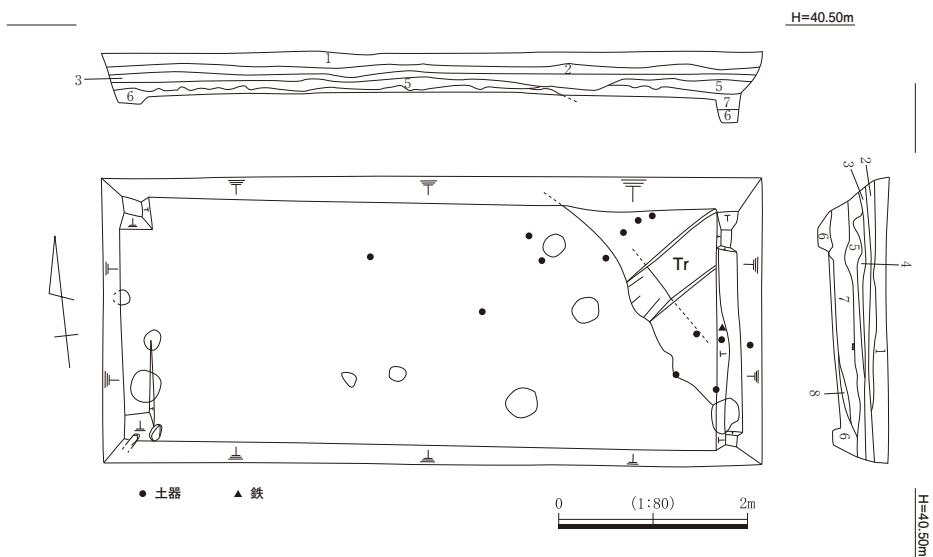
土層堆積状況は、標高41m付近までは、耕作土(第1～6層)である。地表から約40cmを測る。第3～5層は暗渠に係る層である。第7層は黒色粘土で、厚さは約20cmを測る。炭化物を含む。第8層は砂粒を多く含む黒色粘土で、礫を多く含んでいる。第9層は青灰色砂礫である。

遺物は、耕作土および暗渠埋土中から須恵器片2点が、陶器片、近世以降の瓦片とともに出土した。



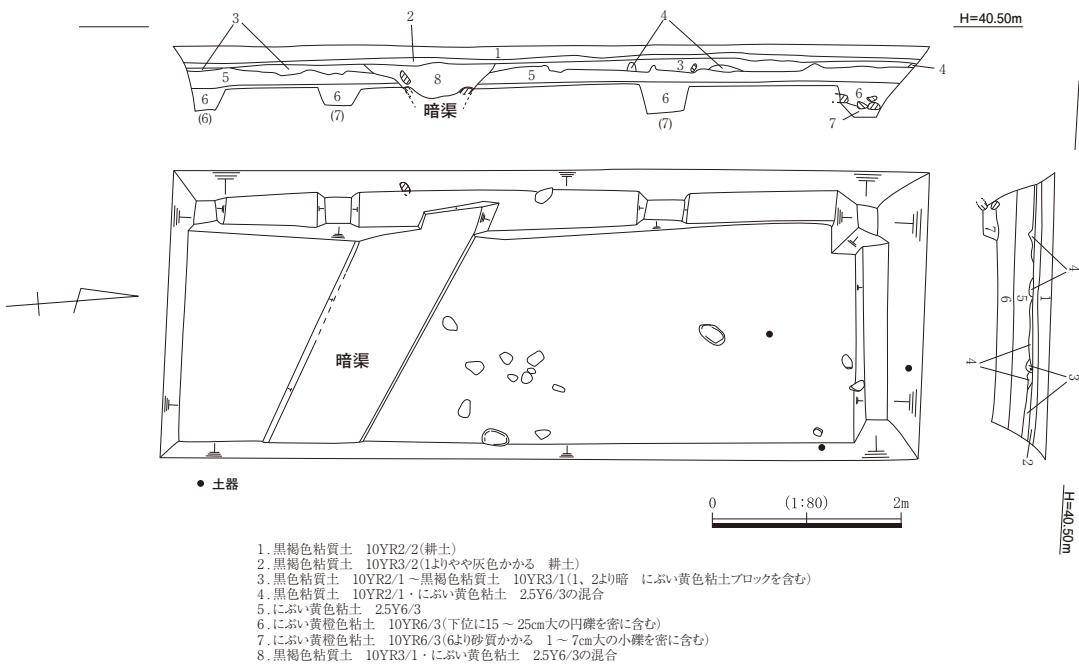
1. 黒褐色粘質土 10YR3/2～灰黄褐色粘質土 10YR4/2(耕土)
 2. 灰黄褐色粘質土 10YR5/2(1よ明 0.3～2.5cm大の小礫を含む 0.2cm大の炭片を僅かに含む マルチやナイロンヒモ等の現代ゴミを含む 耕土)
 3. 褐灰色粘質土 7.5YR4/1(上面にプラスチックゴミを含む)
 4. 明黄褐色砂 10YR7/6(褐灰色粘質土ブロックを含む 土師器片を僅かに含む)
 5. にわい・明黄褐色粘土 10YR4/3(0.2cm大の小礫を含む 0.2cm大の炭片を僅かに含む)
 6. 黑褐色粘土 10YR3/2～10YR2/2(0.2～0.5cm大の小礫を多く含む 2～3cm大の礫を含む 0.2cm大の炭を僅かに含む 土師器片を僅かに含む)
 7. 褐灰色粘土 10YR4/1(0.2～1cm大の小礫を僅かに含む 0.2cm大の炭片を含む 土師器片を僅かに含む)
 8. 灰黄褐色粘土 10YR5/2(ベヤシルかかる 0.2～0.5cm大の炭片を含む 土師器片を多く含む)
 9. にわい・黄褐色シルト 10YR5/3(0.5～1cm大の炭を含む 土師器片を含む)
 10. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2
 11. にわい・黄色砂 25Y6/4
 12. にわい・黄褐色砂 10YR5/3～10YR4/3(褐色粘土を含む 0.3cm大の炭を含む)
 13. 灰黄褐色砂 25Y6/2(2cm大の円礫を僅かに含む 5～20cm大の円礫を含む)
 14. 灰黄褐色砂 25Y6/2(上縁に明黄褐色無機質分を層状に含む)
 15. 綠灰色粘土 10G5Y1(褐色粘土+10YR4/1を含む)
 16. 黄褐色粘質土 10YR5/2・褐灰色粘質土 7.5YR4/1の混合(暗渠埋土)
 17. 3～5cm大の碎石層(暗渠埋土)
 18. 暗灰黃色砂 25Y4/2(やや中砂で粗砂及び1～4cm大の円礫を多く含む 20～30cm大の円礫を含む)
 19. 暗灰黃色砂 25Y4/2(黄褐色無機質分を多く含む)

第5図　曳田所在遺跡 第1トレンチ実測図

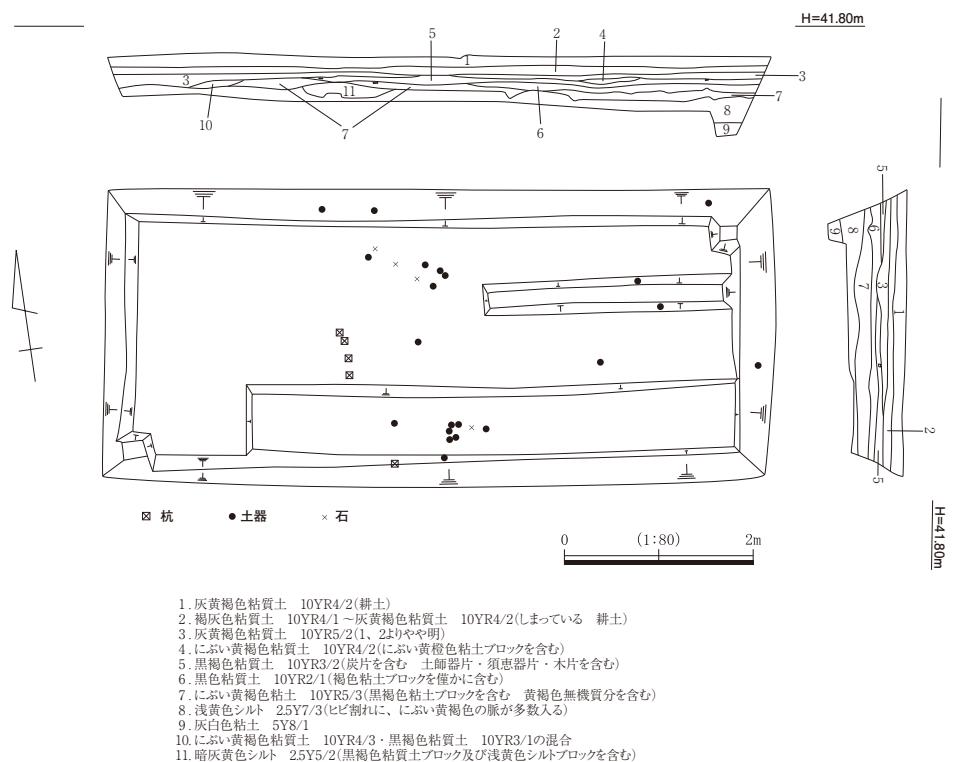


1. 黒褐色粘質土 10YR2/2～10YR2/3(耕土)
 2. 黒褐色粘質土 10YR2/2(耕土「まついい」)
 3. 黒褐色粘質土 10YR3/1(1、2)りやや褐灰色粘質土かかる 明黄褐色ロームブロックを含む)
 4. 黒褐色粘質土 10YR3/2(3、5)りやや明 明黄褐色ロームブロックはごく僅かしか含まない)
 5. 黒褐色粘質土 10YR2/2(1、2)りやや暗 1～5cm大の明黄褐色ロームブロックを密に含む 須恵器片を含む ナイロン片・プラスチック片・ガラス片・陶器片を含む)
 6. 明黄褐色ローム 10YR6/8(堆山)
 7. 黑色粘質土 10YR2/1～黒褐色粘質土 10YR2/2(明黄褐色ロームブロックを含む 土師器片を含む)
 8. 暗褐色粘質土 10YR3/3(明黄褐色ロームを多く含む)

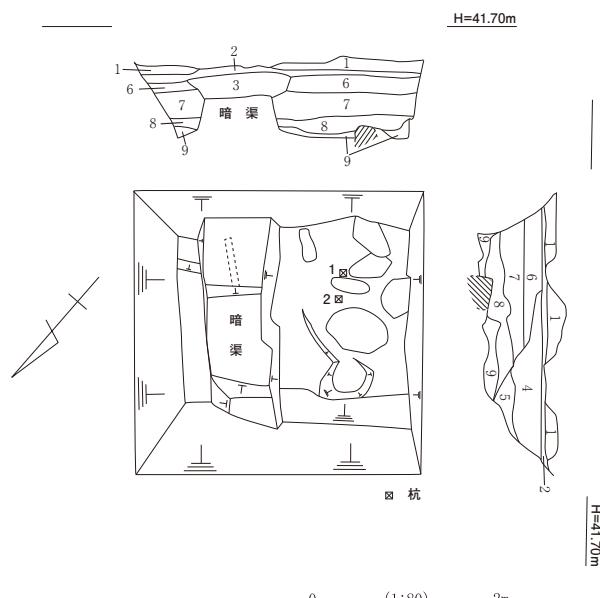
第6図　曳田所在遺跡 第2トレンチ実測図



第7図　曳田所在遺跡　第3トレンチ実測図

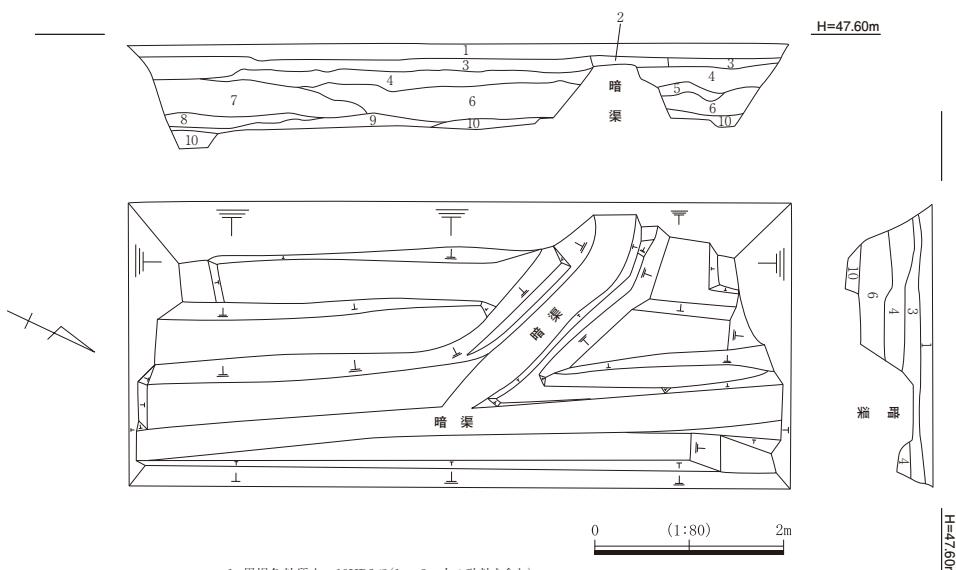


第8図　曳田所在遺跡　第4トレンチ実測図



1. 褐灰色粘質土 10YR4/1(耕作土 鉄分多し)
2. 褐灰色粘質土 10YR4/1(耕作土 1より鉄分少い)
3. 黒色粘土 N2/0²褐灰色粘質土 10YR4/1がブロック状に混在(2cm大のオリーブ灰色粘土ブロック・3~5cm大の礫を含む 暗渠埋土)
4. 黑褐色粘質土 10YR3/1(5~10cm大の黒色粘土ブロック・1~5cm大の礫を含む 明黄褐色粘土ブロックを多く含む 暗渠に係る埋土)
5. 黑褐色粘質土 10YR3/1(1~20cm大の礫を多く含む 暗渠に係る埋土)
6. 褐灰色粘質土 10YR4/1(10cm大のオリーブ灰色粘土ブロック・10cm大の礫・5mm大の炭化物を含む)
7. 黑色粘土 10YR2/1(5cm大の礫・5mm大の炭化物を含む)
8. 黑色粘土 10YR2/1(砂粒を多く含む 1~30cm大の礫を多く含む)
9. 青灰色砂礫 5BG5/1(大小の礫を多く含む 60cmを超える礫も含む)

第9図 曜田所在遺跡 第5トレンチ実測図



1. 黑褐色粘質土 10YR3/2(1~2mm大の砂粒を含む)
2. 灰黃褐色粘質土 10YR4/2
3. 灰黃褐色粘質土 10YR4/2(黄色土ブロックを含む マンガン沈着)
4. 明黄褐色粘質土 2.5Y6/6(黑色土ブロックを含む)
5. 黑褐色粘質土 10YR3/1(褐色土ブロックを含む)
6. 黑色粘質土 10YR2/1(黄色土ブロックをすかに含む)
7. 黑色粘質土 2.5Y2/1(黄色土ブロックを含む)
8. 黑色粘質土 10Y2/1(5mm以下の礫を含む 黄色土ブロックを含む)
9. 灰色粘質土 7.5Y5/1(黑色土ブロックを含む やや砂質)
10. 灰色粘質土 10Y5/1(10cm大の礫を含む)

第10図 曜田所在遺跡 第6トレンチ実測図

第5層中からは板状木製品小片1点が出土した。

第6トレンチ(Tr6)〔第4・10図 図版1〕

県道196号線から河原町八上スポーツ広場を越えて約180m北西に進んだ地点の南西の水田の北東側、路肩から3.5mに位置する。トレンチの規模は東西3×南北7mである。地表面の標高は約47.5mである。

地表面下約15cmまで掘り進めたところ、ビニール袋と平瓦を使用したY字形に接する2条の暗渠の掘り込み面を検出した。

土層堆積状況は、標高47.2m付近までは、耕作土である。地表から約30cmを測る。第1～3層は耕作に係る層で、第2層は暗渠に係る層である。第4層は明黄褐色粘質土で黒色土ブロックを含む。第5～8層まで褐色土ブロックや黄色土ブロックを含む黒色系粘質土が続く。第9層は灰色粘質土で黒色土ブロックを含んでいる。第4～9層は、ほ場整備に係る層と考えられる。第10層は灰色粘質土で、10cm大の礫を含んでいる。

遺物は、耕作土および暗渠埋土中やほ場整備に係る層から風化が激しい土師器小片や瓦質土器片が、近世以降の陶磁器片や瓦片とともに出土している。

第7トレンチ(Tr7)〔第4・11図、図版2〕

第6トレンチの南西約70mに位置する。トレンチの規模は東西3×南北7mである。地表面の標高は約47.5mである。

地表面下約30cmまで掘り進めたところ、褐灰色粘質土(第4層)を検出した。その上面からトレンチ南東側でビニール袋と平瓦を使用した暗渠を検出した。また西側ではにぶい黄褐色粘土ブロックを多く含む褐灰色粘質土(第7層)や黒褐色粘質土を含む淡黄色粘土(第8層)が広がっていた。さらに第4層を約15cm掘り下げたところ、灰白色粘土を検出した。トレンチ南東部分の暗渠の北側からは10cm大のにぶい黄褐色粘土ブロックを多く含む黒褐色粘質土を埋土とする土坑状の落ち込みが検出された。

土層堆積状況は、標高47.4m付近までは耕作土(第1～3層)である。第3層は、暗渠に係る層である。第4・5・7・8層は、黄褐色系粘土の大小ブロックを含む層で、ほ場整備に係る層と考えられる。第6層は、黒褐色粘質土で土坑状の落ち込みの埋土である。にぶい黄褐色粘土のブロックを多く含み、ほ場整備に係る土層に近似している。第9層は灰白色粘土である。

遺物は、出土しなかった。

第8トレンチ(Tr8)〔第4・12図 図版2〕

第7トレンチの南西約100mに位置する。トレンチの規模は東西3×南北7mである。地表面の標高は約47.5mである。

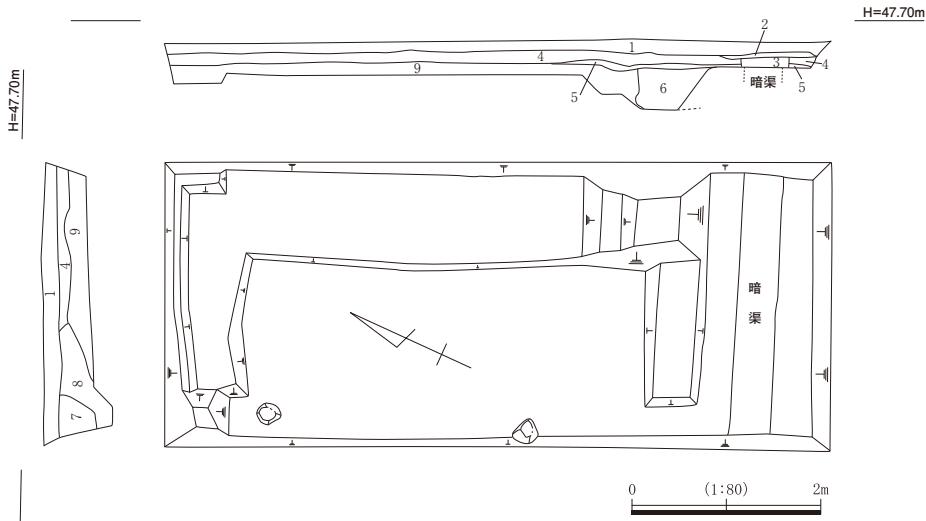
地表面下約20cmまで掘り進めると、瓦とビニール袋などを使用した暗渠が検出された。これを避けて掘り進めたところ、標高47m付近で径50cm以上を測る礫を含む石列とその周囲に打たれた8本の杭列およびこれらに並行する溝状の落ち込み1条をトレンチ南側で検出した。

土層堆積状況は、標高47.3m付近までは耕作土(第1～4層)である。第3・4層は、暗渠に係る層である。第5～16層は、異なる色調の粘質土の大小ブロックを含む層で、ほ場整備に係る層と考えられる。第17～20層は、黒褐色のシルトと粘質土で溝状の落ち込みの埋土である。第23～26層は異なる色調の粘質土のブロックを含む層である。第27層は粘土層である。

遺物は、表土および耕作に係る層からは、土師器小片、須恵器小片、近世以降の陶磁器片、瓦片、窯道具が出土した。溝状の落ち込みの埋土である第18～20層からは近世以降の陶器小片が出土した。また出土した層は不明であるが、溝状の落ち込みの埋土より下層で、タタキ目を持つ須恵器小片1点が出土している。

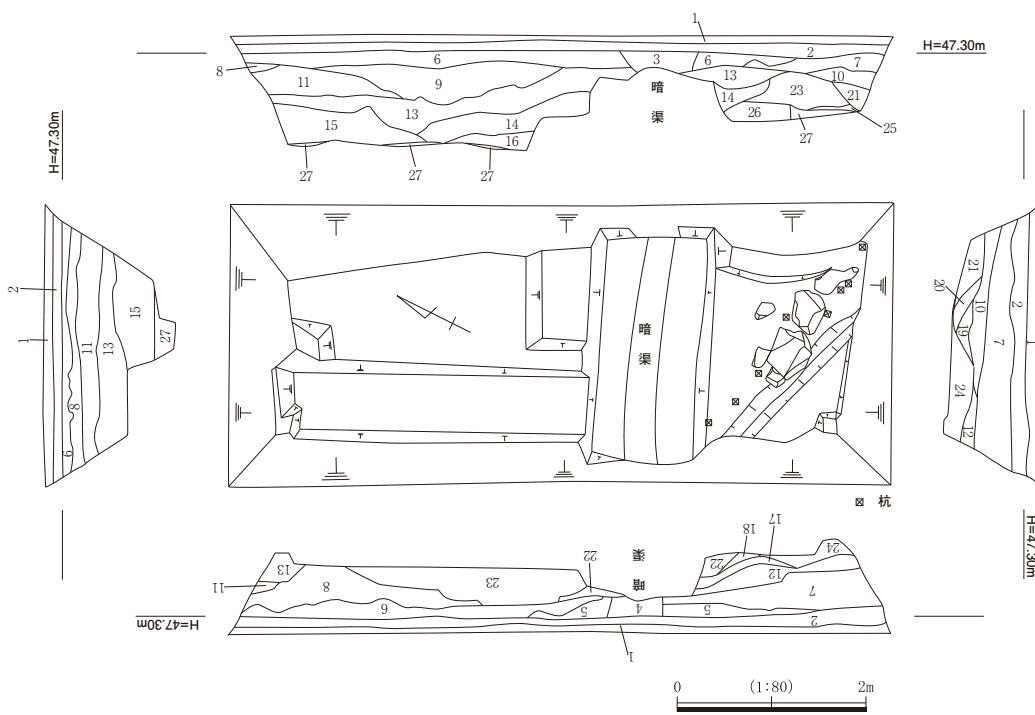
第9トレンチ(Tr9)〔第4・13図 図版2〕

第8トレンチの南西約60mに位置する。トレンチの規模は東西7×南北3mである。地表面の標高は



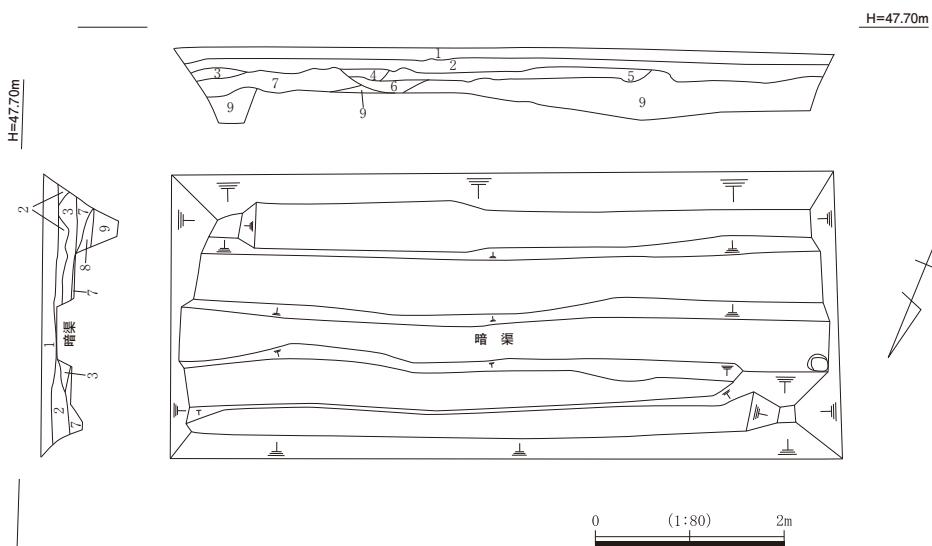
1. 黒褐色粘質土 10YR3/2(1~2mm大の砂粒を含む)
 2. 鍔灰色粘質土 10YR5/1(5~10mm大の黄褐色粘土ブロックを含む)
 3. にぶい黄橙色粘質土 10YR7/4(暗渠埋土)
 4. 鍔灰色粘質土 10YR4/1(5~20mm大の黄褐色粘土ブロックを含む)
 5. 明黄褐色粘質土 10YR6/6(黒褐色粘土ブロックににぶい黄褐色粘土ブロックを多く含む)
 6. 黒褐色粘質土 10YR3/1(10cm大のにぶい黄褐色粘土ブロックを多く含む)
 7. 鍔灰色粘質土 10YR4/1(10cm大のにぶい黄褐色粘土ブロックを多く含む)
 8. 淡黄色粘土 25Y8/4(一部黒褐色粘土を含む)
 9. 灰白色粘土 25Y8/1(一部鉄分の酸化により淡黄色・明黄褐色を呈する)

第11図　曳田所在遺跡 第7トレンチ実測図



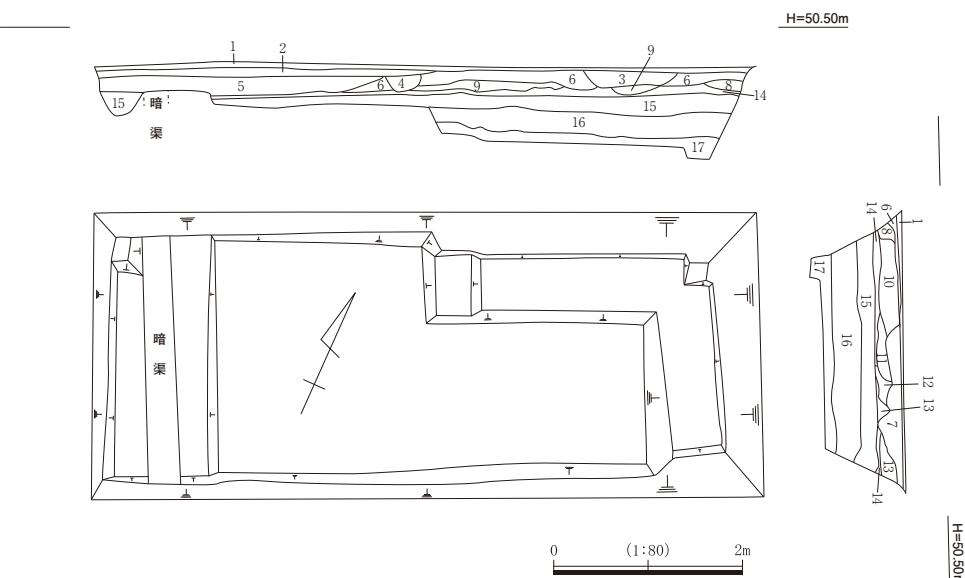
1. 黒褐色粘質土 2.5Y3/2(1~2mm大の砂粒を含む)
 2. 黒褐色粘質土 2.5Y3/2(1~2mm大の砂粒を含む) 黄色土ブロックを含む マンガン沈着
 3. 黑褐色粘質土 10YR3/2(黒色土ブロック・灰色土ブロックを含む) 暗渠埋土
 4. 黑褐色粘質土 2.5Y3/1(白色土ブロックを含む 上部にマンガン沈着 暗渠埋土)
 5. 黑褐色粘質土 2.5Y3/1(黄色土ブロックを含む 上部にマンガン沈着)
 6. 鍔灰色粘質土 10YR4/1(灰白色ブロックを含む 上部に植物遺体)
 7. 黑色粘質土 2.5Y2/1(黄色土ブロックを多く含む 下部に植物遺体をブロック状に含む)
 8. オリーブ黄色粘質土 5Y6/3(黒色土ブロックをまじに含む)
 9. 淡黄色粘質土 2.5Y7/4(黒色土ブロック・灰色シルトブロックを含む)
 10. 黑褐色粘質土 2.5Y3/1(黄色土ブロックを含む)
 11. 黑褐色粘質土 10YR2/2(白色土ブロック・灰白色ブロックを含む)
 12. 黑褐色粘質土 2.5Y3/1(黄色土ブロックを含む)
 13. 黑色粘質土 7.5YR2/1(黄灰色土ブロックを含む)
 14. 黑色粘質土 7.5YR1.7/1(灰白色土ブロックをわずかに含む)
 15. 黒色粘質土 10YR2/1(黄色土ブロック・灰黄色土ブロックを多く含む)
 16. 黄褐色粘質土 2.5Y4/1(黄色土ブロック・黒色土ブロックを含む)
 17. 黑褐色シルト 7.5YR3/1(砂粒を多く含む)
 18. 黑褐色粘質土 10YR3/1(砂粒を多く含む)
 19. 黑褐色シルト 7.5YR3/1(砂粒を多く含む)
 20. 黑褐色粘質土 10YR3/3(砂粒を多く含む)
 21. 黑色粘質土 10YR2/1(5mm前後の礫を含む)
 22. 黑褐色粘質土 10YR3/1(砂粒を含む)
 23. 黄褐色粘質土 10YR5/6(砂粒を含む) 褐色土ブロックを含む
 24. 黄褐色粘質土 2.5Y5/4(黒褐色土ブロックを含む)
 25. 灰白色粘質土 10YR8/1(褐色土ブロックを含む)
 26. 褐黃褐色シルト 10YR6/2(白色粘質土ブロックを含む)
 27. にぶい黄橙色粘土 10YR6/3(砂粒を含む)

第12図　曳田所在遺跡 第8トレンチ実測図



1. 褐灰色粘質土 10YR4/1
2. 黒色粘質土 10VR2/1(2cm大の黄褐色粘質土ブロックを少量含む)
3. 褐灰色粘質土 10VR4/1(1 ~ 20cm大の黄褐色粘質土ブロックを多く含む)
4. 褐灰色粘質土 10YR4/1(1 ~ 10cm大の黄褐色粘質土ブロックを多く含む)
5. 褐灰色粘質土 10YR4/1(1 ~ 10cm大の黄褐色粘質土ブロックを少量含む)
6. 暗灰色粘土 N3/1(1 ~ 10cm大の黄褐色粘質土ブロックを含む)
7. 褐灰色粘土 10YR4/1(1 ~ 10cm大の黄褐色粘質土ブロックを多く含む)
8. 明黄褐色粘土 10YR5/6(15cm大の青灰色粘土ブロックを含む)
9. 明黄褐色粘土 10YR7/6(1cm大の黒褐色粘質土ブロックを少量含む 砂を少量含む 下部は灰白色10YR8/1 ~ 8/2を呈する)

第13図　曳田所在遺跡 第9トレンチ実測図



1. 黒褐色粘質土 10YR3/1(表土)
2. 黒褐色粘質土 10YR2/1(鉄分沈殿 下部に砂を含む)
3. 黒褐色粘質土 10YR2/1(10 ~ 20cm大の黄褐色粘質土ブロックを含む)
4. 黒褐色粘質土 10YR3/1(10 ~ 20cm大の礫を含む)
5. 黒褐色粘質土 10YR2/1(10 ~ 20cm大の黄褐色粘質土ブロックを含む)
6. 黑褐色粘質土 10YR2/1(5cm大の礫 3cm大の黄褐色粘質土ブロックを含む)
7. 黑褐色粘質土 10YR2/1(1 ~ 10cm大の黄褐色粘質土ブロックを含む)
8. 黑褐色粘質土 10YR2/1(1 ~ 10cm大の灰黄褐色粘土ブロックを含む)
9. 黑褐色粘質土 10YR2/1(5 ~ 10cm大の礫 5cm大の黄褐色粘質土ブロックを含む)
10. 黑褐色粘質土 10YR2/1(10cm大の礫 10cm大の灰黄褐色粘土ブロックを含む)
11. 褐灰色粘土 10YR4/1(5cm大の礫 3cm大の灰黄色粘土ブロックを含む)
12. 褐灰色粘土 10YR4/1(5cm大の礫 10cm大の灰色粘土ブロックを含む)
13. 褐灰色粘土 10YR4/1(3cm大の灰黄褐色粘土ブロック・にびい黄橙色粘土ブロックを少量含む)
14. 褐灰色粘土 10YR4/1(3cm大の灰黄褐色粘土ブロック・にびい黄橙色粘土ブロックを少量含む)
15. 浅黄褐色粘土 10YR8/3(上部は酸化により赤みを帯びる 砂を含む)
16. 灰白色粘土 10YR7/1(一部酸化により橙色を帯びる 砂を少量含む)
17. 灰白色粘土 10YR8/1(一部酸化により橙色を帯びる 砂を含む)

第14図　曳田所在遺跡 第10トレンチ実測図

約47.5mである。

地表面下約15cmまで掘り進めたところ、黒色粘質土を検出し、上面からトレンチ中央付近を東西に縦断する暗渠を検出した。そのため暗渠を挟んで両側を掘り下げた。

土層堆積状況は、標高47.1m付近までは耕作土(第1～5層)である。第6層は、暗灰色粘土で上層の各層に含まれる黄褐色粘質土ブロックを含んでいる。第7・8層は粘土で、色調が異なる大型の粘土ブロックを含んでいる。第9層は、明黄褐色粘土で、下部は灰白色を呈していた。

遺物は、第1～3層で出土した。須恵器片5点、土師器片4点が、近世以降の染付磁器皿片、陶器片、瓦片や数種の窯道具とともに出土した。

第10トレンチ(Tr10)〔第4・14図 図版2〕

市道天神原中井線南西側の水田東側部分、路肩から6mに位置する。トレンチの規模は東西7×南北3mである。地表面の標高は約50mである。

この地点は、ほ場整備後に水田として利用されたのちに、養殖池として造成されていたため、表土はたいへん薄く5cmほどであった。表土下は、黒褐色粘質土が約25cm堆積し、これを掘り下げたところトレンチの西側で暗渠が検出された。

土層堆積状況は、標高49.8m付近までは表土と大小の黄褐色粘質土などのブロックを含む黒褐色粘質土(第1～10層)が堆積している。第11～14層は褐灰色粘土が検出された。第14層はたいへん薄いが、トレンチのほぼ全域から検出された。第15～17層は粘土層で、第15層は酸化により浅黄橙色を呈している。

遺物は、黒褐色粘質土中から近世以降の窯道具、褐灰色粘土中から近世以降の燈明皿片、陶器片が出土した。

第11トレンチ(Tr11)〔第4・15図 図版2〕

第10トレンチの南西約60mに位置する。トレンチの規模は東西7×南北3mである。地表面の標高は約50.1mである。第10トレンチ同様、養殖池として造成されていたため、表土は10cm程であった。第10トレンチで検出された黒褐色粘質土はトレンチの北東側でのみ検出された。

第1・2層を掘り下げたところトレンチの中央で南北に走る溝状の落ち込みが1条検出された。

土層堆積状況は、標高50m付近までは表土および黒褐色粘質土(第1・2層)である。第3・4層は溝状の落ち込みの埋土である。第5・6層は、ほ場整備に係る層と考えられる。第7・8層はピット状の落ち込みの埋土である。第9層以下は、地山と考えられる。

遺物は、第1～4層で出土した。近世から近代の陶磁器小片、瓦片、窯道具が出土した。

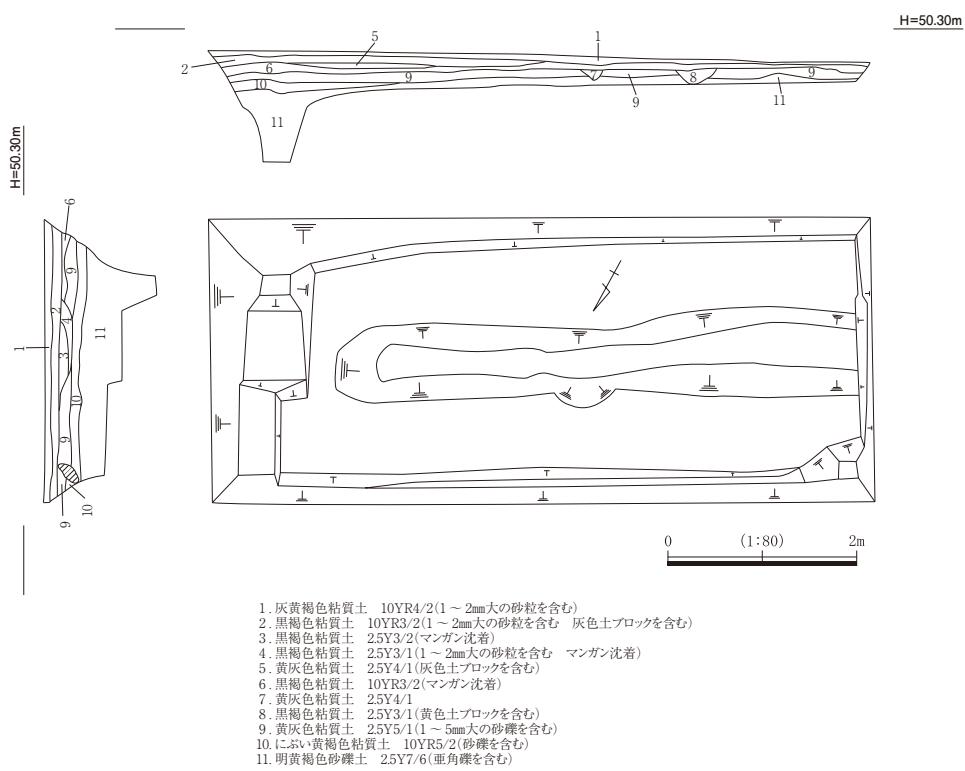
第12トレンチ(Tr12)〔第4・16図 図版2〕

県道196号線北側に位置する北野神社の西約50mに位置する。トレンチの規模は東西7×南北3mである。地表面の標高は約52.4mである。

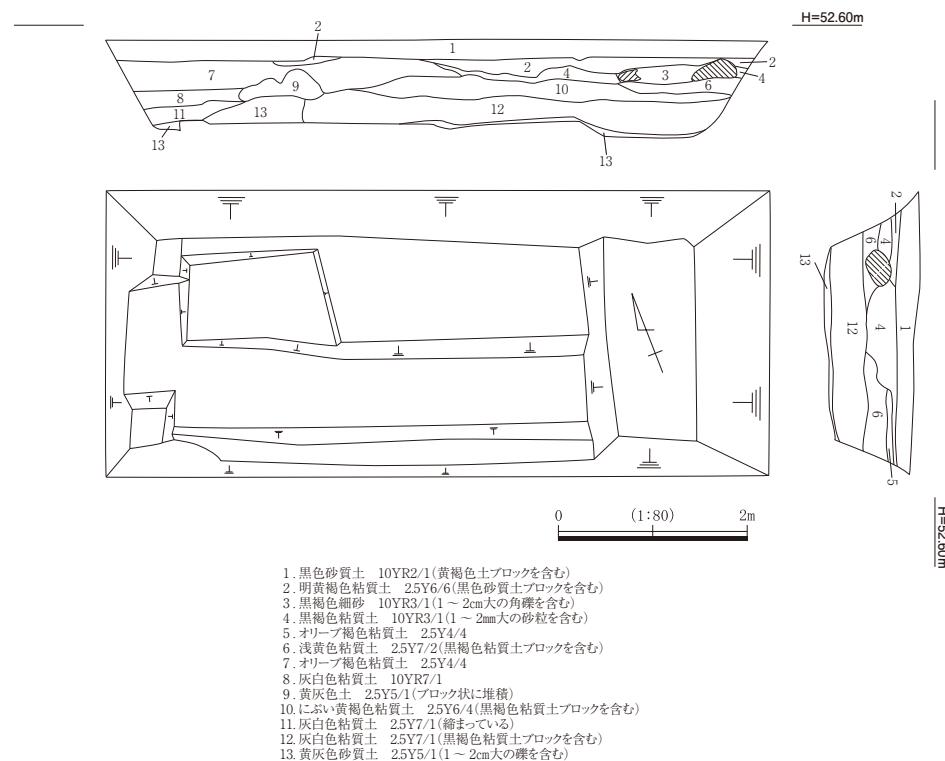
この地点は、畑地として使用されていた。耕作土を除去したところ、両側に石列を伴う溝状の落ち込みが東西方向に1条検出された。

土層堆積状況は、標高52.2m付近までは耕作土である表土(第1層)が堆積している。トレンチ北東には明黄褐色粘質土(第2層)が検出された。第3層は溝状の落ち込みの埋土である。第4層は黒褐色粘質土で、溝状の落ち込みの石列を設置するための層と考えられる。第5～12層はほ場整備等の造成などに係る層と考えられる。第13層は礫を含む砂質土である。

遺物は、第1～4層で出土した。近世から近代の陶磁器片や瓦片、近代のガラス製薬瓶などに混じって土師器小片2点、須恵器小片3点が出土している。



第15図 墓田所在遺跡 第11トレンチ実測図



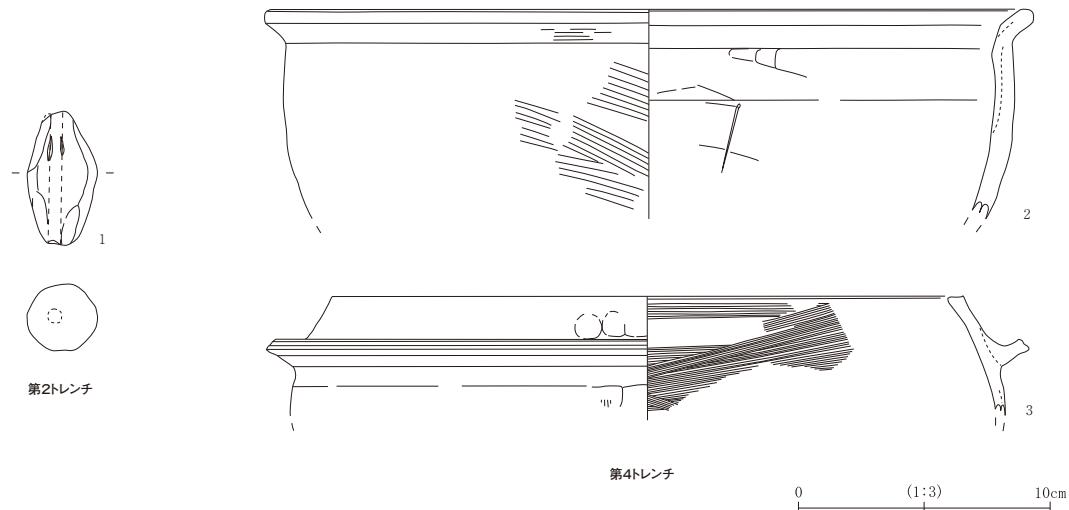
第16図 墓田所在遺跡 第12トレンチ実測図

小結

今回の調査では第2トレンチから溝、ピットとともに古代～中世の土師器・須恵器・陶磁器類等の細片が検出された。また明瞭な遺構は検出されなかったものの、同時期の遺物が第3・第4トレンチから出土しており、ほ場整備時に削平された可能性も考えられる。第5トレンチからは杭、第8トレンチからは石列と杭列が検出された。いずれも詳細な時期は不明であるが、近世以降のものと考えられる。第7トレンチの土坑状の落ち込みは、掘り込み面からほ場整備以降に掘り込まれたと考えられる。第11トレンチの溝状の落ち込みは、出土遺物から近代以降の所産と考えられる。その他のトレンチからは遺構を検出することはできなかった。

遺物は第7トレンチを除く各トレンチから出土している。第2トレンチでは遺構に伴い古代～中世の土師器・須恵器・瓦質土器が出土しており、第1・3・4トレンチでは遺構には伴わないものの同時期の遺物が出土している。第5トレンチ以降は摩耗が著しい土師器・須恵器の細片が出土しているが、いずれも近世以降の遺物が混在している。

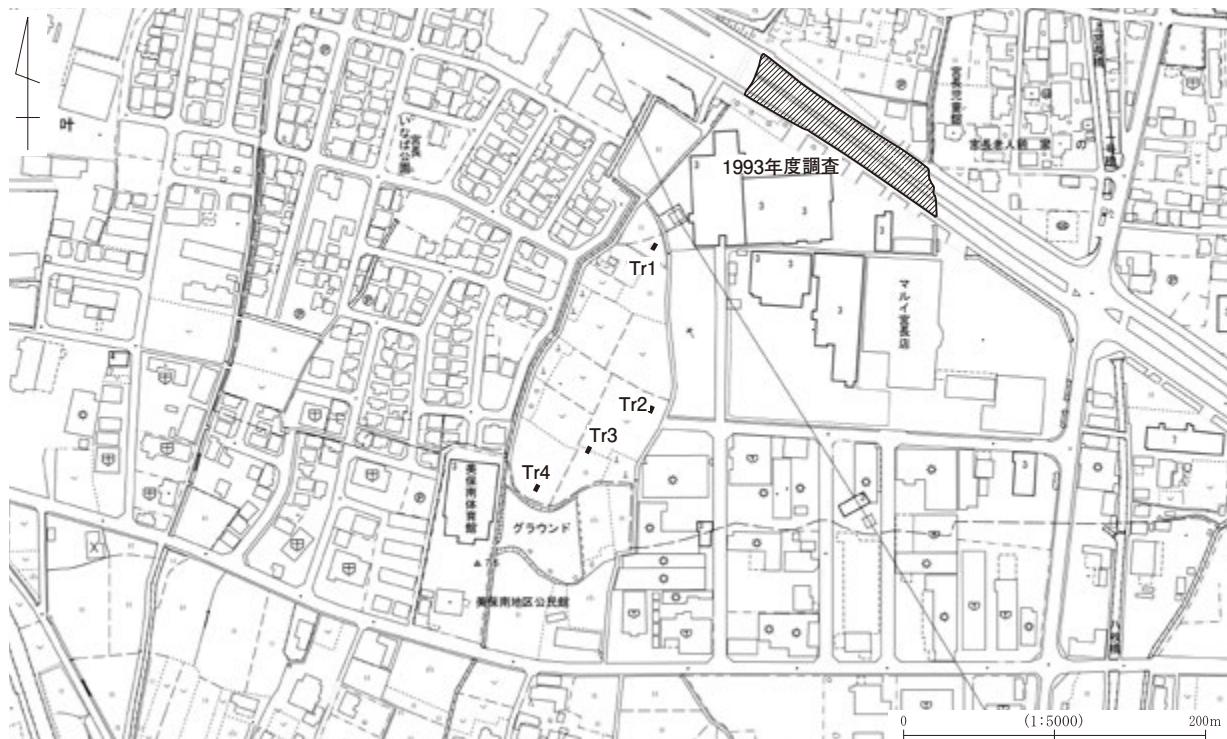
調査の結果、第2～第4トレンチで古代～中世の遺物や遺構が検出できたことから事業実施に当たっては調査を要すると考えられる。第5トレンチ以降は近世以降の遺構や遺物を中心であることから遺跡の範囲外と考えられるが、土師器や須恵器片が出土しており周辺に遺跡が所在する可能性があることから今後の開発等には注意を要する。なお第4トレンチと第5トレンチ周辺は未確認の部分があることから今後とも調査を要する。



第17図　曳田所在遺跡　出土遺物実測図

第3節 宮長竹ヶ鼻遺跡

鳥取市宮長は、千代川下流の沖積低地に立地し、北部を大路川が流れる。鳥取平野南東部の水田地帯に位置し、「因幡国滝房庄 同加納宮永保」と古文書の記載がある事から鎌倉時代には荘園の一部が存在していたと考えられている地域であり、近年宅地や工業団地の開発等でその様相を変えつつある。1993年度に財団法人 鳥取市教育福祉振興会の調査により、古墳時代から中世の時期に比定される遺構を検出している。今回の調査は既往調査地の南西120m、周囲は宅地と工業団地に囲まれた今も畠や水田として利用されている一区画に宅地造成を計画、その事前調査を行ったものである。



第18図 宮長竹ヶ鼻遺跡 調査トレンチ位置図

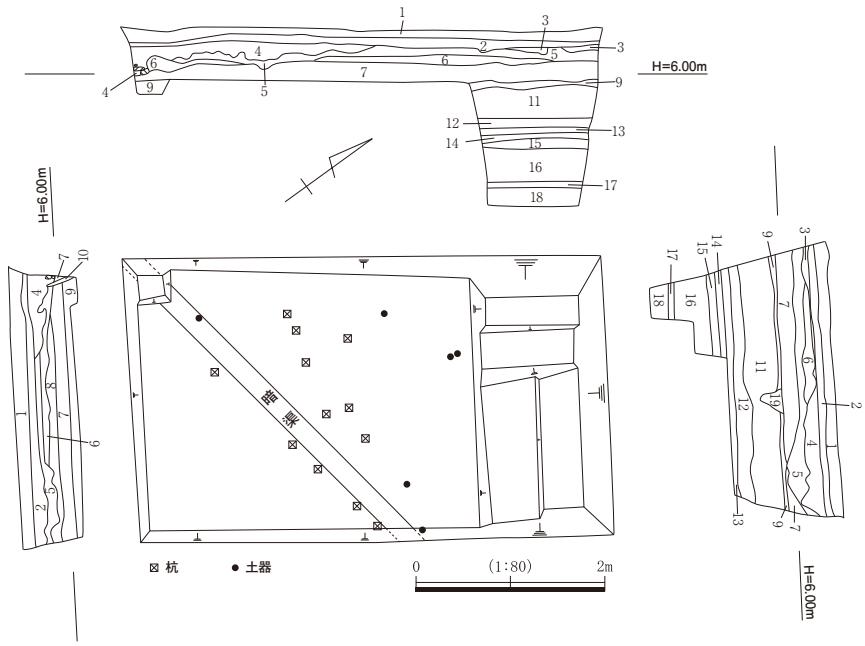
第1トレンチ(Tr1) [第18・19図 図版2]

調査地の最北部に 3×5 mのトレンチを設定した。耕作土下に現水田用の暗渠がある他は整った層序の堆積が続き、標高約4.8mで粘土層となる。第5層(にぶい黄褐色シルト)中には須恵器、土師器、近世陶磁器等が含まれる。第9層(灰黄褐色シルト)上面で土師器細片2点を検出、精査したが遺構は検出されなかった。

第2トレンチ(Tr2) [第18・20・21図 図版2・3・13・14]

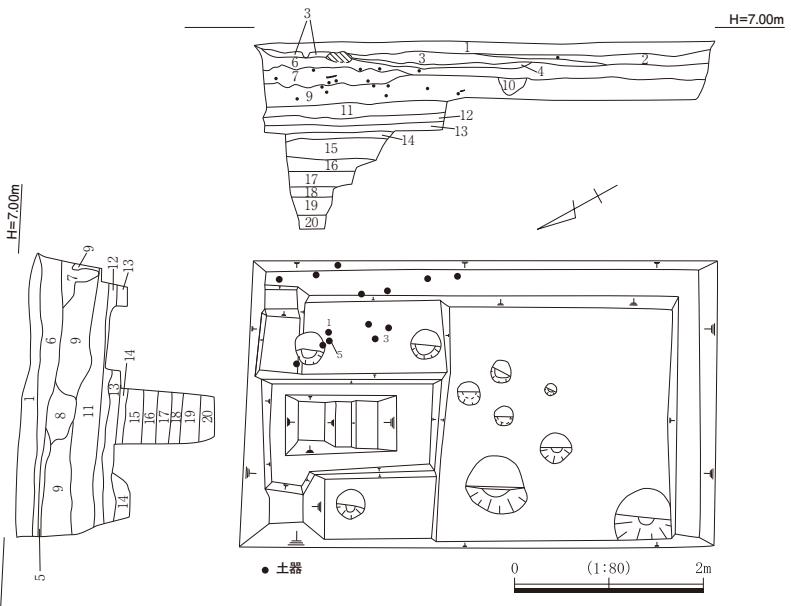
第1トレンチの南100mの現在畠として使用されている箇所に 3×4.9 mのトレンチを設定した。地表面下約28cmの第4層(暗褐色粘質土)には1cm大の円礫と土師器片、下層にはビニールが入り第1～4層が耕土と考えられる。第6層(にぶい黄褐色シルト)には多くの土師器、須恵器等が含まれる。第9層(にぶい黄褐色シルト)上面でピット10基を検出、規模は径20～60cm前後、深さ18～25cmを測る。断面では北西から北東へ標高6.64～6.55m、厚さ30～40cmと東側へ傾斜と厚みをみる。

遺物は須恵器(蓋、体部片)、土師器(甕、竈、赤彩碗)等が含まれ古代の様相をもつ。第13層(褐灰色粘質土～にぶい黄褐色土)から土師器細片1点が出土。第14層(褐灰色粘質土)以下は粘質土となり標高5.3m付近で粘土層となる。第21図は遺構検出面の遺物(1・3・5)を中心に図化したものである。(1)は須恵器蓋である。かえりは短く退化し摘みは輪状を呈す。復元口径14.0cm、器高3.05cm、摘み径



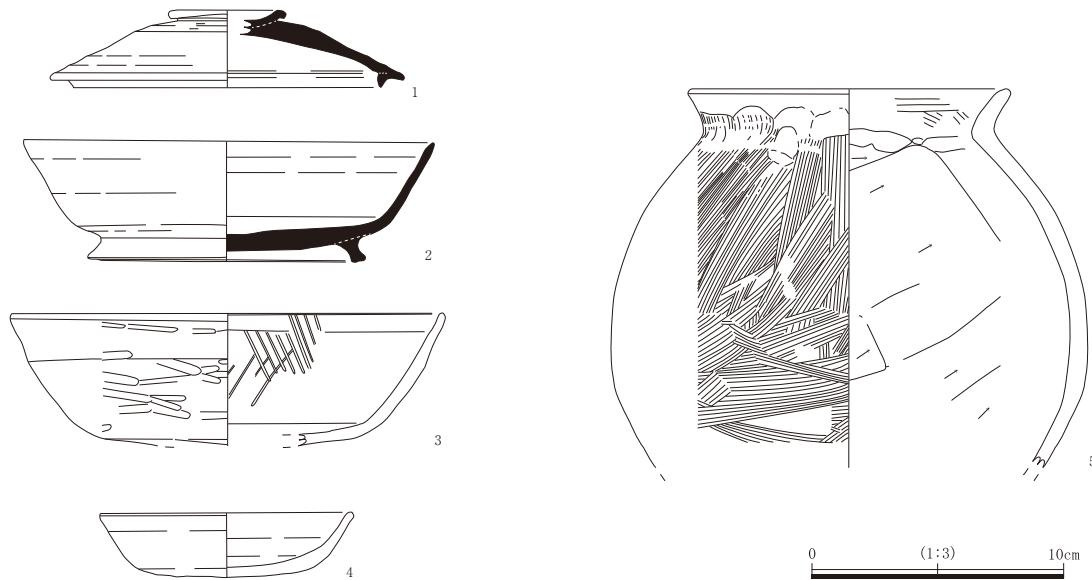
1. 黒褐色シルト 10YR3/2(耕作土)
 2. 褐灰色シルト 10YR4/1(耕作土)
 3. 褐灰色シルト 10YR4/1(鉄分沈着)
 4. 褐灰色シルト 10YR4/1(2~3cm大の礫混じる)
 5. にぶい黄褐色シルト 10YR5/4(鉄分多く沈着 明黄褐色粘質土ブロック混じり 締まる)
 6. 黄褐色シルト 10YR4/2(上位に炭が多く混じる 締まる)
 7. 黄灰色粘砂質土 25Y5/1(マッガントブロック混じる)
 8. 黄褐色シルト 10YR4/2
 9. 広黄褐色シルト 10YR4/2(炭を含む 遺物を含む)
 10. 黄褐色粘質土 25Y4/1(杭埋土)
 11. 黄灰色粘砂質土 25Y5/1
 12. 暗灰黄色粘砂質土 25Y5/2
 13. 黄褐色粘質土 10YR5/2
 14. 灰色粘質土 5Y4/1
 15. 黑褐色粘質土 10YR3/1(炭が僅かに混じる)
 16. 黑褐色粘質土 10YR3/1(15より暗)
 17. 灰色粘質土 5Y4/1(14より暗)
 18. 黑褐色粘土 10YR3/1
 19. 黄褐色シルト 10YR4/2(褐灰色土ブロックを含む)

第19図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第1トレングチ実測図



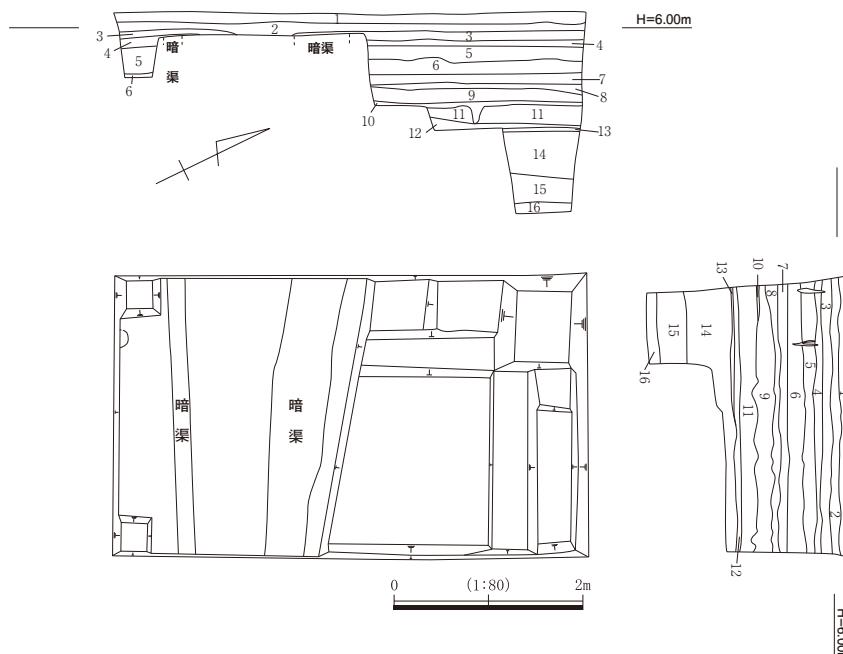
1. 暗褐色シルト 10YR3/3(1~5cm大の礫を含む 砂質)
 2. 暗褐色粘質土 10YR3/3(0.5~2cm大の礫を含む 炭が混じる)
 3. にぶい黄褐色シルト 10YR4/3(灰色土ブロックを含む)
 4. 暗褐色粘質土 10YR3/3(1cm大の礫を含む 下層にビニール)
 5. にぶい黄褐色シルト 10YR4/3(灰色土ブロック 土師器片を含む)
 6. にぶい黄褐色シルト 10YR4/3(砂質 炭片・土師器片を多く含む)
 7. 広黄褐色シルト 10YR4/2(0.5~2cm大の炭片含む 土器片混じる)
 8. にぶい黄褐色シルト 10YR4/3(炭片多く含む 土器片混じる)
 9. にぶい黄褐色シルト 10YR4/3(炭片多く含む 鉄分の沈着有 しっかり締まる)
 10. 広黄褐色シルト 10YR4/2(粘質 僅かに炭片・土師器片が混じる)
 11. 褐灰色シルト 7.5YR4/1(鉄分沈着 2~5mm大の炭が混じる)
 12. にぶい黄褐色シルト 10YR5/3(鉄分沈着)
 13. 褐灰色粘質土 10YR4/1-にぶい黄褐色土 10YR5/4(14より暗)
 14. 褐灰色粘質土 10YR4/1(鉄分沈着多)
 15. 褐灰色粘砂質土 10Y4/1
 16. 褐灰色粘質土 10YR4/1
 17. 暗灰黄色粘砂質土 25Y5/2
 18. 黑褐色粘土 10YR3/2
 19. 黑褐色粘土 10YR3/2(18より明)
 20. 黑褐色粘土 10YR3/1

第20図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第2トレングチ実測図



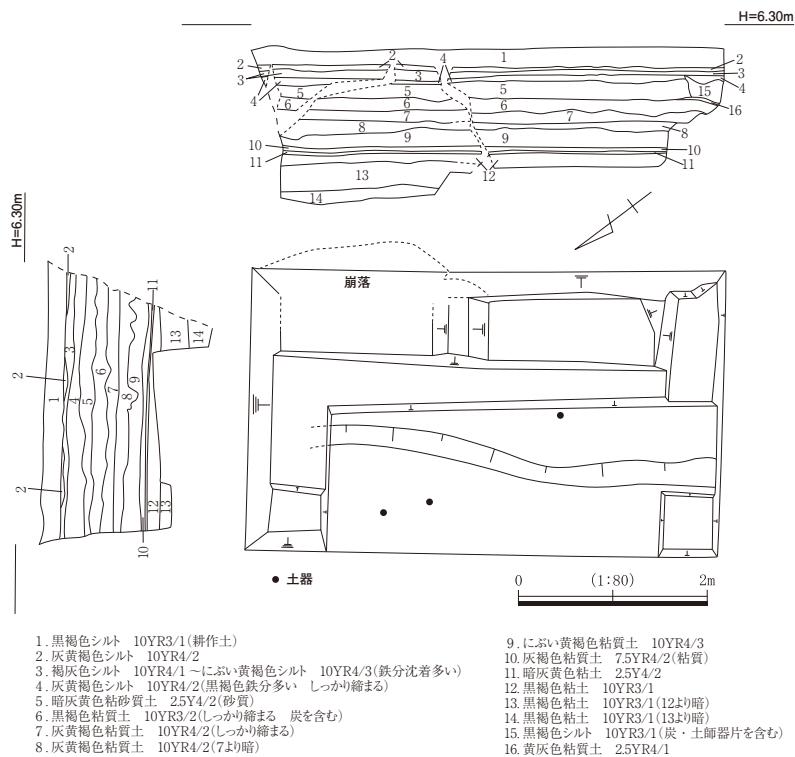
第21図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第2トレンチ出土遺物実測図

は4.7cmを測る。(2)は須恵器高台付杯。底部外面はヘラ削り後の高台貼付を施す。高台は体部のやや内側に貼付され、接地面は高台内側にもつ。底部内面は不定方向のナデを施す。復元口径16.0cm、底径9.8cm、器高は4.8cmを測る。(3)は土師器碗で内外面に赤彩が施される。内面底部螺旋状、体部～口縁部には放射状の暗文が施され、外面には全面に丁寧な磨きが認められる。口径17.6cmを測り焼成は良好である。(4)は小型で手捏ね成形の土師器皿である。器壁は薄く、底部にはマキアゲ痕が認められる。口径10.1cm、器高は2.6cmを測り、焼成は良好である。(5)は土師器甕である。外面体部には刷毛目調整が施され、内面体部は頸部まで丁寧なヘラ削りが施される。口径12.4cm、最大胴径18.8cmを測る。外



- | | |
|---------------------------------------|--|
| 1. 暗褐色粘質土 10YR3/4 | 9. 黒褐色粘土 10YR3/1(8より明 炭が僅かに混じる) |
| 2. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 | 10. 黒褐色粘土 10YR3/1(8より暗) |
| 3. 灰黄褐色粘質土 10YR4/3(よりやや明) | 11. オリーブ黒色粘土 5GY2/1 |
| 4. 灰黄褐色粘質土 10YR4/4(灰色粘土ブロック混じる 鉄分沈着有) | 12. 黒褐色粘土 10YR3/2 |
| 5. 褐灰色粘質土 10YR4/1(砂質 炭を含む 鉄分沈着有) | 13. 灰オリーブ粘土 5Y4/1 |
| 6. 品灰黄色粘質土 2.5Y4/2(砂質 鉄分沈着僅かに有) | 14. 黒褐色粘土 10YR3/1(粘質強 炭を含む) |
| 7. 黑褐色粘質土 10YR2/2(鉄分沈着有 締まる) | 15. 黒褐色粘土 2.5Y3/1(植物繊維入る 0.5mm以下の灰色細粒含む) |
| 8. 黑褐色粘土 10YR3/1 | 16. オリーブ黒色粘土 5Y3/1 |

第22図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第3トレンチ実測図



第23図 宮長竹ヶ鼻遺跡 第4トレンチ実測図

面に黒斑を認めるが、焼成は良好である。古代～中世の様相を示す。

第3トレンチ(Tr3)[第18・22図 図版3]

第2トレンチの南西50mに3×5mのトレンチを設定した。耕作土下に現水田用の暗渠を第3層、第4層(灰黄褐色粘質土)で検出、これらの層序には土師器、陶磁器が含まれる。以下は安定した堆積が続き、第7層(黒褐色粘質土)中から磨滅した縄文土器片7点が出土している。標高約5.4m付近の第8層(黒褐色粘土)以下は粘土層となる。遺構は検出されなかった。

第4トレンチ(Tr4)[第18・23図 図版3]

第3トレンチの南西50mに3×5mのトレンチを設定した。地表面下20cmの耕作土、第2層(灰黄褐色シルト)、第3層(褐灰色シルト)には須恵器、土師器、在地陶器が含まれる。第4層(灰黄褐色シルト)は北側で標高5.7～5.8m、厚さ10～20cmを測り、須恵器、土師器等が含まれる。第4層除去面では、西側への傾斜を確認したが自然地形と考えられる。第5層(暗灰黄色粘砂質土)では土師器片1点、第6層(黒褐色粘質土)中には縄文土器片5点が含まれる。以下は安定した層序が続き、標高約4.9m前後で粘土層となる。遺構は確認されなかった。

小結

今回の調査では、調査区東端の第2トレンチで古代の様相を示す遺構・遺物が検出された。北東側には古墳時代～中世の遺跡である宮長竹ヶ鼻遺跡が立地しており、今回の遺構の検出状況や層序の広がり等からも遺跡は更に東側へ広がるものと推測される。

この結果から、宮長竹ヶ鼻遺跡を検討する基礎資料に加わるものと思われ、今後周辺での開発等には注意が必要である。

第4節 倉見古墳群

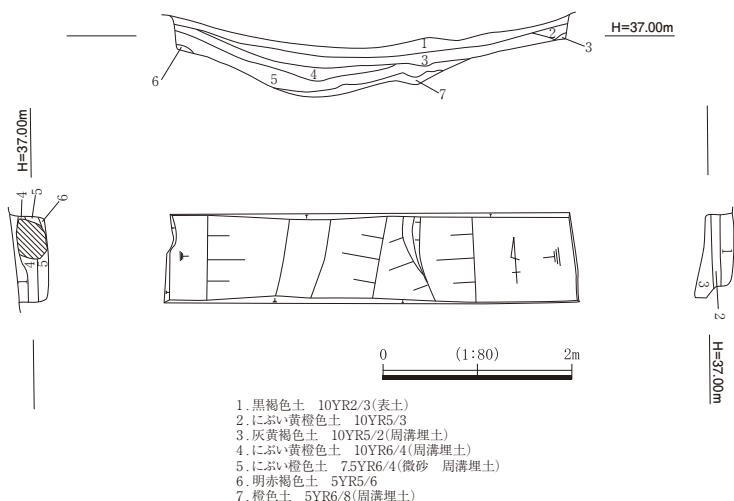
倉見古墳群は、鳥取市高住集落の東に位置し、池と呼称される国内で一番大きい「湖山池」に向けて舌状に突き出た丘陵上に立地しており、丘陵の前面は湖山池の湖岸に耕作されている水田が広がっている。

倉見古墳群が所在する東の丘陵には、「桂見古墳群」、西の丘陵には、「高住古墳群」が展開し、眼下の水田部には、「高住牛輪谷遺跡」・「高住井手添遺跡」・「高住平田遺跡」が所在している。

今回の発掘調査は、一般国道鳥取西道路新設工事に先行する発掘調査で、道路建設に係る計画路線上に1ヶ所の試掘調査トレンチを設定した。



第24図 倉見古墳群 調査トレンチ位置図



第25図 倉見古墳群 第1トレンチ実測図

第1トレーニング(Tr1) [第24・25図 図版3・4]

調査地は、東方に所在する桂見古墳群からの支尾根と湖山池に向けて舌状に突き出た丘陵上の高まりとの間に1×4mの東西トレーニングを設定し、地表下0.5mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10~15cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚15cm程度のにぶい黄橙色土で、東方の支尾根からの流入土である。第3層は、層厚約10cmの灰黄褐色土である。第4層は、層厚10~15cmのにぶい黄橙色土である。第5層は、層厚10~20cmのにぶい橙色土である。第6層は、墳丘の一部を構成する明赤褐色土である。第7層は、周溝底面に薄く堆積した橙色土で、第3~5・7層は古墳築造後に堆積した流入土である。

検出した古墳の周溝は、地山を掘り込んだ幅約2.5m、深さ約0.4mを測る。遺物は検出されなかったことから、築造時期の特定には至らなかった。

小結

今回の道路建設予定地に設定した試掘トレーニングは、1ヶ所で築造時期の特定には至らなかったが、周溝を伴う古墳の所在を確認し、後の詳細調査に向けての成果であった。

第5節 乙亥正屋敷廻遺跡

乙亥正屋敷廻遺跡は、温泉保養地として知られる浜村海岸から2km程内陸に入った鹿野町乙亥正の「重山」集落内に所在し、後背地の丘陵上には「重山古墳群」、水田を隔てた東丘陵には「梶掛古墳群」、「日光古墳群」、「浜村古墳群」、北丘陵には「谷奥古墳群」、「勝見古墳群」が展開し、南方の水田域には「木梨遺跡」が所在しており、多くの遺跡に囲まれた地域となっている。

今回の発掘調査は、一般国道鳥取西道路新設工事に先行する試掘調査で、平成24年度から3年間に渡って10ヶ所の試掘調査を実施しており、その結果広範囲に弥生時代以降の遺構、遺物の所在が確認されている。これを受けた詳細調査が実施されており、試掘調査の結果を裏付けるように多くの遺構、遺物



第26図 乙亥正屋敷廻遺跡 調査トレーニング位置図

が検出され、遺跡の範囲は更に広がる様相を呈していたことから隣接地に1ヶ所のトレンチを設定し、遺跡の拡がりを確認する調査を行った。

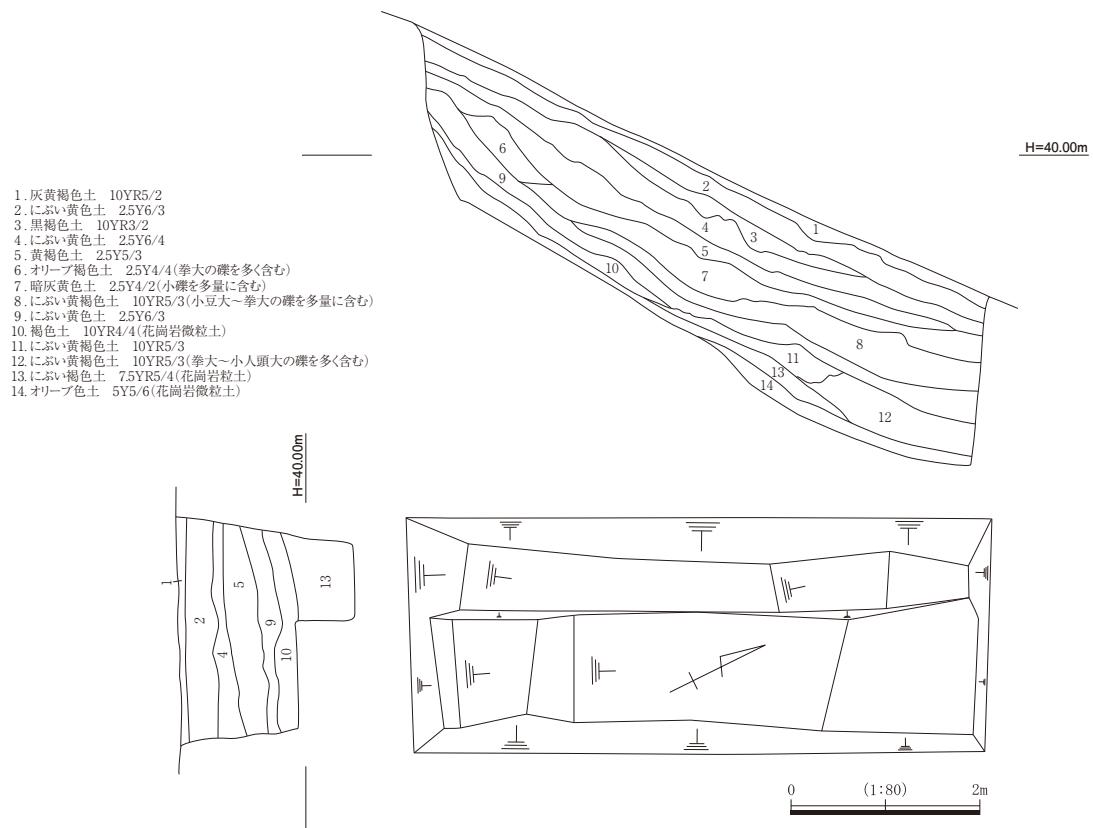
第11トレンチ(Tr11) [第26・27図 図版4]

調査地は、湾状に入り込んでいる谷地形の高所で、詳細調査では、傾斜面を階段状に整地して造られた竪穴式住居群が見つかっており、その隣接地に2.5×6.0mの南北トレンチを設定し、最終的に北西の壁に沿って幅1m、地表下約2mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が、層厚5~20cmで灰黄褐色の表土である。第2層は、層厚10~20cmのにぶい黄色土である。第3層は、トレンチの中程に所在する層厚10~20cmの黒褐色土である。第4層は、層厚15~40cmのにぶい黄色土である。第5層は、層厚10~40cmの黄褐色土である。第6層は、トレンチの南西の一部に所在するオリーブ褐色土で、拳大の礫を多く含む。第7層は、層厚10~40cmの暗灰黄色土で、小礫を多く含む。第8層は、層厚10~50cmのにぶい黄褐色土で小豆大~拳大の礫を多量に含む。第9層は、層厚5~40cmのにぶい黄色土である。第10層は、層厚10~20cmの褐色土で、花崗岩の風化した微粒土である。第11層は、層厚10~35cmのにぶい黄褐色土でトレンチの北側に所在する。第12層は、層厚35~50cmのにぶい黄褐色土で、拳大~小人頭大の礫を多く含む。第13層は、層厚35~50cmのにぶい褐色土で、花崗岩が風化した粒土である。第14層は、層厚10~20cmでオリーブ色の花崗岩が風化した微粒土である。堆積状況は、上方からの流入土が安定的に堆積したもので遺構、遺物ともに検出されなかった。

小結

今回の調査は、詳細調査で検出されている竪穴式住居群の最高所に近接するトレンチであったが、堆積状況及び遺構、遺物等は検出されなかつたことで当該地まで遺跡の範囲が広がらないことが確認された。



第27図 乙亥正屋敷廻遺跡 第11トレンチ実測図

第6節 山手地ユノ谷上分遺跡

山手地ユノ谷上分遺跡は、鳥取市河原町山手地内に所在し、鳥取県の三大河川のひとつである千代川の右岸に位置している。隣接丘陵には「山手古墳群」、「高福古墳群」、「郷原古墳群」が展開し、丘陵裾野の狭い谷地形に沿って水稻が耕作されている。

今回の発掘調査は、鳥取県東部広域行政管理組合による可燃物処理施設建設設計画に伴う事前試掘調査である。現況は、小さな谷地形を介して調査対象の全域が山林に覆われており、造成予定の丘陵北西斜面に遺跡の有無を確認するため、狭谷を奥部へ向かう農道に沿って5ヶ所のトレントを設定し垂直的に調査を行った。



第28図 山手地ユノ谷上分遺跡 調査トレント位置図

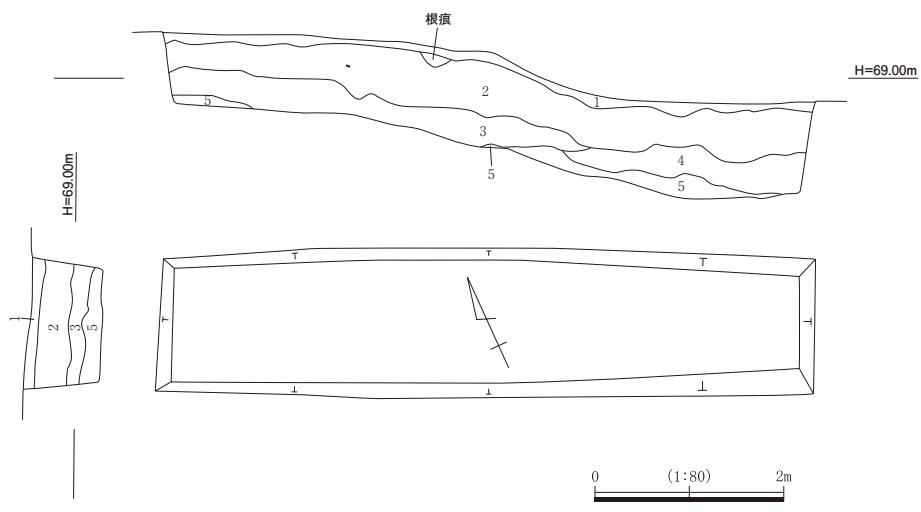
第1トレント(Tr1)[第28・29図 図版4]

第1トレントは、小さな谷地形の北側に位置する丘陵の緩斜地で、丘陵の裾に延びる農道との比高差は約22mを測り、竹林に変貌しているが周囲には果樹棚の残材が見られることから、近年まで果樹栽培が営まれていたものと思われる。従ってある程度の造成は予見されたが、比較的平坦な稜線上に1.5×7.0mの東西トレントを設定し、地表下1mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5~10cm程度で暗赤褐色の粘質土(第2層に比してやや粘質弱)である。第2層は、層厚30~60cmで約2mm程度の炭化物を含む暗赤褐色の客土で、層中から土師器の細片を1点検出した。第3層は、層厚15~40cmでにぶい赤褐色の粘質土中に3~5mm程度の軟質岩ブロックを含む。第4層は、層厚20~40cmで暗赤褐色の粘質土中に中礫の軟質岩ブロックをわずかに含む。第5層は、トレントの東側、西側に見られる層厚10~25cmで赤褐色の粘質土で、層中に中礫の軟質岩ブロックを多く含む。第2層の客土中で土師器片を1点検出したが、造成時と思われる客土中であったことから、上方からの流入と思われる。第3層以下は遺構、遺物とともに検出されなかった。

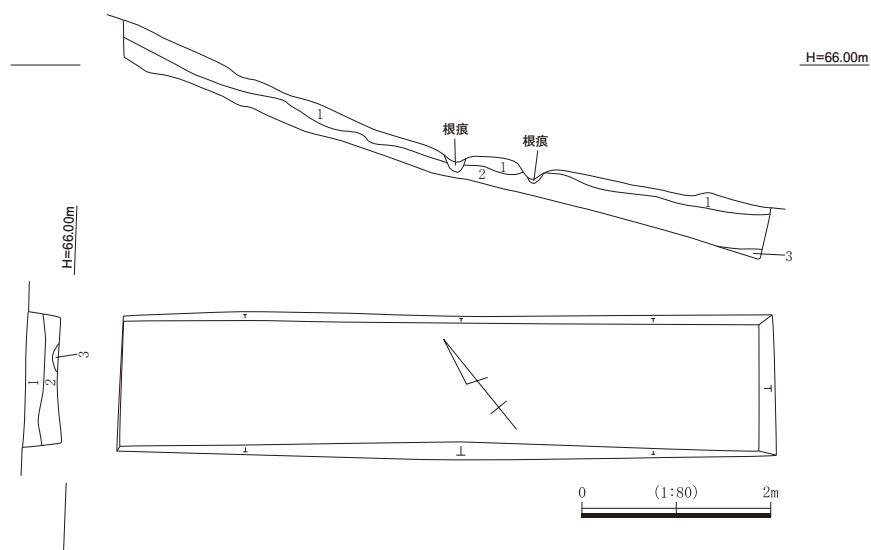
第2トレント(Tr2)[第28・30図 図版5]

西丘陵から舌状に突出した支丘陵裾の北東端に1.5×7.0mの東西トレントを設定し、地表下0.5mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。



1. 暗赤褐色粘質土 5YR3/2(2に比べてやや粘質弱)
 2. 暗赤褐色粘質土 5YR3/3(2～3mm大の炭を含む 容土 土師器片を1点含む)
 3. いよいよ赤褐色粘質土 5YR4/4(3～5mm大の軟質岩ブロックを含む)
 4. 暗赤褐色粘質土 5YR3/6(3～5mm大の軟質岩ブロックを僅かに含む)
 5. 赤褐色粘質土 5YR4/6(3～5mm大の軟質岩ブロックを多く含む)

第29図 山手地ユノ谷上分遺跡 第1トレンチ実測図



1. 褐色粘質土 7.5YR4/4(2に比べてやや粘質弱)
 2. 褐色粘質土 7.5YR4/3(1～2mm大の砂粒を含む)
 3. いよいよ赤褐色粘質土 5YR4/3(1～5mm大の軟質岩ブロックを含む)

第30図 山手地ユノ谷上分遺跡 第2トレンチ実測図

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5～10cm程度の褐色粘質土(第2層に比してやや粘質が弱い)。第2層は、層厚10～40cmで褐色の粘質土中に2mm程度の砂粒を含む。第3層は、トレンチ北側の一部に所在する薄厚のぶい赤褐色の粘質土で層中に中礫の軟質岩のブロックを含む。

各層共に傾斜した地形に沿ってほぼ安定した堆積状況を示しており、人の生活痕を示す遺構、遺物ともに検出されなかった。

第3トレンチ(Tr3)[第28・31・32図 図版5・6・14]

主丘陵から東へ舌状に突出した支丘陵裾の東端で、平成14年度に(旧)河原町教育委員会による発掘調査が行われ、竪穴式住居跡の一部と推定される焼土面を検出しているが、更に詳細な状況確認を行うためにこの試掘調査トレンチを取り込んで、1.5×8.0mの東西トレンチを設定した。調査は地表下1.2mまで掘り下げて精査の後、遺構の確認を行い、トレンチの南東では溝状の遺構を検出したことから確認のため0.25m×0.5mの範囲で拡張した。トレンチの北西では奈良時代と思われる遺物包含層を検出したことから、確認のため0.7m×2.1mの範囲で拡張し、遺構の確認調査を行った。

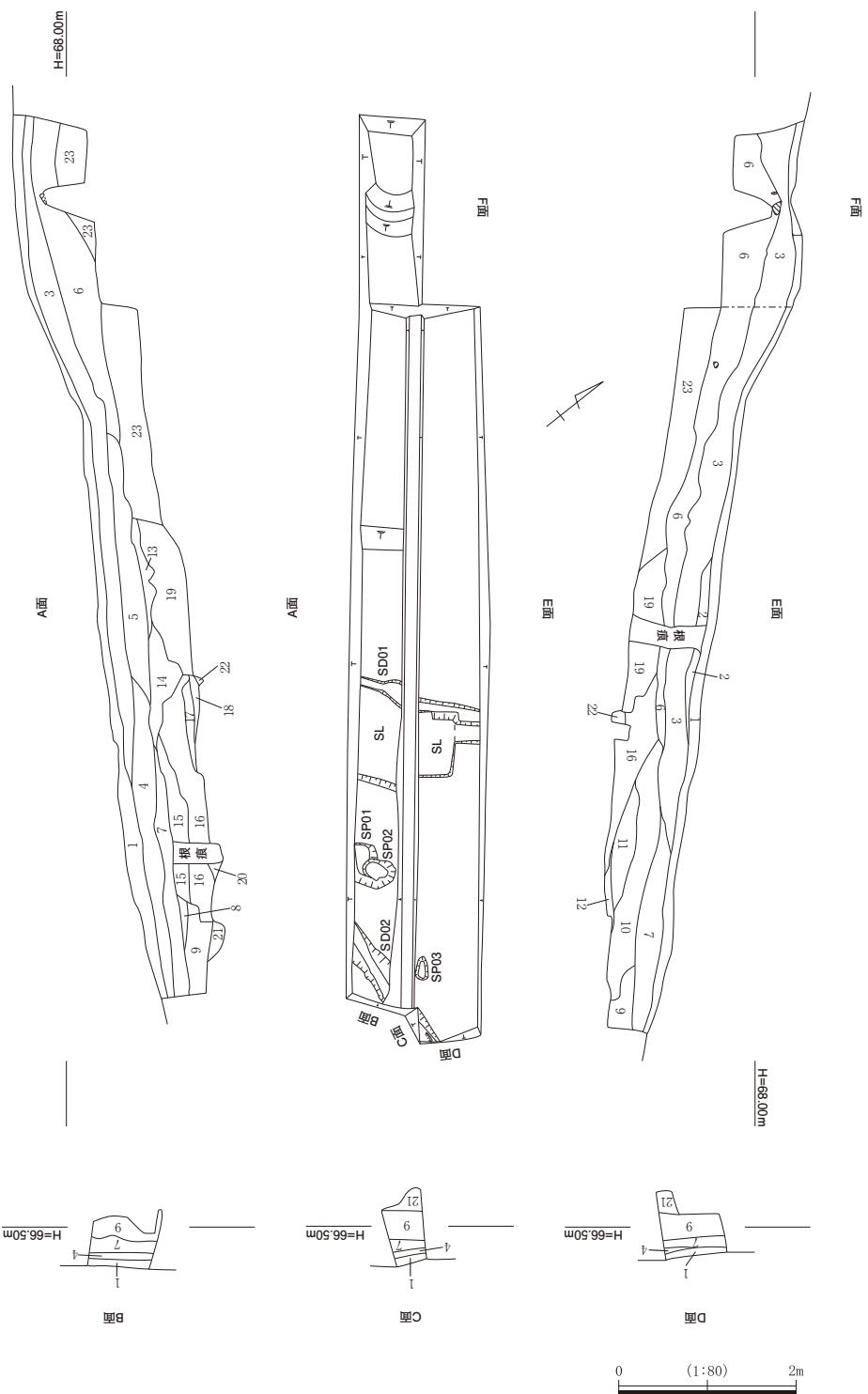
基本的な土層の層序は、第1層が層厚10～20cmの表土で、にぶい赤褐色の砂質土中に細礫を含む。第2層は、層厚約10cmで細礫が混入するにぶい黄褐色の砂質土で、層中に須恵器片を包含する。第3層は、層厚10～40cmで細礫が混入する明褐色の砂質土で、層中に土師器片・須恵器片を包含する。第4層は、層厚10～25cmで軟岩質のブロックが混入する暗褐色の砂質土で、層中に土師器片・須恵器片を包含する。第5層は、層厚10～25cmで細礫が混入するにぶい黄褐色の砂質土で、層中に土師器片・須恵器片を包含する。第6層は、層厚10～50cmで中礫が混入する赤褐色の砂質土で、層中に土師器片を多く包含する。第7層は、層厚10～30cmの中礫が混入する暗褐色土で、層中に土師器片・須恵器片を包含する。第8層は、層厚約10cmで細礫が混入するオリーブ褐色の粘質土である。第9層は、層厚20～30cmで赤褐色のブロックが混入する灰黄褐色の粘質土で、層中に土師器片を包含する。第10層は、層厚約20cmで軟岩ブロックが混入する暗褐色の粘質土で、層中に土師器片を包含する。第11層は、層厚約25cmで軟岩ブロックが混入するにぶい暗褐色の粘質土で、層中に土師器片を包含する。第12層は、層厚約5cmで軟岩のブロックが混入する褐色の粘質土である。第13層は、層厚約10cm程度で細礫が混入する灰黄褐色の砂質土で土師器片を包含する。第14層は、層厚15～35cmで赤褐色のブロックと炭化物が混入する褐色の粘質土で、層中に土師器片を包含する。第15層は、層厚15～20cmで褐色の粘質土で、層中に土師器片を包含し、ピット遺構の検出面でもある。第16層は、層厚25～40cmで黄褐色・赤褐色のブロックが混入し第15層より明るい褐色の粘質土で、竪穴式住居跡に堆積する埋土であり、明赤褐色に沈着した焼土の検出面もある。第17層は、層厚約10cmで炭化物が混入する褐色の粘質土で、竪穴式住居跡に堆積する埋土である。第18層は、層厚約10cmで炭化物と黄褐色・赤褐色のブロックが混入し、第17層より暗い褐色の粘質土で、竪穴式住居跡に堆積する埋土である。第19層は、層厚30～40cmのやや砂質で褐色の粘質土で竪穴式住居跡に堆積する埋土である。第20層は、ピット状遺構に堆積し黒褐色土ブロックが混入する暗褐色の粘質土である。第21層は、溝状遺構に堆積し黄褐色土ブロックが混入する黒褐色の粘質土で、層中に土師器片を包含する。第22層は、溝状遺構に堆積し、炭化物と中礫が混入した褐色の粘質土である。第23層は、層厚20～40cmで中礫が混入する褐色の粘質土で、層中に土師器片を包含する。

焼土面を中心に古墳時代後期の土師器片・須恵器片を包含する埋土の堆積が見られ、トレンチの南東では壁際溝と思われる浅い溝状遺構が検出された。また、トレンチ北西側では奈良時代の土師器片が多く検出されたことから、竪穴式住居跡とは時期を異にする遺構が所在する可能性も考えられる。

検出された遺構は、焼土面、溝状遺構、ピットで竪穴式住居跡の付帯施設と思われるものである。

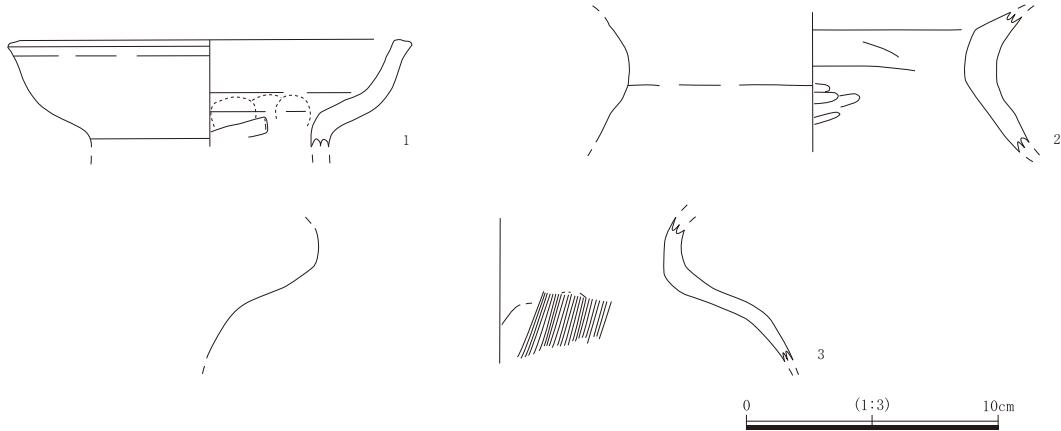
焼土面は、トレンチのほぼ中央で赤褐色を呈し、70cm程度の隅丸方形状に厚く堆積した焼土面を検出した。焼土中には、多量の炭化物が混在しており、竪穴式住居内の炉に係わるものと推定される。

溝状遺構は、前述の焼土面の北西側に接するもの(SD-01)とトレンチ南東で検出された(SD-02)であ



1. にぶい赤褐色砂質土 5YR4/4(1 ~ 2mmの大の細礫を含む)
 2. にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3(1 ~ 2mmの大の細礫を含む)
 3. 明褐色砂質土 5YR5/6(1 ~ 2mmの大の細礫を含む 土師器・須恵器)
 4. 暗褐色砂質土 7.5YR3/3(軟岩質ブロックを含む 土師器・須恵器)
 5. にぶい黄褐色砂質土 7.5YR5/3(1 ~ 3mmの大の細礫を含む 土師器・須恵器)
 6. 赤褐色砂質土 5YR4/6(5mm以下の中礫を含む やや砂質 土師器)
 7. 暗褐色土 10YR3/3(2.5mm以下の中礫を含む 土師器・須恵器)
 8. オリーブ褐色粘質土 2.5YR4/3(1 ~ 3mmの大の細礫を含む)
 9. 灰黄褐色粘質土 10Y4/2(赤褐色ブロック・炭を含む 土師器)
 10. 暗褐色粘質土 10YR3/4(軟岩ブロックを含む 土師器)
 11. にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3(軟岩ブロックを含む 土師器)
 12. 褐色粘質土 10YR4/6(軟岩質ブロックを含む)
 13. 灰黄褐色砂質土 10YR4/2(1 ~ 2mmの大の細礫を含む 土師器)
 14. 褐色粘質土 10YR4/4(赤褐色ブロック・炭を含む 土師器)
 15. 褐色粘質土 7.5YR4/4(16以上暗 土師器)
 16. 褐色粘質土 7.5YR4/3(黄褐色・赤褐色ブロックを含む 土師器・炭化物)
 17. 褐色粘質土 10YR4/4(18以上やや明 燐土)
 18. 褐色粘質土 10YR4/4(黄褐色・赤褐色ブロックを含む)
 19. 褐色粘質土 10YR4/4(やや砂質 土師器)
 20. 暗褐色粘質土 10YR3/3(黒褐色土ブロックを含む)
 21. 黑褐色粘質土 10YR3/2(黄褐色土ブロックを含む 土師器)
 22. 褐色粘質土 10YR4/6(1 ~ 2mmの大の炭片及び3 ~ 5mm以下の中礫を含む)
 23. 褐色粘質土 10YR4/4(5mm以下の中礫を含む 土師器)

第31図 山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレングチ実測図



第32図 山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ出土遺物実測図

る。これらの溝状遺構は、上面幅が25~30cm程度で、深さは20cm前後を測り、SD-01は南東から北西方に延び、SD-02は東西方向に延びる。

ピットは、トレンチの南東で3基(SP-01~03)検出され、SP-01とSP-02は切り合い関係にあり、先行するSP-01が掘り込まれた後にSP-02が掘り込まれたものである。SP-01の検出面での口径は、約40cmの隅丸方形と推定され、深さは約20cmを測り、底径は約30cmを測り、断面形は円筒状を呈す。SP-02の検出面での口径は、約35cmのほぼ円形で、深さは約20cmを測り、底径は約20cmで、断面形は擂り鉢状を呈す。SP-03は、トレンチの南東端で検出され、検出面での口径は、25~15cmの橈円形で、深さは約15cmを測り、底径は約20~10cmの橈円形で、断面形は擂り鉢状を呈し、SP-01・SP-02は法量的に堅穴式住居跡施設の一部となる可能性がある。

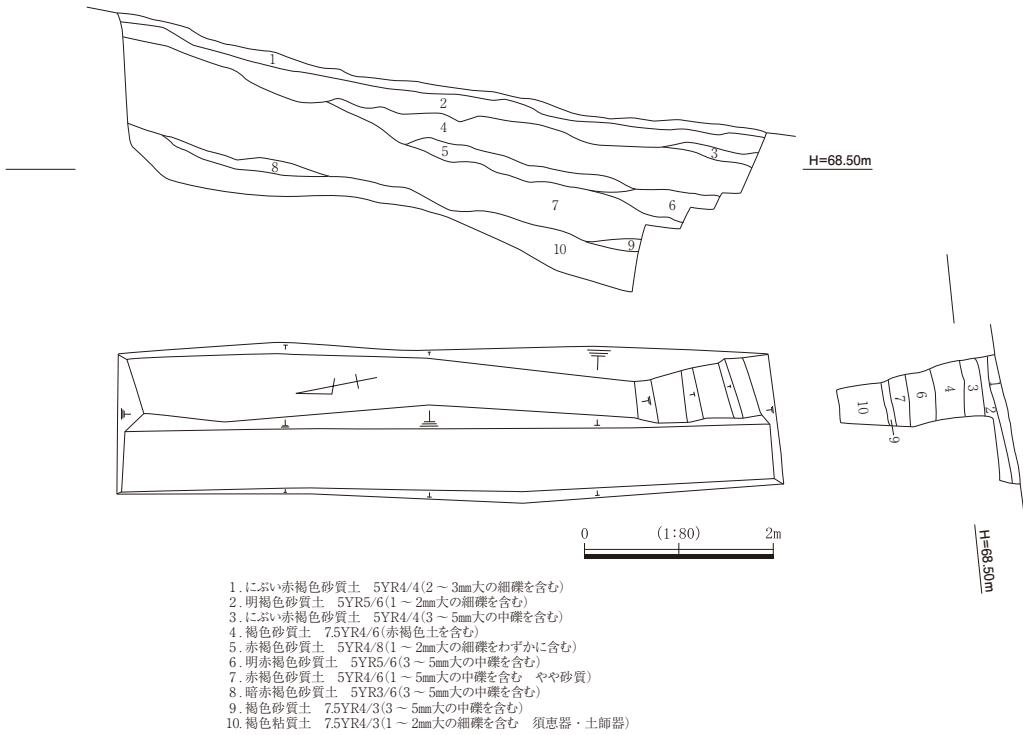
出土遺物は、第15層から下位で出土している。1は、頸部以下を欠損する土師器の壺で、屈曲した頸部から緩やかに立ち上がり、口縁端部を平におさめる。復元口径は16.0cmを測り、成形後頸部の屈曲部に指オサエ、ケズリを施した後、内外面共にヘラ状工具によるヨコナデ調整を施す。近隣では認められない器形であることから在地のものとも考えられる。2は、頸部が大きく外反する土師器の甕で、外面は著しく摩耗して調整は不明、内面はケズリの後ヘラミガキを施している。3は、頸部から肩部に至る土師器の甕で、外面は著しく摩耗して調整は不明、内面は強い指オサエの後ヘラ状工具によるナデを施している。何れも古墳時代後期の所産と思われる。

第4トレンチ(Tr4) [第28・33図 図版6]

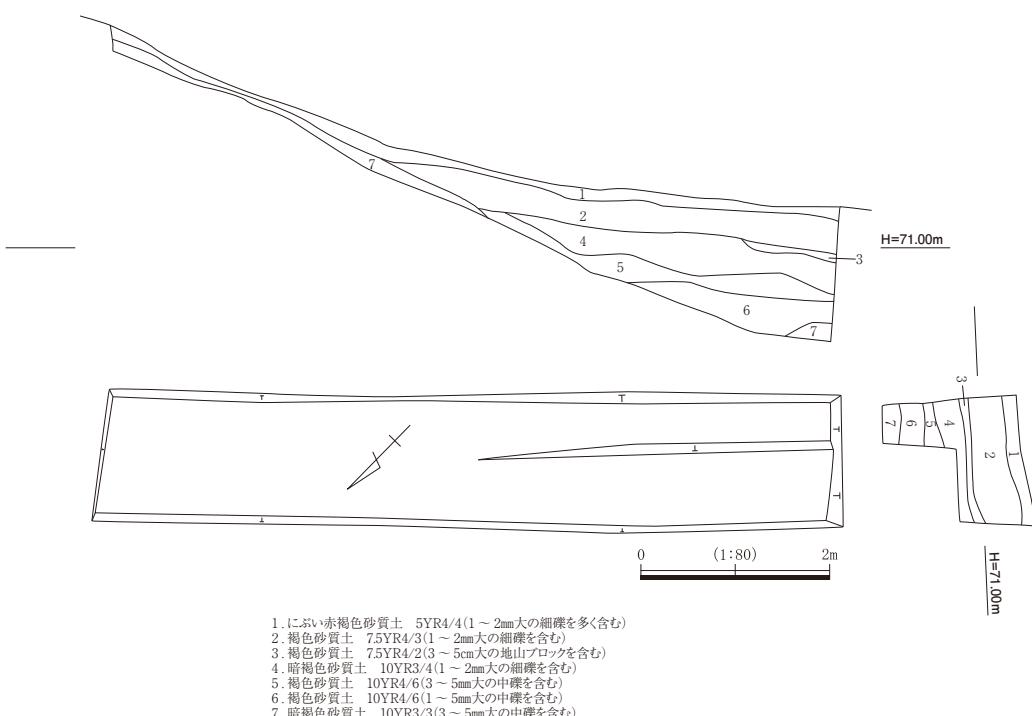
主丘陵から東へ舌状に突出した支丘陵裾の南東端に1.5×7.0mの南北トレンチを設定し、地表下1.8mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約10cm程度のにぶい赤褐色で砂質土中に細礫を含む。第2層は、層厚10~30cmで細礫を混入する明褐色の砂質土である。第3層は、層厚約20cmで中礫が混入するにぶい赤褐色の砂質土である。第4層は層厚25~50cmで赤褐色の沈着土が混入する褐色砂質土である。第5層は、層厚約15cmで細礫が混入する赤褐色の砂質土である。第6層は、トレンチの南側に見られる層厚約25cmで中礫が混入する明赤褐色の砂質土である。第7層は、層厚40~90cmで中礫が混入する赤褐色の砂質土である。第8層は、トレンチの北側に見られる層厚10~15cmで中礫が混入する暗赤褐色の砂質土である。第9層は、トレンチの南側に見られる層厚約10cmで中礫が混入する褐色の砂質土である。第10層は、層厚10~40cmで細礫が混入する褐色の粘質土中に土師器片、須恵器片が各1点検出された。

各層共に傾斜した地形に沿ってほぼ安定した堆積を示しており、土師器片、須恵器片が各1点検出されている最下層の第10層は、土質、遺物の包含状況から、第3トレンチの第23層に対応するものと考えられる。



第33図 山手地ユノ谷上分遺跡 第4トレンチ実測図



第34図 山手地ユノ谷上分遺跡 第5トレンチ実測図

第5トレント(Tr5)〔第28・34図 図版6〕

主丘陵から東へ舌状に突出した支丘陵の南端に1.5×8.0mの南北トレントを設定し、地表下1.5mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10～15cmのにぶい赤褐色で砂質の表土である。第2層は、層厚25～35cmで細礫が混入する褐色の砂質土である。第3層は、トレント南西に見られる薄厚で地山ブロックが混入した褐色砂質土である。第4層は、層厚20～45cmで細礫が混入した暗褐色の砂質土である。第5層は、層厚10～30cmで中礫が混入した褐色の砂質土である。第6層は、層厚20～40cmで中礫が混入した褐色の砂質土である。第7層は、トレント南西端に見られる層厚20cm程度で中礫が混入した暗褐色の砂質土である。

層位的には、黄色系の地山に沿ってほぼ安定した堆積状況を示していたが、遺構、遺物共に検出されなかった。

小結

今回の発掘調査対象となった山手地ユノ谷上分遺跡は、第1トレントで土師器の細片を1点検出したが、客土中の検出であり、上方からの搬入土であることから遺跡は所在しないと思われる。第2トレントでは、傾斜地で遺構、遺物共に検出されなかつことから第3トレントに見られる遺構の範囲から外れるものと思われる。第3トレントでは、旧河原町教育委員会による試掘調査で焼土面が検出されているトレントを取り込んでの確認調査であったが、古墳時代後期の竪穴式住居跡と溝状遺構・ピットを検出した。第4トレントでは、古墳時代後期と思われる土師器片・須恵器片を各1点検出したが遺構に伴うものではなかった。第5トレントでは、北方からの小さな谷地形が形成されており、上方からの流入土が厚く堆積していたが、遺構、遺物ともに検出されなかつことから、山手地ユノ谷上分遺跡では、緩斜面に広がる第3トレント付近を中心に遺構の拡がり、遺物の包含が特に多く認められることで遺跡の中心部と推定される。

第7節 天神山遺跡

天神山遺跡は、鳥取平野の西端に形成された潟湖である湖山池東岸に位置する標高25m程度の独立丘陵「天神山」周辺に展開する。天神山は15～16世紀に因幡守護山名氏が守護所を設置した地として知られるが、周辺にも関連遺構が所在することが判明している。また天神山を含めた湖山池周辺には縄文時代前期から弥生時代、古墳時代、古代～中世・近世の多くの遺跡が形成されている。

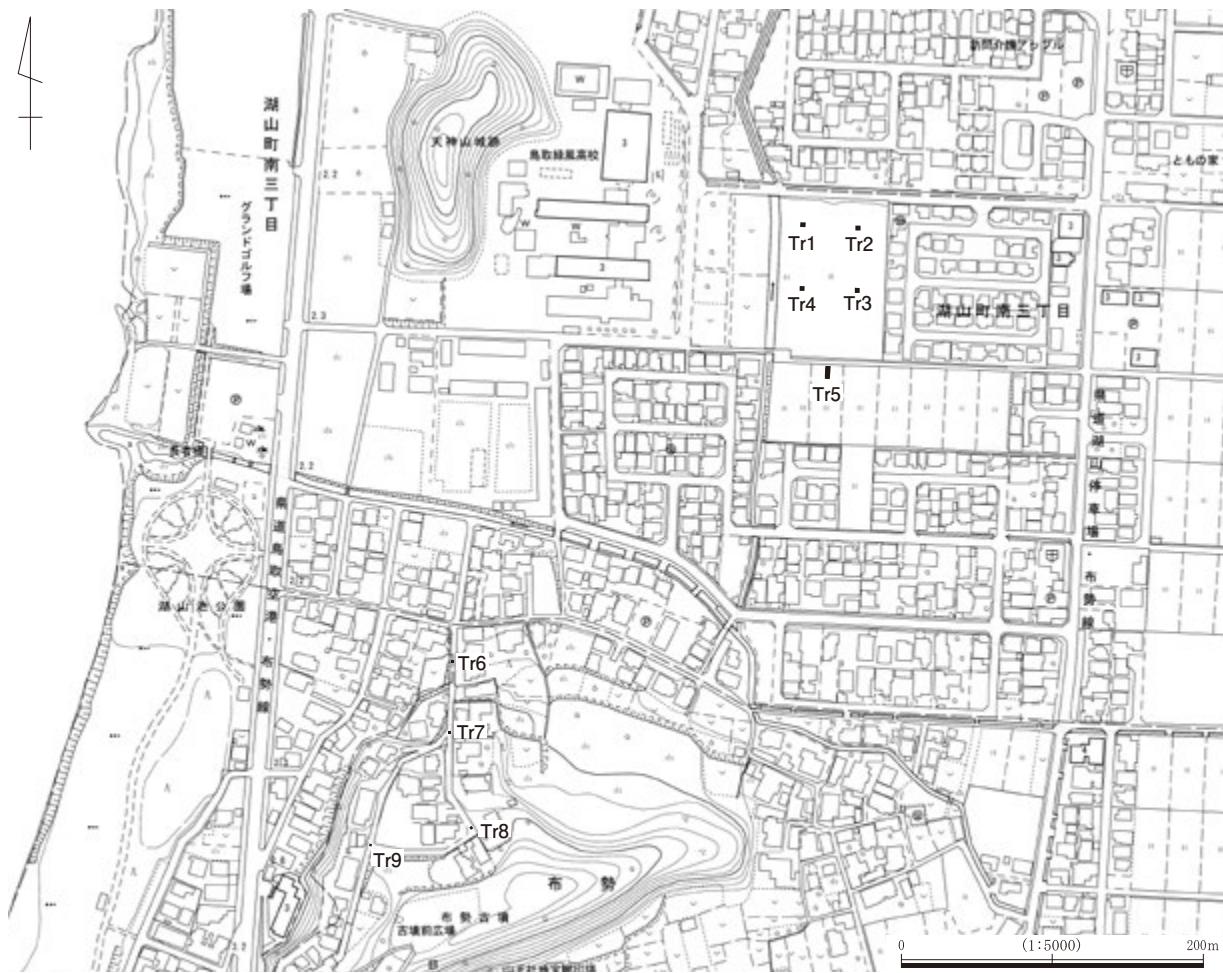
今回の調査は宅地開発計画及び公共下水道工事に伴うもので、宅地造成計画については平成12(2000)年度及び平成23(2011)年度に付近で試掘調査が実施されており、それらも参考に遺構の有無・広がりを確認することを目的として調査を実施した。調査地はかつて農業高等学校の実習田・畑地として利用されていたが現在は客土等で整地されている雑種地である。調査は開発区域内北側に、一辺3m程度のトレント4ヶ所と南側に8.6×3.2m程度のトレント1ヶ所の計5ヶ所のトレントを設定した。

公共下水道整備事業に伴う試掘調査では遺跡の有無を確認することを目的に調査を実施した。調査地の現況は道路であることから原因者の協力を得て重機により掘削を行った。調査は開発区域内に一辺約1.5mのトレントを4ヶ所設定した。第1～第5トレントは宅地造成計画、第6～第9トレントは公共下水道整備事業に伴って実施をしたものである。

第1トレント(Tr1)〔第35・36図 図版6〕

調査対象地内最北西部、元の実習畑地に設定した3.1×3.5mのトレントである。現在の地表面標高は約2.3mで、地表面下約2.5mの標高-0.25m付近まで掘下げを行った。

地表面下、碎石層(第1層)・真砂質土層(第2層)・砂層(第3・4層)が客土で、標高0.7m程度のオ



第35図 天神山遺跡 調査トレンチ位置図

リーブ黒色粘質土層(第6層)が造成前の耕土、同じくオリーブ黒色粘質土層(第7層)が床土とみられる。以下、その下面付近から白磁片が出土したオリーブ黒色粘質土層(第8層)、標高約0.45m以下の灰色(微砂質)粘質土層(第9層)、灰黄色細砂を密に含む黄灰色粘質土層(第10層)、標高0.2m以下で土師器片が出土した黒褐色粘質土層(第11層)、未分解植物遺体を含む黒褐色系の砂質土層(第12層)と粘質土層(第13層)、灰黃褐色粘土層(第14層)と続き、標高-0.25m以下は木製品を含む黒褐色砂と未分解植物遺体の混合層(第15層)となる。遺構は検出されなかった。

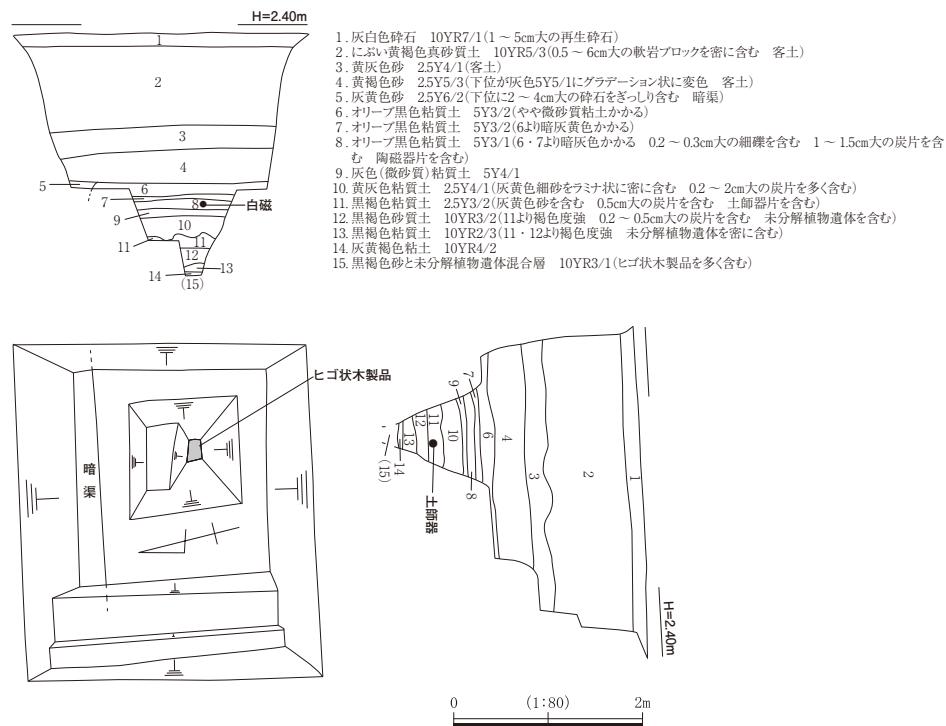
遺物としては、上述のとおり第8層下位から近代以降の白磁片(瀬戸焼)、第11層から糸切りの土師器底部片が出土したほか、第15層からはネット状編み物等の部材の可能性が考えられる複数のヒゴ状木製品が出土している。

第2トレンチ(Tr2) [第35・37図 図版7]

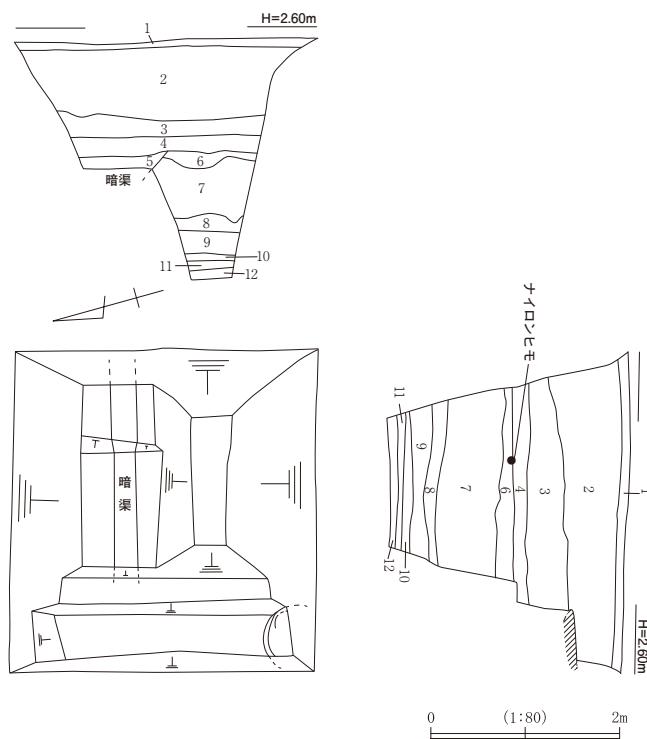
調査対象地内最北東部、Tr1の東30m強で元の実習畑地に設定した3.2×3.4mのトレンチである。現在の地表面標高は約2.45mで、地表面下約2.45mの標高0m付近まで掘下げを行った。

地表面下、碎石層(第1層)・真砂質土層(第2・3層)・砂層(第4~7層)が客土で、標高0.5m程度の褐灰色粘土層(第8層)は造成前の耕土の可能性が考えられる。標高0.4m以下には、黒褐色泥炭層(第9層)、未分解植物遺体を多く含む暗赤褐色泥炭層(第10層)、黒褐色泥炭質粘質土層(第11層)と続き、標高0m付近は灰色砂層(第12層)となる。

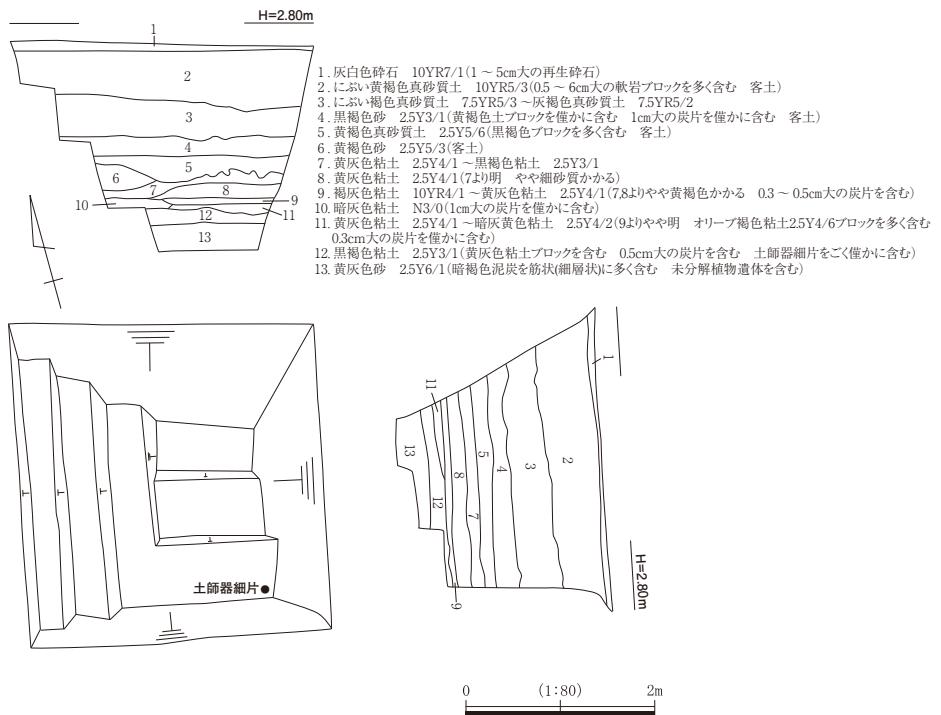
遺構については、第6層上面から掘り込まれる現代暗渠を確認した以外には当該期の遺構は検出されなかった。また遺物についても当該期のものは検出されなかった。



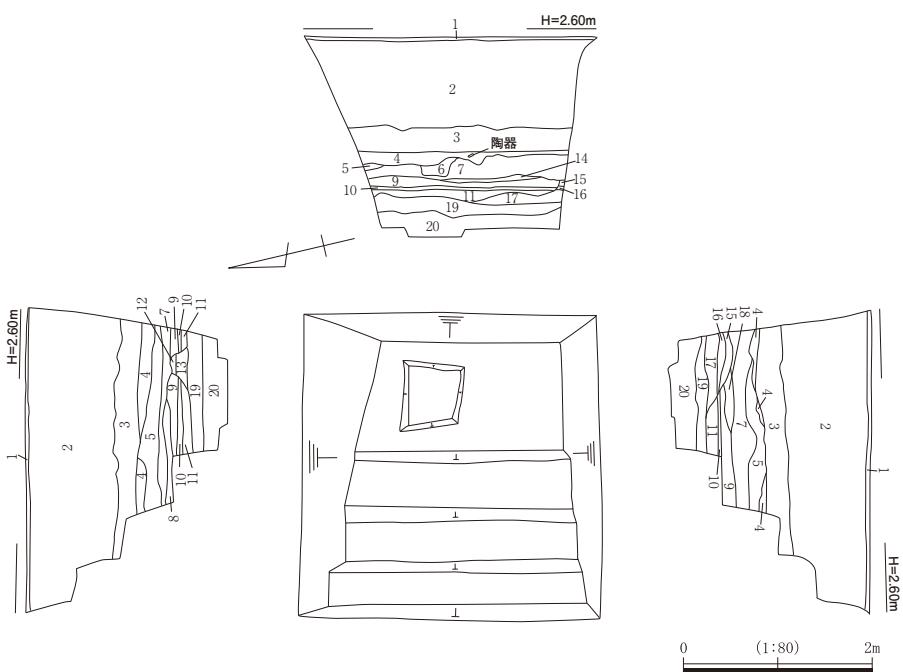
第36図 天神山遺跡 第1トレンチ実測図



第37図 天神山遺跡 第2トレンチ実測図

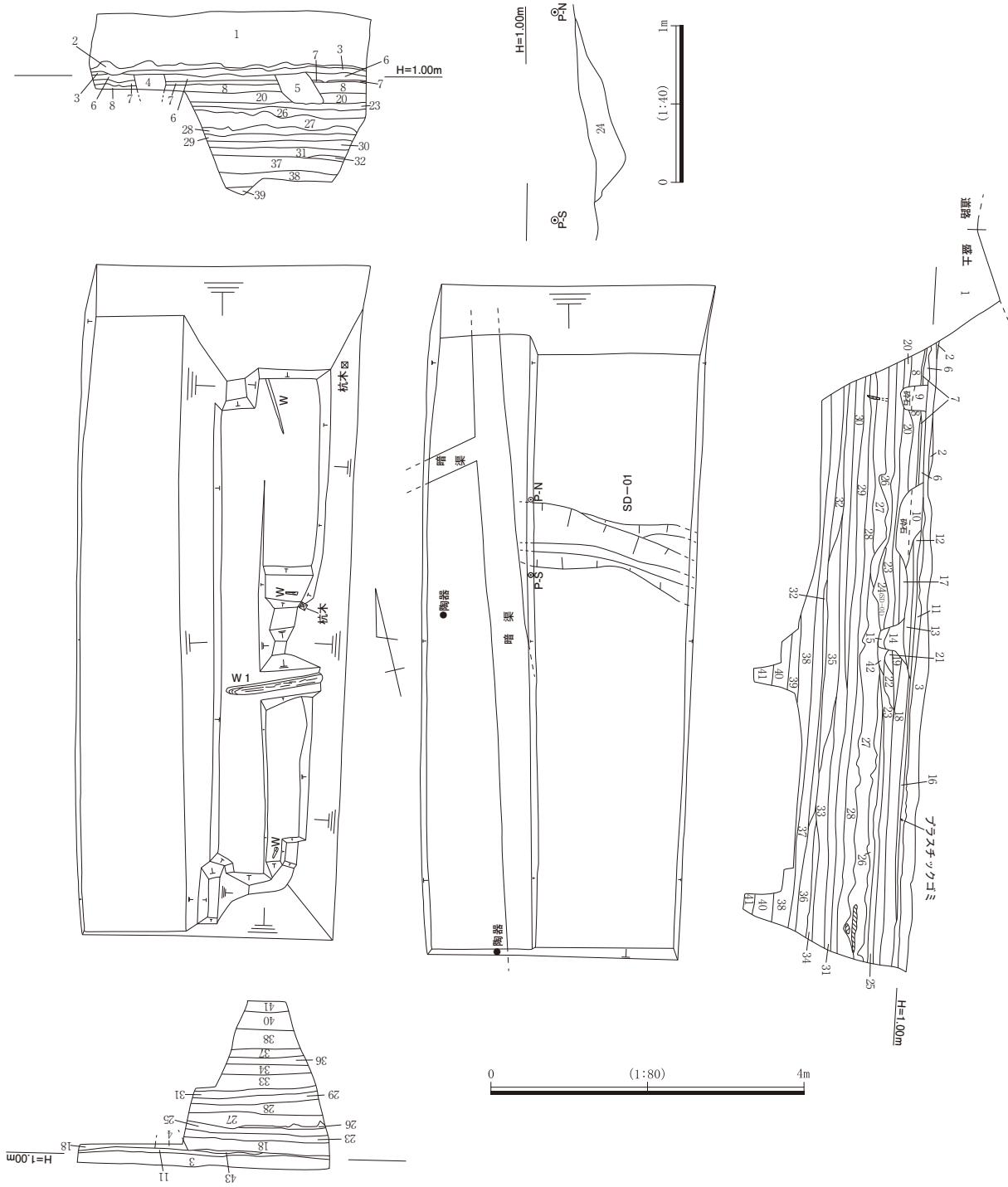


第38図 天神山遺跡 第3トレングチ実測図



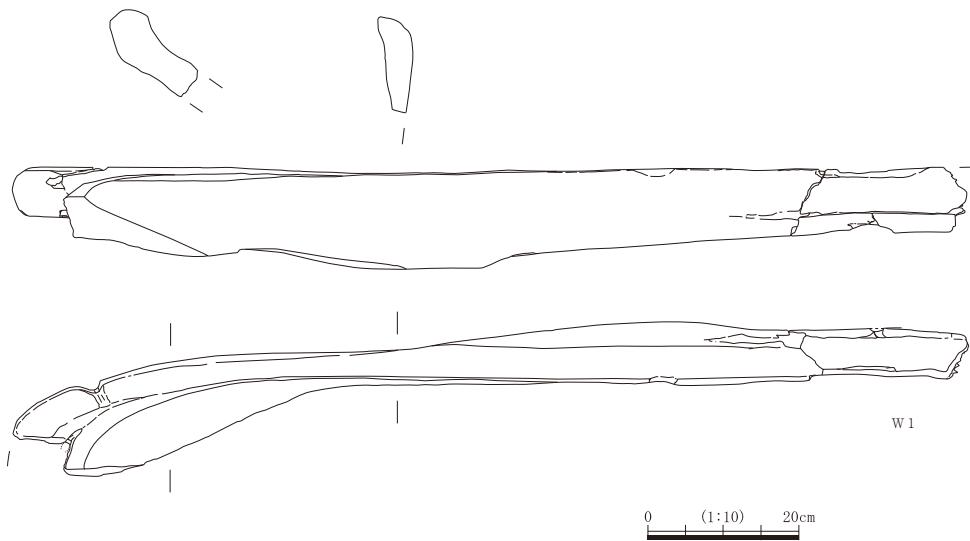
1. 灰白色砂石 10YR7/1(1 ~ 5cm大の再生碎石)
2. にぶい黄褐色真砂質土 10YR5/3(0.5 ~ 10cm大の軟岩ブロックを多く含む 塩ビパイプ片を含む 客土)
3. 黑褐色砂質土 25Y3/1(ナイロンヒモ・プラスチックゴミを僅かに含む 客土)
4. 黄褐色砂 25Y5/3(陶器片を含む 客土)
5. 黑褐色粘土 25Y3/1(黄褐色砂 25Y5/3を多く含む)
6. 黄褐色砂 25Y5/3(黒褐色粘土 25Y3/1を多く含む)
7. 黑褐色粘質土 25Y3/1(5よりやや暗 黑褐色土ブロックを含む)
8. 暗灰黄色粘質土 25Y4/2(やや砂質かかる)
9. 黄灰色粘質土 25Y4/1(やや砂質かかる 0.1 ~ 0.3cm大の細礫及び0.1 ~ 0.2cm大の炭片を含む)
10. 黄褐色粘質土 25Y5/4 ~ 5/6(黄灰色粘土ブロックを含む 0.1 ~ 0.5cm大の炭片を含む)
11. 黄灰色粘土 25Y4/1 ~ 黑褐色粘土 25Y3/1(9より暗 0.1 ~ 1cm大の炭片を含む)
12. 黄灰色粘土 25Y4/1 ~ 黑褐色粘土 25Y3/1(9より暗 0.1 ~ 0.5cm大の炭片を含む 0.1 ~ 0.5cm大の細礫を含む)
13. 黄灰色粘土 25Y4/1 ~ 黑褐色粘土 25Y3/1(11よりやや灰黄色かかる やや砂質かかる 0.1 ~ 0.5cm大の炭片を含む 0.1 ~ 0.5cm大の細礫を含む)
14. 暗灰黄色粘質土 25Y4/2 ~ オリーブ褐色粘質土 25Y4/3(0.6cm大の黄灰色粘土 25Y5/3ブロックを含む 0.2 ~ 0.3cm大の炭片を含む)
15. 黄褐色粘質土 25Y4/1(やや砂質かかる 9よりやや暗 0.2cm大の炭片を含む 0.2 ~ 0.3cm大の細礫を僅かに含む)
16. 黄褐色粘質土 25Y5/4 ~ 5/6(10よりやや暗 黄灰色粘土を含む 0.1 ~ 0.5cm大の炭片を含む)
17. 黄灰色粘土 25Y4/1 ~ 黑褐色粘土 25Y3/1(11より類似 0.2 ~ 1cm大の炭片を含む)
18. 暗灰黄色粘質土 25Y4/2(やや砂質かかる 8に類似 0.2cm大の炭片を含む 0.1cm大の細礫を含む)
19. 黑褐色粘土 25Y3/1(5.7より暗 0.2 ~ 2cm大の炭片を含む)
20. 黄灰色砂 25Y6/1(黒褐色泥炭 7.5YR3/3 ~ 黑褐色泥炭 7.5YR3/1を筋状(ラミナ状)に密に含む 未分解植物遺体を含む)

第39図 天神山遺跡 第4トレングチ実測図

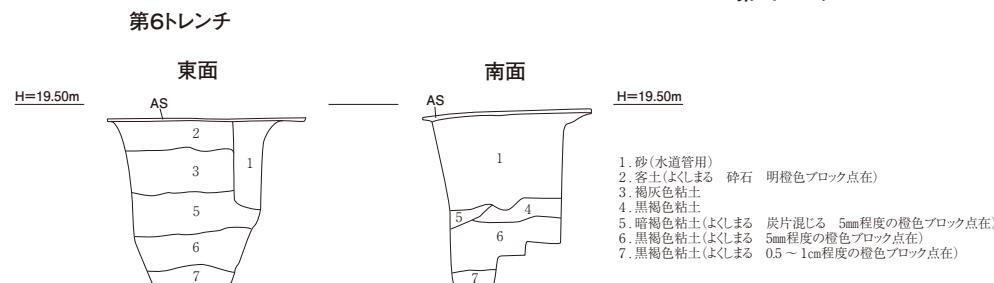
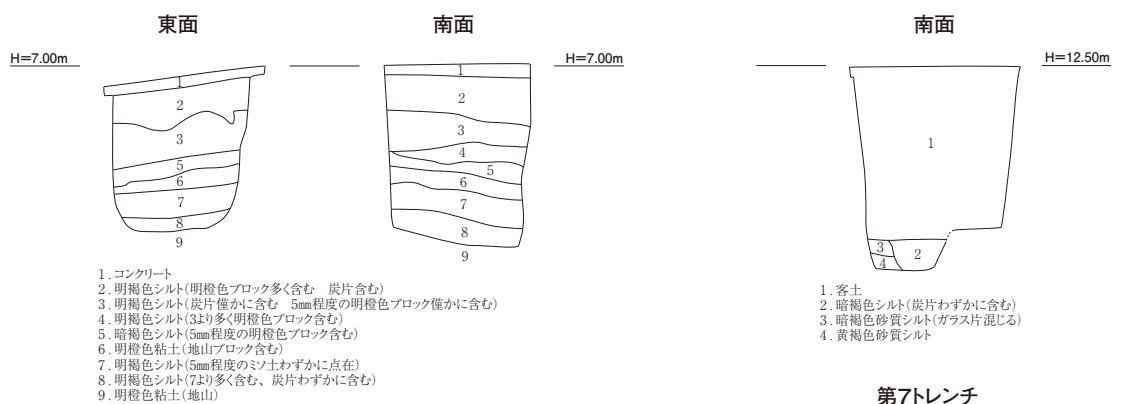


1. 明褐色真砂土 10YR6/6 ~ 黄褐色真砂土 10YR5/6(盛土 整地土)
 2. 黒色粘質土 10YR2/1(整地前の泥土或旧水田耕土)
 3. 灰黃褐色粘質土 10YR5/2(旧耕土)
 4. 灰黃褐色粘質土 10YR5/2(3よりやや暗 7 ~ 15cm大の角礫を多く含む 暗渠)
 5. 灰黃褐色粘質土 10YR5/2
 (3よりやや明るく黄褐色度やや強 黄褐色無機質分を含む 下半に5 ~ 15cm大の角礫をぎっしり含む 暗渠)
 6. 褐灰色粘質土 10YR5/1(ややシルトかかる 02cm大的炭片を含む 0.3 ~ 0.5cm大的細縫を僅かに含む 旧耕土?)
 7. 褐灰色粘質土 10YR5/1 ~ 10YR4/1(5よりやや暗 黄褐色無機質分沈着)
 8. 褐灰色粘質土 10YR4/1 ~ 黄褐色粘質土 10YR4/2(黄褐色無機質分 0.2cm大的炭片を僅かに含む)
 9. 灰黃褐色粘質土 10YR4/2
 (3よりやや暗 0.5cm大的炭片 黄褐色無機質分を含む 下半に10 ~ 15cm大的角礫をぎっしり含む 暗渠)
 10. 灰黃褐色粘質土 10YR5/2
 (3よりやや明 0.2cm大的炭片及び黄褐色無機質分を含む 下半に7 ~ 15cm大的角礫をぎっしり含む 暗渠)
 11. 褐灰色粘質土 10YR5/1 ~ 10YR4/1(7よりやや暗 旧耕土)
 12. 灰黃褐色粘質土 10YR5/2(3より明)
 13. 褐灰色粘質土 10YR5/1
 14. 灰黃褐色粘質土 10YR4/2(黄褐色無機質分を含む 下半に5 ~ 10cm大的風化礫を多く含む)
 15. 灰黃褐色細砂質粘質土 10YR4/2 ~ 黑褐色細砂質粘質土 10YR3/2
 16. 灰黃褐色細砂質粘質土 10YR5/2(3より明) にい黄褐色無機質分を筋状に含む
 17. 褐灰色粘土 10YR5/1 ~ 10YR4/1(13より暗 黄褐色無機質分を多く含む)
 18. 褐灰色粘土 10YR5/1 ~ 10YR4/1(13よりやや暗 黄褐色無機質分を多く含む)
 19. 褐灰色粘土 10YR4/1(17.18より暗 黄褐色無機質分を多く含む)
 20. 褐灰色粘土 10YR4/1 ~ 黄褐色粘土 10YR4/2(19よりやや暗やや灰黄色かかる)
 21. 灰黃褐色粘質土 10YR4/2(やや砂質かかる)
 22. 褐灰色粘質土 10YR4/1 ~ 黄褐色粘質土 10YR4/2(にい黄褐色砂をラミナ状に多く含む)
 23. 灰黃褐色粘土 0.5cm大的炭片を含む)
24. 灰白色砂 10YR8/2 ~ 10YR8/1(灰黄褐色粘質土をラミナ状に多く含む SD-01埋土)
 25. 灰黄褐色微砂まで粘質土 10YR5/2(にい黄褐色微砂を多く含む)
 26. 黑褐色粘土 10YR5/1 ~ 黄褐色粘土 10YR5/2
 27. 灰黄褐色粘土 10YR5/2(26より暗 3よりやや暗 流木を含む)
 28. 黑褐色粘土 10YR3/1(にい黄褐色粘土を層状に中位に含む)
 29. 黑褐色粘土 10YR3/1 ~ 黄褐色粘土 10YR4/1(28より明 未分解植物遺体を含む)
 30. 黑褐色泥炭質粘質土 10YR4/2(未分解植物遺体を多く含む 船状木器含む)
 31. 暗褐色泥炭質粘質土 10YR3/3(未分解植物遺体を密に含む 35との境界付近に船状木器含む)
 32. 暗褐色泥炭質粘質土 10YR3/3 - 黑褐色泥炭質粘質土 10YR3/2
 (3より暗 未分解植物遺体を密に含む)
 33. 黄褐色泥炭質粘質土 10YR4/2(微砂を含む)
 34. にい黄褐色泥炭質粘質土 10YR4/3 ~ 黄褐色泥炭質粘質土 10YR4/2
 (33よりやや暗やや明 黄褐色からする 微砂を含む)
 35. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2
 (33よりやや明 流木及び未分解植物遺体を含む 31との境界付近に船状木器含む)
 36. 黄褐色粘質土 10YR4/2(33.34よりやや明 薄板状木器含む)
 37. 黑褐色粘質土 7.5YR4/2(未分解植物遺体を含む 薄板状木器含む)
 38. 黑褐色微砂質土 7.5YR4/2(37よりやや明)
 39. 黑褐色微砂質粘土 7.5YR4/2 ~ 7.5YR5/2(38より明)
 40. 黄褐色微砂質粘土 7.5YR4/1 ~ 黄褐色微砂質粘土 7.5YR4/2(39よりやや明)
 41. 黑褐色微砂質粘土 7.5YR4/1(40よりやや暗 未分解植物遺体を僅かに含む)
 42. 黄褐色粘質土 10YR4/2 ~ 黄褐色粘質土 10YR4/1(21・22よりやや明 やや砂質かかる)
 43. 黑褐色粘質土 10YR6/1 ~ 10YR5/1(18より明)

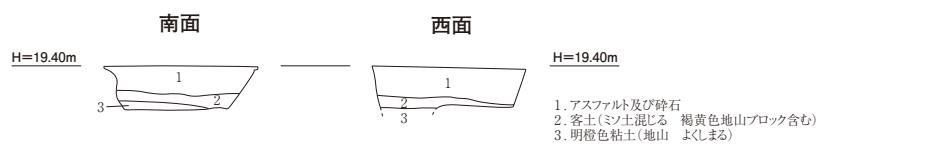
第40図 天神山遺跡 第5トレント実測図



第41図 天神山遺跡 第5トレンチ出土遺物実測図



第8トレンチ



第9トレンチ

0 (1:80) 2m

第42図 天神山遺跡 第6・7・8・9トレンチ実測図

第3トレンチ(Tr3)〔第35・38図 図版7〕

Tr 2 の南40m強で元の実習畑地に設定した3.2×3.2mのトレンチである。現在の地表面標高は約2.55mで、地表面下約2.15mの標高0.4m付近まで掘下げを行った。

地表面下、碎石層(第1層)・真砂質土層(第2・3・5層)・砂層(第4・6層)が客土で、以下標高1.0m前後～0.7m程度に粘土層(第7～12層)、その下に泥炭や未分解植物遺体を含む砂層(第13層)が続く。遺構については調査範囲狭小のため本トレンチ内では明瞭にできなかったが、第4トレンチ等との関係から、標高1m付近の第8層が畦畔盛土である可能性も考えられる。また、遺物は第12層上位から土師器細片が僅かに出土している。

第4トレンチ(Tr4)〔第35・39図 図版7〕

Tr 1 の南40m強、Tr 3 の西30m強で元の実習畑地に設定した3.2×3.1mのトレンチである。現在の地表面標高は約2.5mで、地表面下約2.1mの標高0.4m付近まで掘下げを行った。

地表面下、碎石層(第1層)・真砂質土層(第2層)・砂層(第3・4層)粘土層(第5層)の標高1.1m付近までが客土で、以下標高約0.9mまでが粘質土層(第7～10・14層)、標高0.65m付近までが粘土層(第11・19層)となり、その下に泥炭や未分解植物遺体を含む砂層(第20層)が続く。

遺構としては、標高1m付近の第9層上面を頂点とする畦畔状の遺構をトレンチ南壁および北壁の断面から検出した。規模は幅0.5～1m、厚さ0.2～0.3m、推定長2m以上で、第12・13・15～17層がその盛土とみられる。なお遺物については、客土の第4層からプラスティック片とともに陶器片が出土したのみである。

第5トレンチ(Tr5)〔第35・40・41図 図版7・8〕

Tr 4 の南東50m強、農道際の元の水田地に設定した8.6×3.2mの南北に長いトレンチである。現在は盛土・整地がなされ、地表面は標高1.8mであるが、旧水田面は標高約1.2mで、部分的ながら標高-1.0m付近まで掘下げを行った。

地表面下標高0.9m付近までは現代の盛土層(第1層)、旧耕土層(第2・3・6層)、旧耕作の床土層(第7層)で、以下、粘質土層(第8～16層)、粘土層(第17～20・23・26～29層)、泥炭質粘質土層(第30～34層)、未分解植物遺体を含む粘質土層(第35～37層)、砂質および砂質粘土層(第38～41層)と続く。

このうち、遺構としては自然流路の可能性も考えられるが、標高0.6m付近の第26層上面から東西方向の溝状遺構を検出した。規模は幅1m強、深さ約0.2m、検出長2m以上である。また、標高0.4m付近の第27層中から0.25m付近の第29層に至る径3cm程度の杭木を検出した。

遺物としては、標高0.1～-0.25m付近が遺物包含層で、板状木製品等が出土している。このうち田舟の一部とみられる木製品(W1)を図化した。全体に破損が著しいが、遺存長は125.8cm、同幅20.3cm、同高さは12.4cmを測り、長軸の一端には穿孔の痕跡1と紐をかけたものか若干の擦痕がみられる抉り部分1が認められる。

第6トレンチ(Tr6)〔第35・42図 図版8〕

天神山城跡南側の市道桂見布勢1号線と市道布勢1号線の交差点の南側約25m付近に設定した幅1.6×長さ1.7mのトレンチである。現地盤の標高は7m前後である。第1層はコンクリート舗装、第2層から第6層は基礎碎石を含む明褐色～暗褐色の粘質土層で地山ブロックや炭片が点在する客土である。第7層、第8層は明褐色のシルト層で明橙色の地山ブロックが点在する。第9層は明橙色の地山である。

遺物は客土中より土師器片、弥生土器、陶器片が出土している。第8層中から青磁小片が出土している。遺構は検出することはできなかった。

第7トレンチ(Tr7)〔第35・42図 図版8〕

市道布勢1号線と市道布勢2号線の交差点に設定した幅1.8×長さ1.8mのトレンチである。現地盤の標高は12.49mである。第1層は道路舗装及び黄褐色粘質土ブロックを含む客土が厚く堆積している。

第2層は第3・4層を掘り込む土坑状遺構の埋土である。第3層は暗褐色砂質シルトでガラス片が混じる。第4層は黄褐色の砂質シルトである。

遺物は客土中より五輪塔の空風輪が出土している。第2層中より近代の物と考えられる陶器片が出土している。遺構は第3・4層を掘り込む土坑状の遺構を検出したが、第3層からはガラス片が出土していることから近代以降のものと考えられる。

第8トレーニング(Tr8)〔第35・42図 図版8〕

市道布勢1号線と市道布勢2号線の交差点の南側約65mに設定した幅1.8×長さ2.1mのトレーニングである。現地盤の標高は19.45mである。南側には水道管が敷設されており、現地盤から1m程度は攪乱を受けている。第1層及び第2層は道路舗装及び基礎碎石、水道管敷設用の砂である。第5層は炭片がわずかに混じり、良く締まる暗褐色粘土が堆積し、備前甕が出土している。第6層は5mm程度の橙色ブロックを含む黒褐色粘土が堆積し、土師器片・須恵器片が出土している。第7層は0.5~1cm程度の橙色ブロックを含む黒褐色粘土が堆積し、土師器片が出土している。

遺物は第5層中から備前甕片、第6層中より土師器片・須恵器片が出土しているが、いずれも細片である。遺構は検出することはできなかった。

第9トレーニング(Tr9)〔第35・42図 図版9〕

市道布勢1号線と市道布勢2号線の交差点に設定した幅1.6×長さ1.6mのトレーニングである。現地盤の標高は19.4mである。第1層は道路舗装及び基礎碎石である。第2層は地山ブロックが混じる客土である。第3層は明橙色粘土の地山である。遺構・遺物を確認することはできなかった。

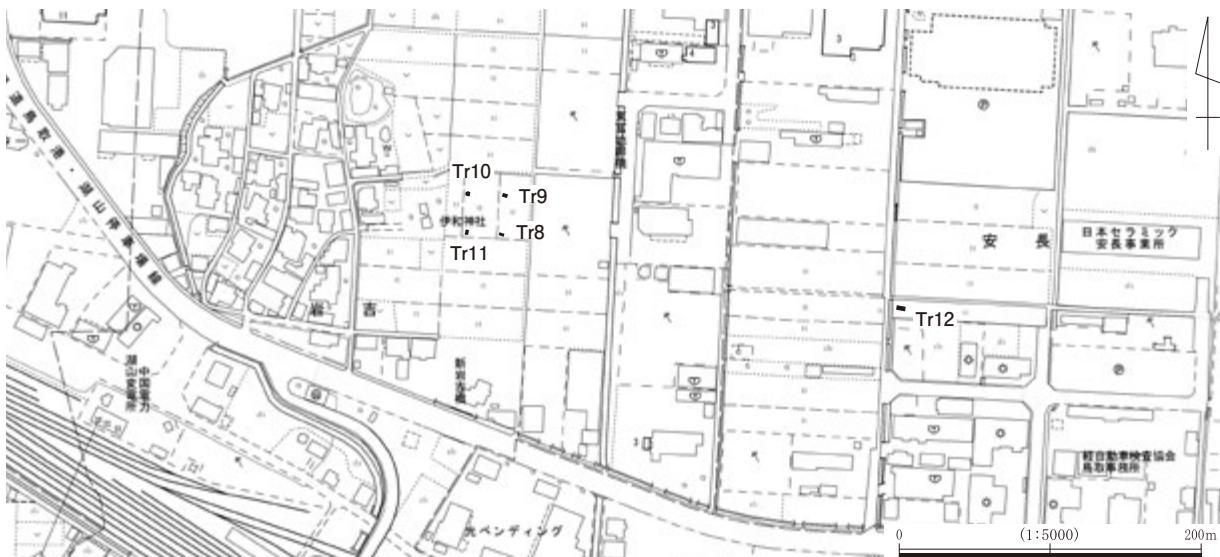
小結

宅地造成事業区域内で実施した第3・4トレーニングの標高1m付近から畦畔状遺構、第5トレーニングの標高0.6m付近から溝状遺構を検出した。また、標高0m付近以下の泥炭層や未分解植物遺体を含む層中から木製品が出土している。第3・4トレーニング周辺では、これまで標高1m付近から掘り込まれる溝状遺構が検出されており、中世あるいはそれ以前の遺構が想定されている。また第5トレーニングの東約80mでは標高0.7~0.9m付近に中世の遺物包含層が認められており、第5トレーニングの溝状遺構も中世の時期の可能性が考えられる。さらにいずれのトレーニングも標高0m前後には未分解植物遺体を含む泥炭層や砂層が認められ、時期は今のところ不明瞭ながら、第1~第5トレーニング周辺には密度の違いはあるものの木製品を主とした遺物包含層が広く分布する可能性が考えられる。

公共下水道事業計画区域内で実施した第6~第9トレーニング周辺は住宅街になっており、旧地形を検討することは難しく、大きく改変を受けていることが容易に想定される。今回調査を行ったいずれのトレーニングからも遺構を確認することはできなかったが、土師器片や須恵器片が出土しており、第7トレーニングに隣接する民家では庭を造成中に17世紀ごろの備前焼の壺が出土していることから周辺には遺跡が所在していた可能性は極めて高いと言える。また丘陵頂部には国史跡である布勢古墳が所在していることから中世だけではなく、古墳時代の遺構等も検討する必要があろう。今後も周辺の開発には注意を払いながら、天神山遺跡の範囲や卯山との関係を検討していく必要があろう。

第8節 岩吉遺跡

岩吉遺跡は千代川左岸に広がる鳥取平野西側部分のほぼ中央部に位置し、東西約0.8km、南北1km前後と非常に広範囲にわたる遺跡である。遺跡の中心部分と考えられている現在の岩吉集落や伊和神社境内を除けば周辺は水田地帯から住宅街や商業施設が立ち並ぶ街へと変貌を遂げており、それらの開発に伴う発掘調査も行われている。中でも1995年に行われた調査では墨書き土器や木簡類が大量に出土しており、鳥取平野の成り立ちを考える上で非常に重要な遺跡であるといえよう。



第43図 岩吉遺跡 調査トレンチ位置図

今回行った調査のうち、第8～11トレンチは宅地造成事業に伴い実施した試掘調査、第12トレンチは社屋新築事業に伴って実施した試掘調査である。宅地造成事業に当たっては原因者の協力を得て、重機による掘削を行った。なお周辺では同様の開発事業が行われていることからトレンチの番号は平成24年度からの通し番号を使用した。

第8トレンチ(Tr8)〔第43・44図 図版9〕

第8トレンチは開発区域の南東側に設定した南北2.0×東西3.5mのトレンチである。現地盤の標高は約3.2mである。第1層は耕作土である。第2層から第4層までは均質な土壤が堆積している。第5・6層は、灰色～灰褐色系のシルト質砂が堆積し、ラミナがみられる自然堆積層である。第7・8層は1～3mm程度の砂を含む暗灰色シルト層で、攪拌を受けた痕跡がみられることから水田層の可能性が考えられる。第9層以下は軟弱な粘土層になり、自然堆積の様相を呈す。

遺物は第1層、第4層中より土師器・須恵器片が出土している。遺構は検出することはできなかった。

第9トレンチ(Tr9)〔第43・44図 図版9図〕

第9トレンチは第8トレンチ北側約28mに設定した南北2.5×東西3.5mのトレンチである。現地盤の標高は約2.9mである。第1層は耕作土、第2～4層はシルト質の土が堆積し、北側から南側に向けてわずかに傾斜を持つ。第5層はトレンチの南側のみで確認ができた暗灰色シルトで第6層は第7層を掘り込む遺構埋土である。第7層は灰暗色シルトで細砂が混じる。第8層以下は軟弱な粘土層である。

遺物は掘下げ中に土師器細片が出土している。遺構は第7層を掘り込む溝状の遺構を検出しているが、共伴する遺物はなく時期は不明である。

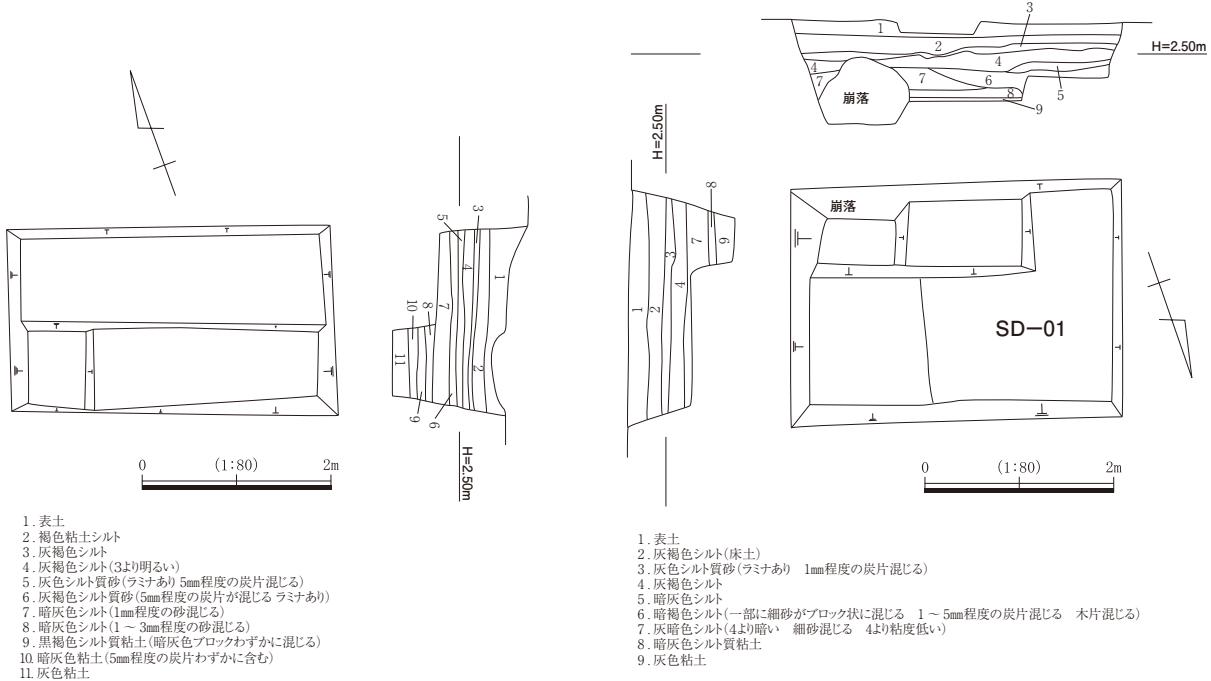
第10トレンチ(Tr10)〔第43・45図 図版9・10〕

第10トレンチは第9トレンチの西側約21m付近に設定した東西2.0×南北3.2mのトレンチである。現地盤の標高は約3.0mである。第1層は耕作土である。第2層は上部にマンガン斑を有する灰色シルトである。第3層はわずかに砂粒を含むことから水田層の可能性が考えられる。第4層は層厚10cm前後の灰褐色シルトが堆積している。第5層以下は粘土層が厚く堆積している。

遺物・遺構を確認することはできなかった。

第11トレンチ(Tr11)〔第43・45図 図版10〕

第11トレンチは第8トレンチの西側約21m付近に設定した東西2.0×南北3.2mのトレンチである。現地盤の標高は約2.9mである。第1層は耕作土である。第2層は灰褐色シルト、第3層は褐色シルトである。第4層は明灰色シルトが20cm程度堆積し、第5層は暗灰色シルトが堆積する。第4層中は砂がブ



第8トレンチ

第9トレンチ

第44図 岩吉遺跡 第8・9トレンチ実測図

ロック状に混じり、第5層中は砂粒が混在している。第6層は第5層より暗い暗灰色シルトが堆積する。第7層は灰色シルト、第8層は黒褐色シルト質粘土が堆積する。

遺物は第3層中より磨滅した土師器片が出土している。遺構は確認することはできなかった。

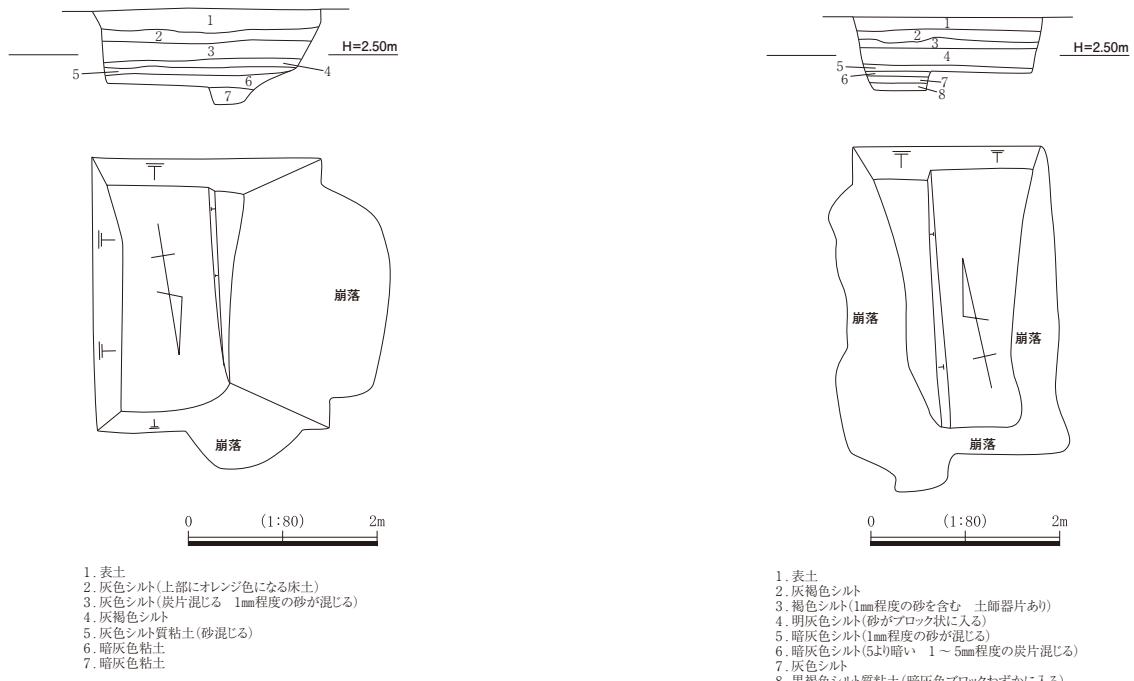
第12トレンチ(Tr12) [第43・45図 図版10]

第12トレンチは開発事業区域内の西側に設定した南北3.0×東西6.0mのトレンチである。現地盤の標高は8.6m前後である。第1・2層は黄色系の粘質土で水田の耕作土及び床土である。第3・4層はオリーブ灰色粘質土が堆積し、第4層上面で第3層上面から掘り込まれた暗渠を確認している。また第4層中からは土師器片が出土している。第5～7層は暗青色粘土が堆積しており、その中で第5・6層中には黒褐色粘質土が点在する。また第7層中には第8層をブロック状に含むことから水田耕作などの攪拌を受けた可能性が考えられる。第8層は緑灰色シルトが堆積している。

遺物は第4層中より土師器片が出土しているが、かなり摩耗していることから周辺からの流れ込みと考えられる。遺構は確認することはできなかった。

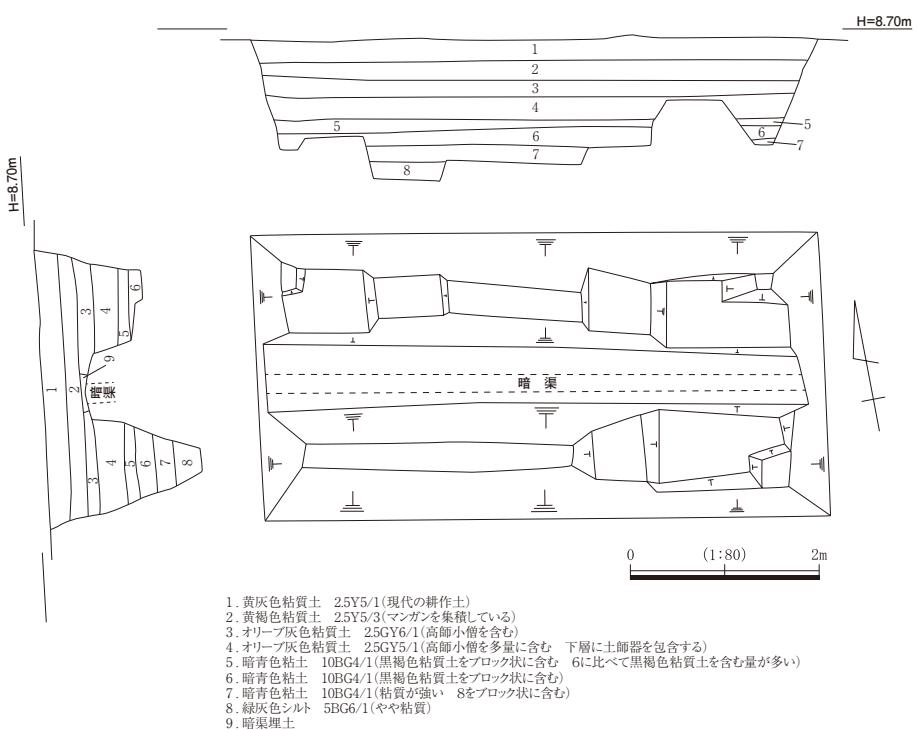
小結

今回の宅地造成事業及び社屋新築事業に伴う試掘調査では時期は不明ながら第9トレンチで溝状遺構、また各トレンチで水田耕作に伴って攪拌を受けたと考えられる土層を確認することができた。遺物は各トレンチで土師器・須恵器片、第12トレンチでは土師器片が出土しているが、摩耗が著しく、周辺からの流れ込みと考えられる。今回の調査地を含め、周辺にはまだまだ水田や畠地が所在しており、今後も開発事業計画が進むと考えられることから開発事業に当たっては注意を要する。



第10トレンチ

第11トレンチ

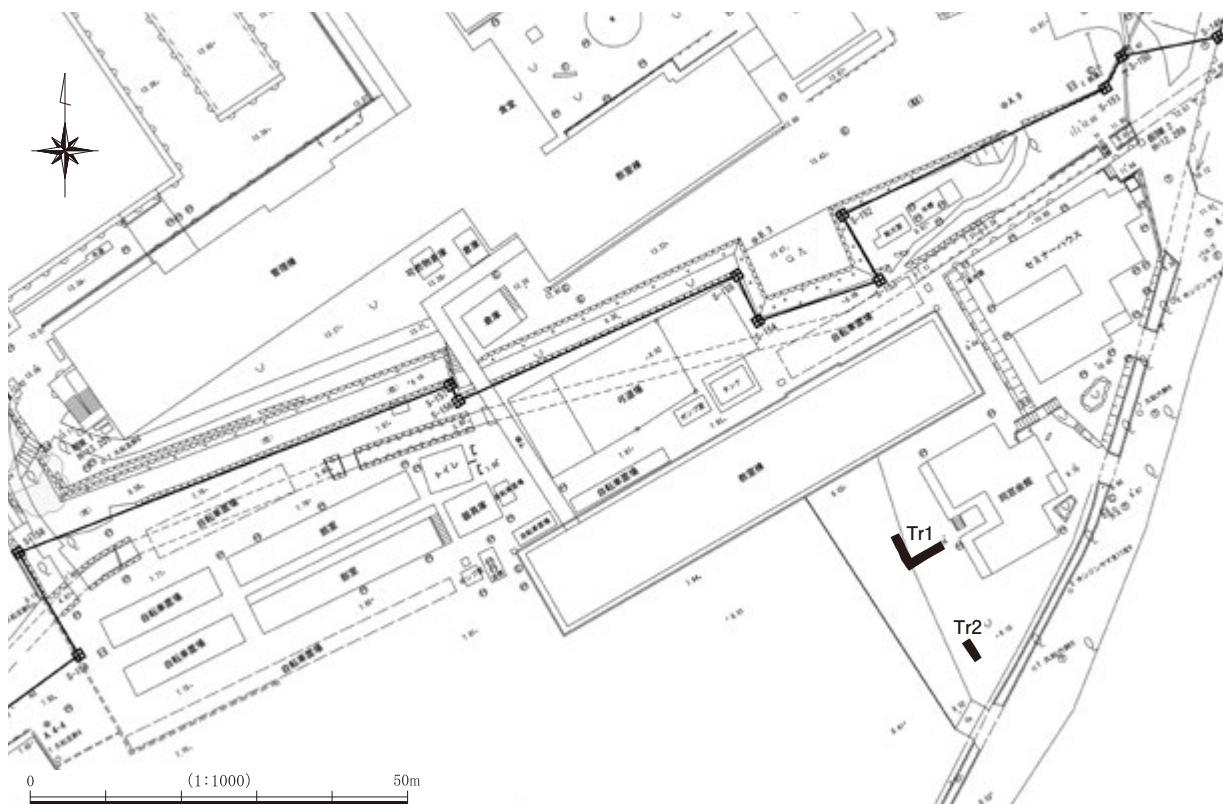


第45図 岩吉遺跡 第10・11・12トレンチ実測図

第9節 鳥取城跡(第35次)

鳥取城跡第35次調査区は、国指定史跡範囲の若干外側、現鳥取県立鳥取西高等学校第2グラウンド北東部の同窓会館前に位置する。高校の耐震改修工事に伴う仮設校舎の建設予定地にあたることから、2ヶ所にトレントを設定し遺構面の確認を行った。

東側に隣接する水路は城内外を区画する境界にあたり、当時の区割りを現在に伝えている。当該地は、文政6年(1823)に創設された藩の田代制度に基づく備蓄倉庫である御蔵が存在しており、幕末期には11棟の御蔵と御武具蔵をはじめとする8棟もの蔵が立ち並ぶ状況であった。一方、大倉庫群となる以前の歴史的変遷は多様であり、17世紀においては押領屋敷が設置され郭外としての様相が強かった。18世紀に入ると分知家である西館池田家の上屋敷が置かれ、19世紀に入ると火事を境に、屋敷地から防火用の明地として整備、その後に倉庫群として再整備がなされている。城郭としての管理地となるのはこの御蔵期以降のことである。

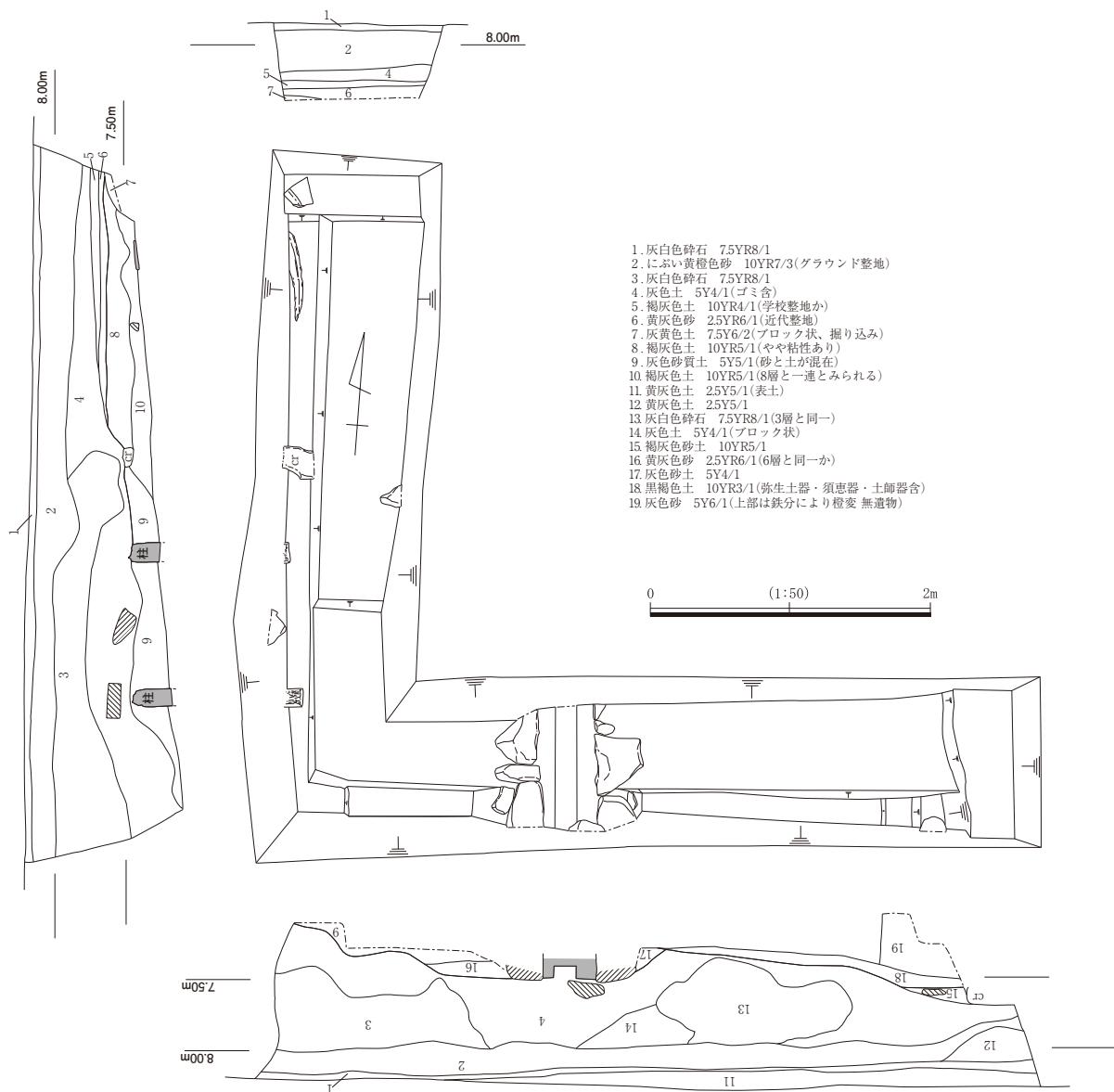


第46図 鳥取城跡(第35次) 調査トレント位置図

第1トレント(Tr 1) [第46・47図 図版10]

北側へ5.1m、東側へ5.5m、幅1.2mで設定した平面L字形のトレントである。標高8.2mの地表面より30cmに広がる1・2・11・12層は碎石やグラウンド整地面、その下に50~60cmも堆積する3・4・13・14層は現代の学校整備に伴う層である。標高7.6m付近に広がる5・6層は近代学校整地面とみられる。標高7.5mを上面として南北方向へ延びる石組みの溝を検出した。30~40cm程度の石材を対面させて造られた溝の内側にはコンクリートが充填され、中央には幅10cmの溝状の凹みがみられる。当初は石組み溝であったものがコンクリート溝へと転用されたようである。石組み溝の形態は近世にみられるものに類似が多いが、周辺は大規模に掘削され明確な遺構面は確認できず、唯一溝に伴う16層は近代層であることから正確な構築時期は不明である。

これらの下層、現代の攪乱層下では状況が一変する。7~10・18層は土質が安定し、弥生土器や土師

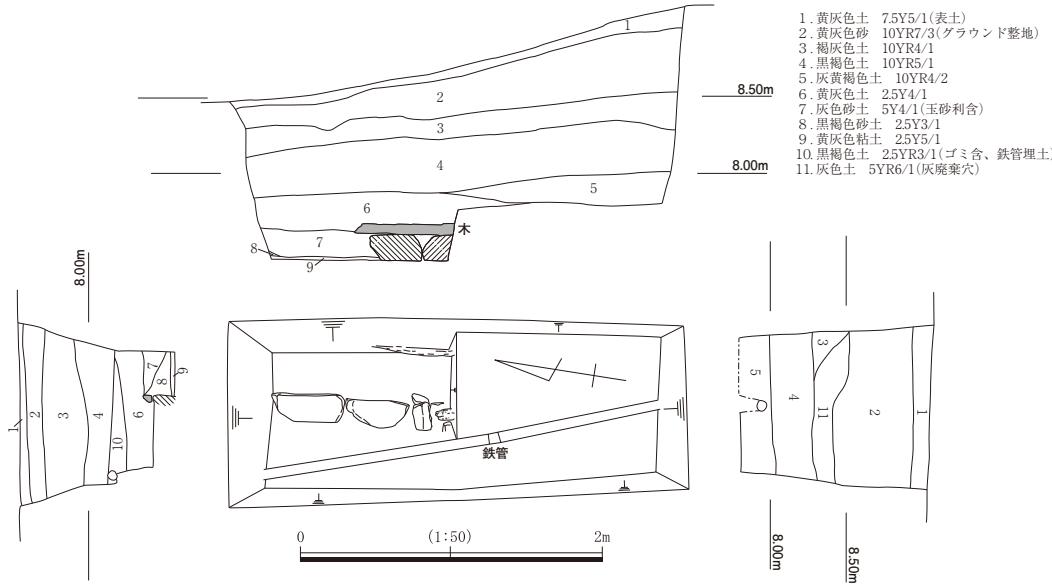


第47図 鳥取城跡(第35次) 第1トレンチ実測図

器、須恵器片を多数含む遺物包含層である。遺構は確認できず、出土遺物は器面の磨滅が顕著であることや、層内に互層状の堆積がみられることからも長期にわたる自然堆積が想定できる。また9層内には12cm四方の角材が1mの間隔を空けて並列するが時期の特定には至らなかった。最深部にあたる19層は灰色砂であり、遺物を含まない均一な層である。

第2トレンチ(Tr2) [第46・48図 図版10]

第1トレンチより南東側へ13m、水路付近に設定した3.0×1.1mの長方形トレンチである。地表面の標高は北側が8.5m、南側は9.1mと南へ向かって上昇する。トレンチ内を掘削すると標高7.9m付近に南北方向へ延びる鉄管を検出したため、これらを避ける形で北半をさらに掘り下げた。地表面から約1m、標高7.6m付近までの第1～6・10・11層はプラスチック等のゴミを多く含む現代攪乱層である。これらを除去した、標高7.6mに上面を揃える形で石組みの溝を確認した。幅20cm程度の石を東西方向へ対面させており、検出分の長さは1.2m、内寸は30cm程度、上面は平滑である。東側列についてはトレンチ断面に僅かに露出するため平面形は確認できなかった。7～9層は溝埋土とみられ、粘土質の9層を底面とし、砂質の7・8層が堆積する。また、両岸とも上面に沿う形で木を検出した。層位より近



第48図 鳥取城跡(第35次) 第2トレンチ実測図

代以降の設置とみられるが、性格は不明である。

小結

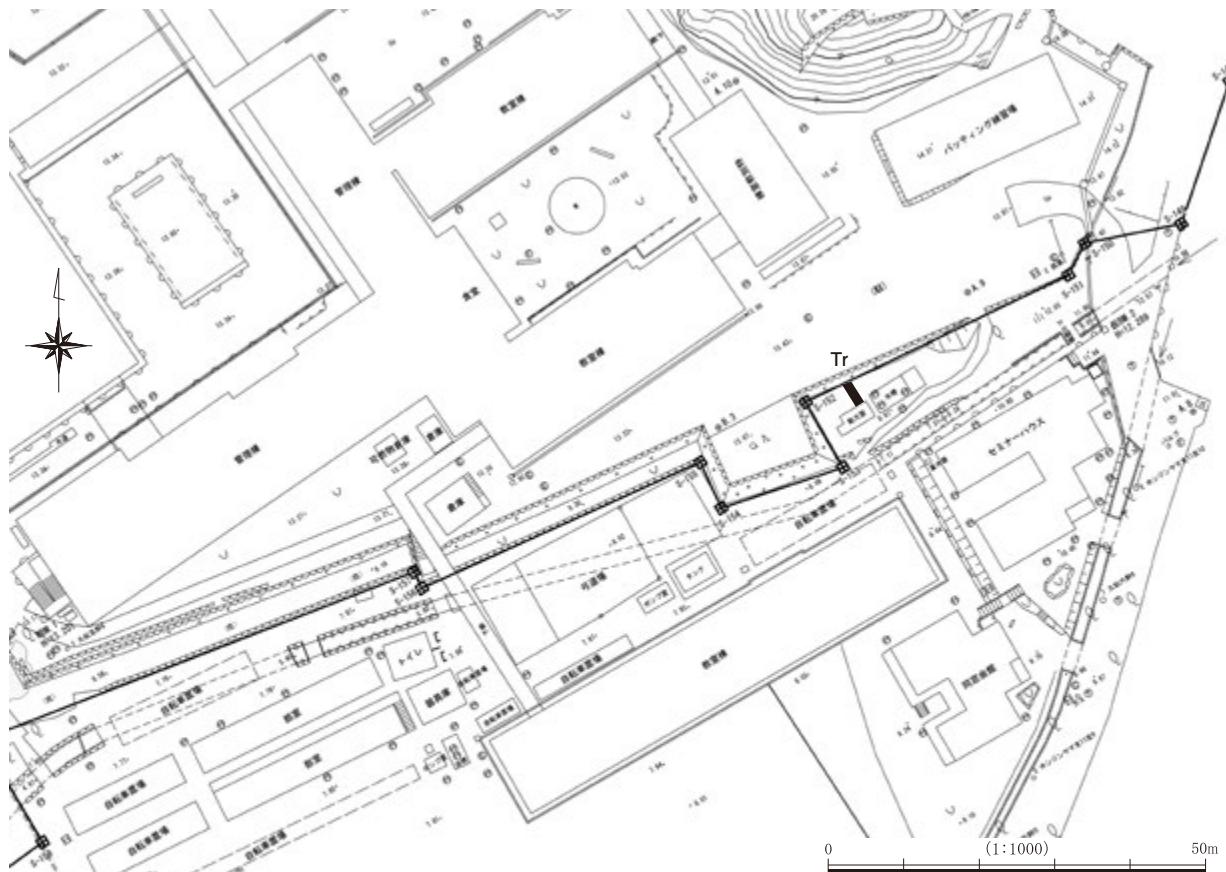
近世遺構面の検出が期待されたが、現代の掘削により地表面下を大規模に攪乱されているため、両トレンチとも明確な遺構面を確認することはできなかった。その中でも両トレンチで検出した石組み溝は方向や上面高に共通する部分が多く、一連の溝であるとみられる。第1トレンチでも明らかなように内部にコンクリートが敷かれることから近代にも利用されていたことが分かっているが、同様の石組み溝は近世～近代にかけて城内で散見されていることから、近世期にまで遡る可能性も僅かに残る。また第1トレンチ下層にみられる弥生土器や須恵器を含む包含層は、隣接する柵蔵調査区でも確認されており、調査区東側に続く谷部(水道谷)では弥生時代以降の遺物が多く採取されていることから、当該地の地形の成り立ちを考える上で重要な存在と考えられる。或いは、包含層上部が直接生活面として利用されていた可能性も想定する必要があるとみられる。

第10節 鳥取城跡(第36次)

鳥取城跡第36次調査区は、第35次調査区の北側、石垣と動力室との間に位置する。国指定史跡範囲の境界となる石垣裾部より外側に向けて設定したもので、史跡隣接地に該当する。鳥取県立鳥取西高等学校の耐震改修工事に伴う動力室の改修のための調査であり、遺構面の位置や範囲を確認することを目的としている。

当該地の変遷は、第35次調査区に同様であり、近世中期まで郭外であったが、後期に入り郭内となり幕末へと至るものである。17世紀においては拝領屋敷が設置され郭外としての様相が強かったが、18世紀に入ると分知家である西館池田家の上屋敷が置かれ、19世紀に入ると火事を境に、屋敷地から防火用の明地として整備、その後に柵蔵と呼ばれる倉庫群として再整備がなされている。城郭としての管理地となるのはこの柵蔵期以降のことである。調査区が接する石垣は幕末が迫る万延元年(1860)より実施された鳥取城最後の大拡張整備である三ノ丸改築に伴い構築されたもので、西側にみえる櫓台上的出張部を含め、南側へ向け大規模に曲輪の造成が実施されている。

調査区南側の水路は、東側の水道谷より続いており、近世当時は西側の南御門付近にあったとされる鳥取堀へ注いでいたものである。万延期の三ノ丸拡張前後で形を変えているとみられ、拡張以前18世紀

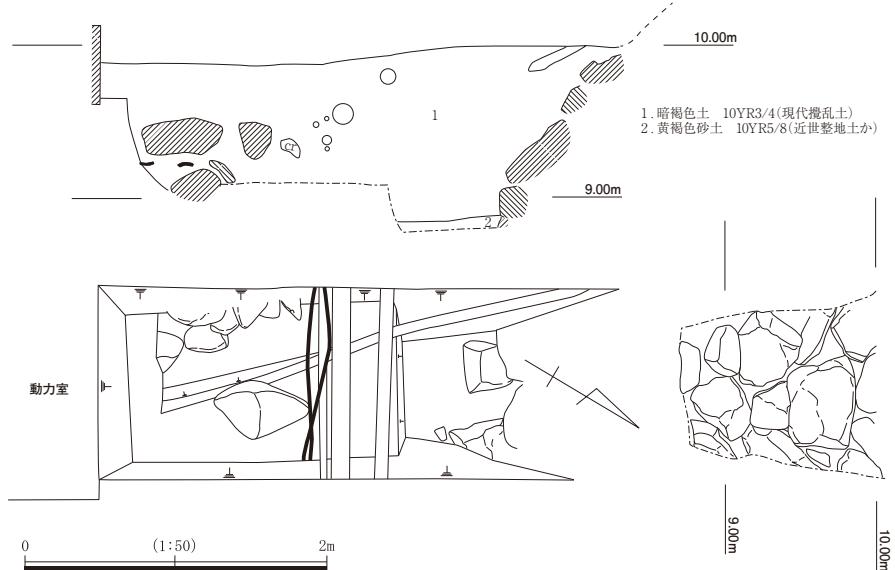


第49図 鳥取城跡(第36次) 調査トレンチ位置図

台頃までは、先述の通り城郭外の辺縁部にあたり、鳥取堀との間に「堀」と書かれる溜池状のものやそれに伴う土手が存在していたことからも、建物用地等ではなく自然流路が位置する水辺の様相を呈していたと推定される。その後、糀蔵群が建設される過程で郭内へと取り込まれ、拡張後は石垣の裾部が位置することとなった。しかしながら、拡張後も水路が形を変え残存していることから、建物等が位置していた場所ではなかったと考えられる。

トレンチ(Tr)〔第49・50図 図版11〕

万延期の拡張で築かれた石垣裾部に設定した $3.2 \times 1.3\text{m}$ のトレンチである。この石垣裾部を結ぶライン(第49図太線)をもって史跡境界となっており、本トレンチは境界に接する形に位置する。現況は動力室等の施設が設置され、南側には現代水路が走っていることから、現代の改変を大規模に受けていることが想定された。地表高は石垣側で 10.0m 程であり、谷部へ向かい緩やかに傾斜がつく。表面部分にはプラスチック類等の現代ゴミを多く含んでおり、これらを除去しつつ掘り下げていくと、水道管とみられる塩ビ管や、電気ケーブル等、現在も使用中の管が多数現れた。動力室と並行し標高 9.4m 付近に集中しており、埋設年度や接続先等の詳細は一切不明とのことであった。また周辺にはコンクリート片や人頭大の石などが多数見受けられ、標高 9.1m 付近ではトレンチを縦断する管も検出されたため、南半部はこれ以上の掘削が困難となり、北側の石垣裾部のみを掘り下げるに留めた。地表から続く現代層はさらに下部へと続き、標高 8.9m 付近でようやく終わることが確認された。その厚さは 1.1m を測り、大規模な改変を受けていることがわかった。この攪乱層の下、第2層は整地されたような硬化面である。一見して土質が異なっており、それまでの現代ゴミ等は含まないことを確認したが、調査範囲の都合上これ以上の掘削は困難であった。また、石垣は 50° 程の傾斜を持ち、標高 9.0m 付近より垂直気味となっており、図中には現れないものの2層下へと続くことを確認した。



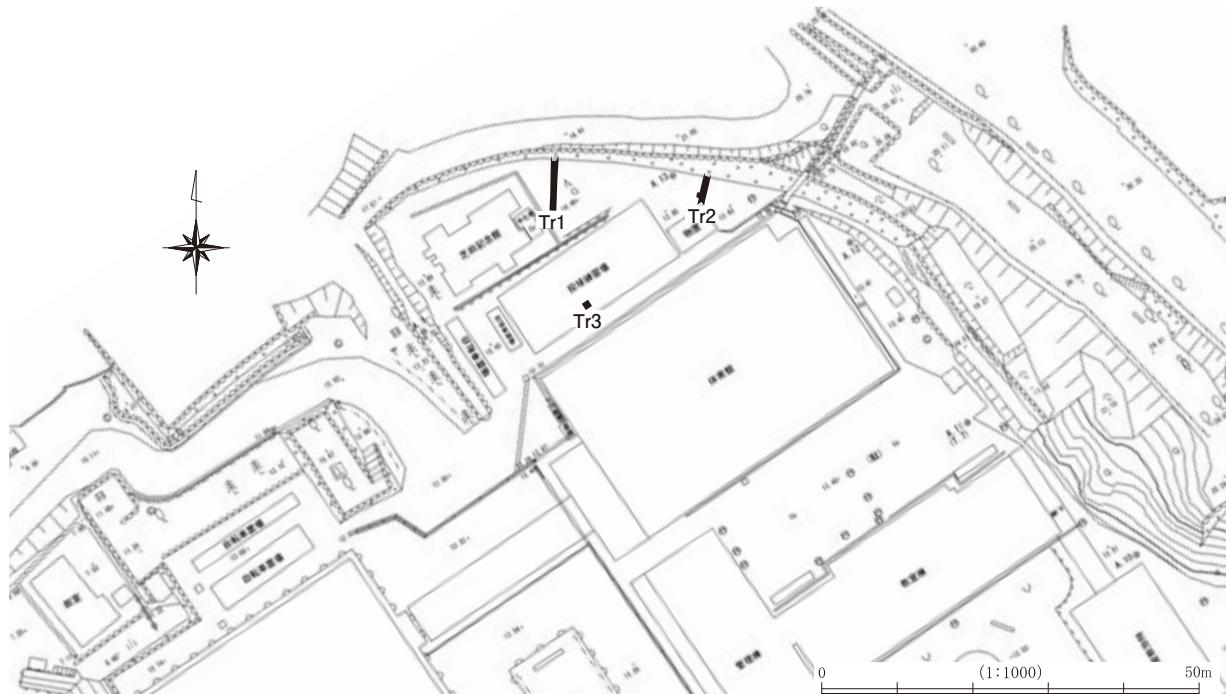
第50図 鳥取城跡(第36次) トレンチ実測図

小結

トレンチ下層は掘削可能範囲が狭く、遺物等の出土もなかったが、他の調査区の状況と比較すると、第2層はその土質からも近世層である可能性が高いと考えられるため、この層を遺構面として仮定した。また、先述のとおり第1層は現代層であるが、それまで存在していた近現代層を攪乱したものであるか、あるいは動力室建設の際に搬入されたものであるかは判断できなかった。

第11節 鳥取城跡(第37次)

鳥取城跡第37次発掘調査区は鳥取県立鳥取西高等学校敷地の北端、芝田記念館および投球練習場周辺に位置し、高校の耐震改修工事に伴う新校舎建設に先立ち遺構面の確認を目的とした調査である。



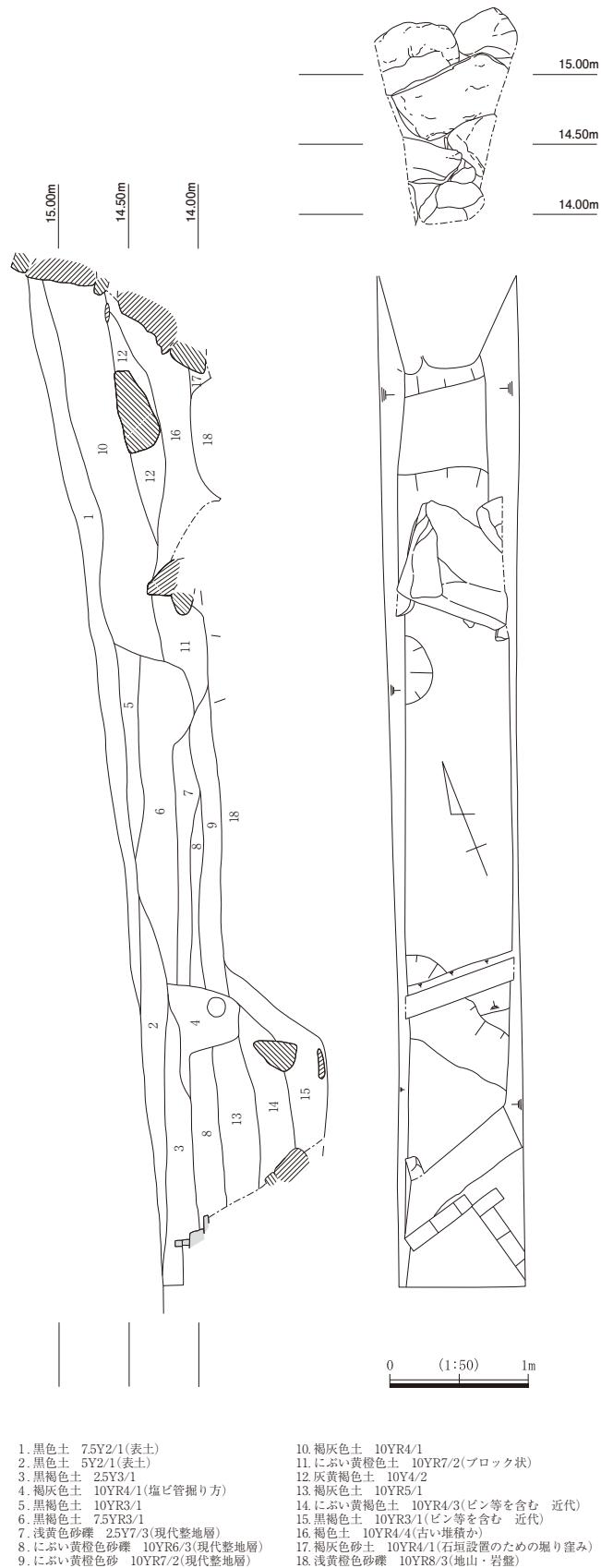
第51図 鳥取城跡(第37次) 調査トレンチ位置図

近世期の当該地は、三ノ丸の北端部にあたり、入口にあたる太鼓御門を抜けた正面に位置し、古くは御宝蔵、幕末期には台所等が置かれた場所であった。変遷をみると近世前期においては、現二ノ丸が本丸に相当し、当三ノ丸は藩主の隠居所がおかれており、敷地面積も現在より小さかったとみられる。その後、三代藩主池田吉泰により大造成が行われ享保3年(1718)完成後には本丸が移されたが、僅か2年後の享保5年には石黒火事にて全焼する。当該地の御宝蔵もこの時焼け落ちており、再建後は高石垣に囲われた一段高い場所に占地していた。しばらくはこの状況が続き、文久元年(1861)完成の三ノ丸大拡張の際に土地は切り下げられて段差はなくなり、屋敷地となつた。第1・2トレンチが接する石垣もその際に現況(大部分は昭和期に修理)となり、併せて南側を走っていた登城路も北(石垣上)へと変更されている。

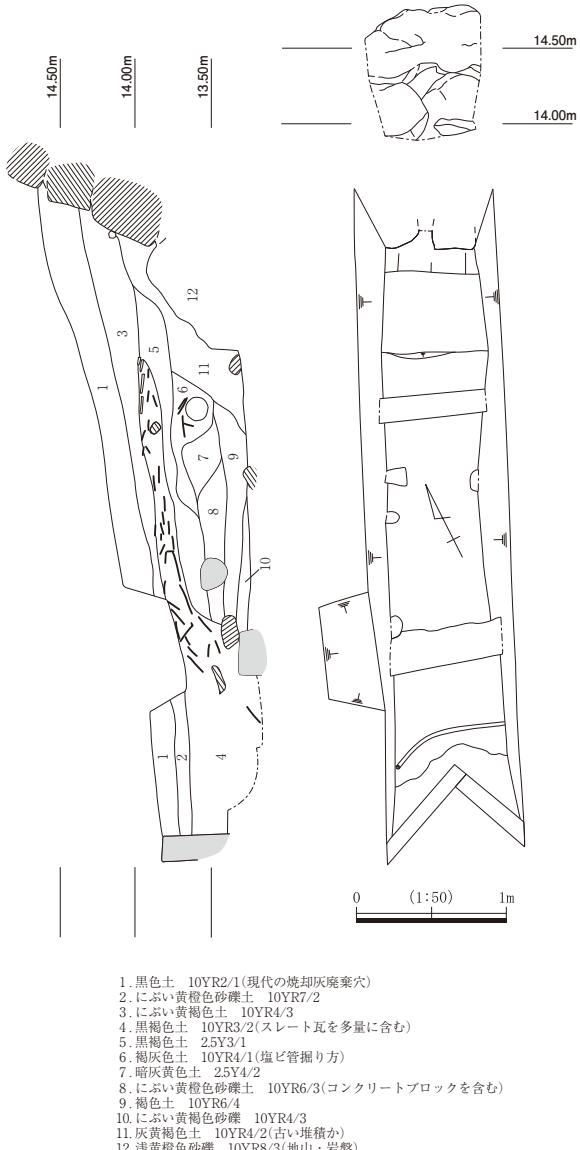
第1トレンチ(Tr 1)

[第51・52・55図 図版11]

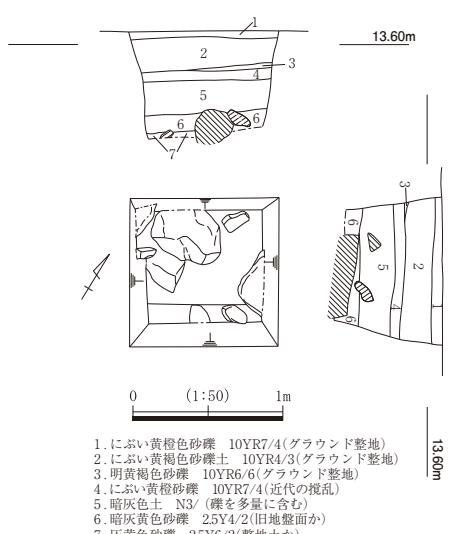
芝田記念館東側、石垣裾部に設定した長さ7m、幅1mのトレンチである。付近の地表上にみえる石垣の大部分は昭和期の修理に伴い積み直しが行われており、残存するのは根石より1.4m程度、図化した部分のみであるが、上段については近代修理に際し表面が加工されている。地表高は北側の石垣部で15.2m、南側で14.3mと傾斜する。1層から13層まで、地表面下80cm程度までは現代造成土であり、ゴミなどを多く含む。14・15層はこれらに先行した堆積であるが、含まれるゴミより近代層である。これらを除去した16～18層が近世期に関連した層位とみられる。最下層の18層は地山であり、周辺部でもよくみられる橙色系の砂礫層である。13.95mに位置する石垣の根石下より続き、裾より80cm程度の地点で一旦落ち込みがみられるが、大型石材に遮られるため遺構の肩部であるかは不明である。石材は石垣の一部とも考えられる大型



第52図 鳥取城跡(第37次) 第1トレンチ実測図



第53図 鳥取城跡(第37次) 第2トレンチ実測図



第54図 鳥取城跡(第37次) 第3トレンチ実測図

のもので、設置されたものではなく、落ち込んだ様相を呈していることから、あるいは昭和18年の地震の際の転石である可能性も考えられる。石材南側では、2.5m程を比高差10cm程度の緩やかな勾配で傾斜し、西際には直径50cmのピット状の落ち込みもみられる。上面部分は削り取られたかのように平滑であり、生活面らしき痕跡が見られないことや、直上の9層まで現代層であることから、本来の遺構面は削平されたとみられる。さらに南側では傾斜しながら70cm程下降するが旧来の段差を反映したものかは判断できなかった。

一方、石材の北側、石垣との間には厚さ20cm程の16層がみられる。石垣下部2段程を覆うこの層は他層とは異なり整地土の様相を呈していることから近世層の可能性が考えられる。17層は標高14.06m付近、石垣根石付近にあり、石垣設置のための地山掘り下げ部分に充填された層である。

石垣は先述のとおり下部の4段程のみであるが、上部は表面加工を受けている。勾配をみると下3段は45°程であるが、上部は垂直気味となる。

遺物は瓦片が多く、図化もしくは採拓できたものは3点のみである。

第2トレンチ(Tr2)[第51・53図 図版11]

第1トレンチの東側21m、石垣裾部に設定した長さ4.4m幅1mのトレンチである。地表高は北側で標高14.6m、南側で13.8mであり、第1トレンチ同様、トレンチ底までの深さ1m程の大規模な攪乱を受けている。

1～9層は現代の堆積土で、コンクリートなどのゴミを多量に含む。トレンチ南側の底にはコンクリートの基礎が確認されており、4層はさらに下層へ及ぶとみられる。10層はそれまでと異なり砂質で現代ゴミを含まない層であることから近世層である可能性も考えられる。11層も同じく9層までとは土質が異なる。岩盤である12層を10数cm程掘り下げて設置された石垣根石の半分程と、傾斜する岩盤を覆うように堆積するこの層は、近世層である可能性が高い。北側の石垣際の標高は14.1mであるが、南側が大

規模に攪乱されているため、本来の面がどこまで続くかは不明である。

12層である岩盤は、標高13.93mを最高点として南北両側へ傾斜する。北側は10数cm程掘り下げられ石垣が設置されている。

第3トレンチ(Tr3)〔第51・54図 図版11・12〕

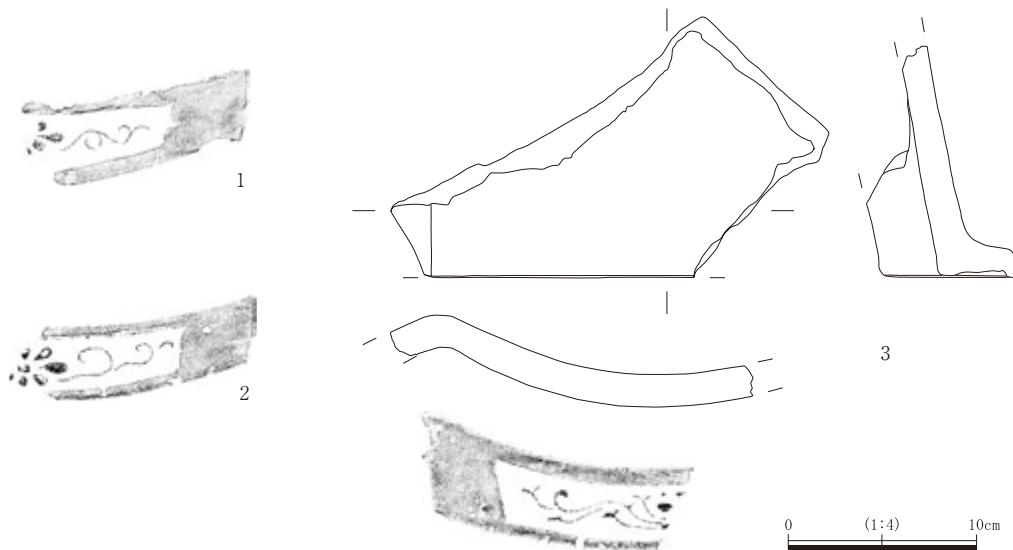
投球練習場内に設置した1m四方のトレンチである。標高13.7mの地表から約30cm、1～3層は学校整備の層である。4・5層は礫を多く含む層である。6・7層は近世層である可能性が高い。トレンチ底の標高12.9m付近には岩盤の一部とも考えられる石が散見され、これを覆う形で位置する6層は締まりがあり、13.17m付近の上面は旧地盤面、その下7層は岩盤間を埋める整地層と考えられる。

遺物〔第55図 図版14〕

図化できた遺物は軒平瓦1点のみであり、その他2点を採拓した。1～3はいずれも第1トレンチ出土で、1は、s類で中央は花文。2は、新出の型、中央の花文はs類同様であるが、唐草は上方へ2転する。3はi類の右軒棧瓦である。

小結

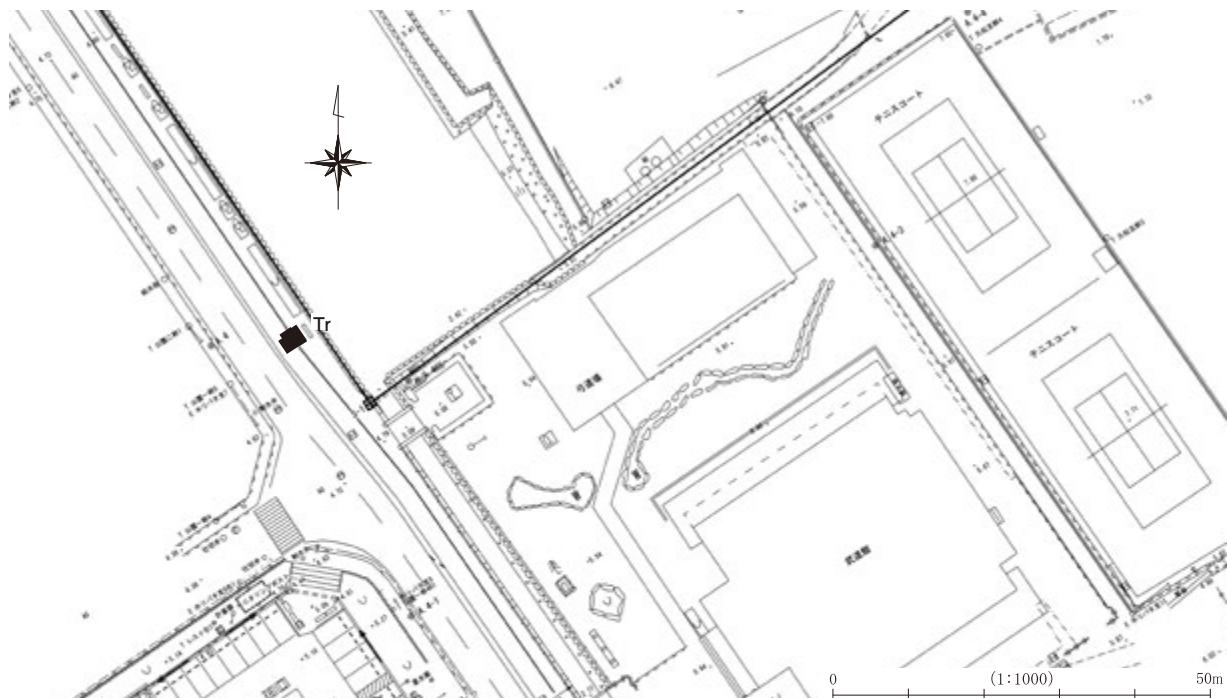
第1・2トレンチとも岩盤を若干掘り下げ、標高14m付近に石垣根石が置かれている。一方幕末期の拡張の際、石垣前面には、石垣と並行して御庭道が走っており、その幅は推定で4～5m程である。現況で現代攪乱が根石より下部まで及んでいるため、御庭道を検出することは困難であるが、第1トレンチの標高14.06m、第2トレンチの標高13.93mにある岩盤最高点付近には遺構面が存在していたとみられ、前者16層・後者11層を含めるとより高位置となる可能性がある。トレンチ部分については下層まで攪乱が及ぶが、周辺については遺構の残存も考えられるため、その旨を鳥取県教育委員会へ報告し、校舎建設の際に遺構残存状況の確認調査の必要を伝えた。一方第3トレンチでは現況での推定遺構面高は13.17mと、石垣側と比べ低い。ある程度の上面削平や自然傾斜を勘案しても、比高差が大きいことから、御庭道を境として段差があり、道部分が一段高い状況であったと想定される。



第55図 鳥取城跡(第37次) 出土遺物実測図

第12節 鳥取城跡(第38次)

鳥取城跡第38次発掘調査区は、内堀の南隅、城下側に位置しており、雨水排水路敷設計画に先立ち遺構の残存状況を確認するために設定した2.4×3.4mのトレントである。城外に位置しているが、内堀石垣と一体の水路の調査であるため城下町遺跡ではなく城跡調査として取り扱った。現況は歩道となっており、バス停設置のための第24次調査では、堀との間、北東側隣接地を調査している。なお、国指定史跡境界は、第56図中の太線部分、内堀石垣の天端付近を通っているため、本調査区は史跡の若干外側に位置している。内堀は、もともと湿地帯であった一帯を大規模に開発し、近世初頭には現在の城郭の姿へと整備されたとされている。整備自体も数段階あったと考えられるが、発掘調査例も少なく実態は不明な部分が極めて多い。

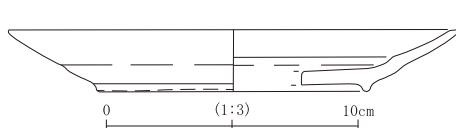


第56図 鳥取城跡(第38次) 調査トレント位置図

トレント(Tr)〔第56・57・58図 図版12〕

標高4.7m前後の歩道面にある、コンクリートブロックを除去すると下には路盤基礎となる碎石(1層)がみられる。それ以前の近・現代面を一部掘り込み敷かれた碎石の厚さは最大60cmほどとなる。2・3層も同様の基礎工の一部とみられる。4層は舗装以前の路面と考えられるやや締まりのある層である。

一方、その下5層は近世層とみられる。上層の近現代の削平の影響を受けているとみられるものの、上面は硬化しており、後述の水路蓋を覆い隠すように敷かれている。包含される遺物は図化できないものも含めて近世期であるため、この層を遺構面として捉えた。5層内からは連続する4つの石材が検出された。幅70cmを超える大型の花崗岩であり、先の調査で明らかとなった水路の蓋石であり、石間には間詰のための栗石が充填される。

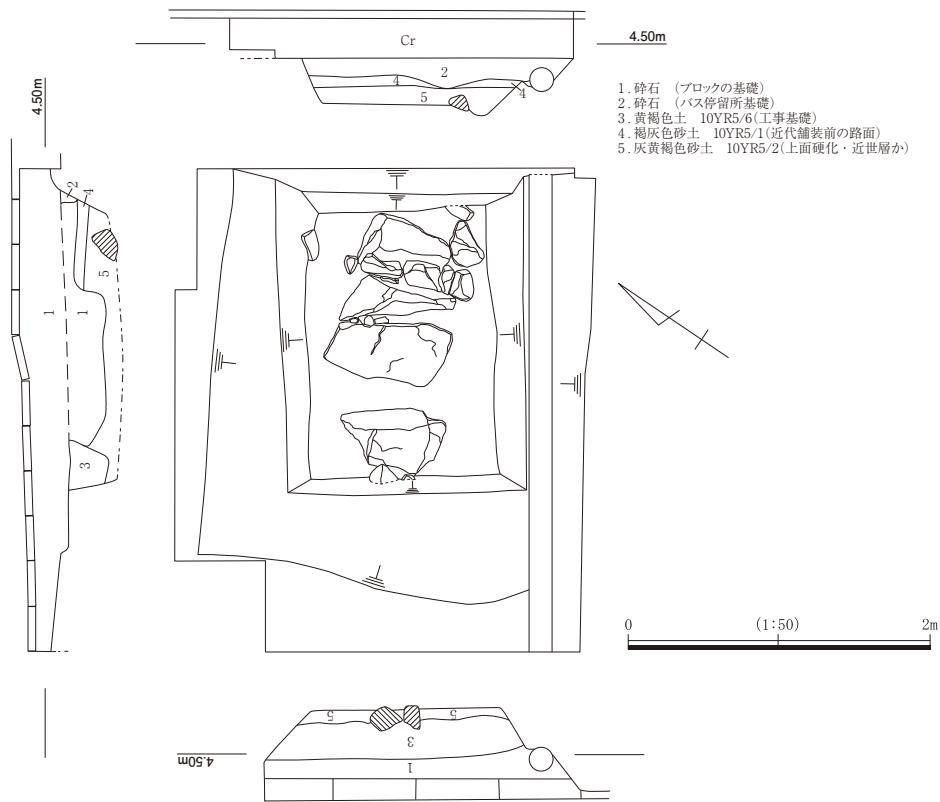


第57図 鳥取城跡(第38次) 出土遺物実測図

遺物の出土は少ないが、石材上に散在する形で1点検出した。

遺物〔第57図〕

磁器皿であり、内面に二重の圈線を持つ。



第58図 鳥取城跡(第38次) トレンチ実測図

小結

検出された蓋石は自然石状を呈し、下部には内寸幅50cm、高さ80cm程の水路が造られている。堀の水位が標高3.1mに達すると、この水路を通り城下側へ流出する仕組みとなっており、絵図によるとこの先には水門があったとされる。同様の水路は間隔を空けて3本以上が並列していたようであり、うち1ヶ所では、近世後期に凝灰岩製へと蓋の更新が確認されており、石垣同様花崗岩製の本蓋石は古手の様相を呈しているとも考えられる。いずれにしても、城下側の調査例が極めて少ないと明確な部分が大きく調査例の増加が望まれる。

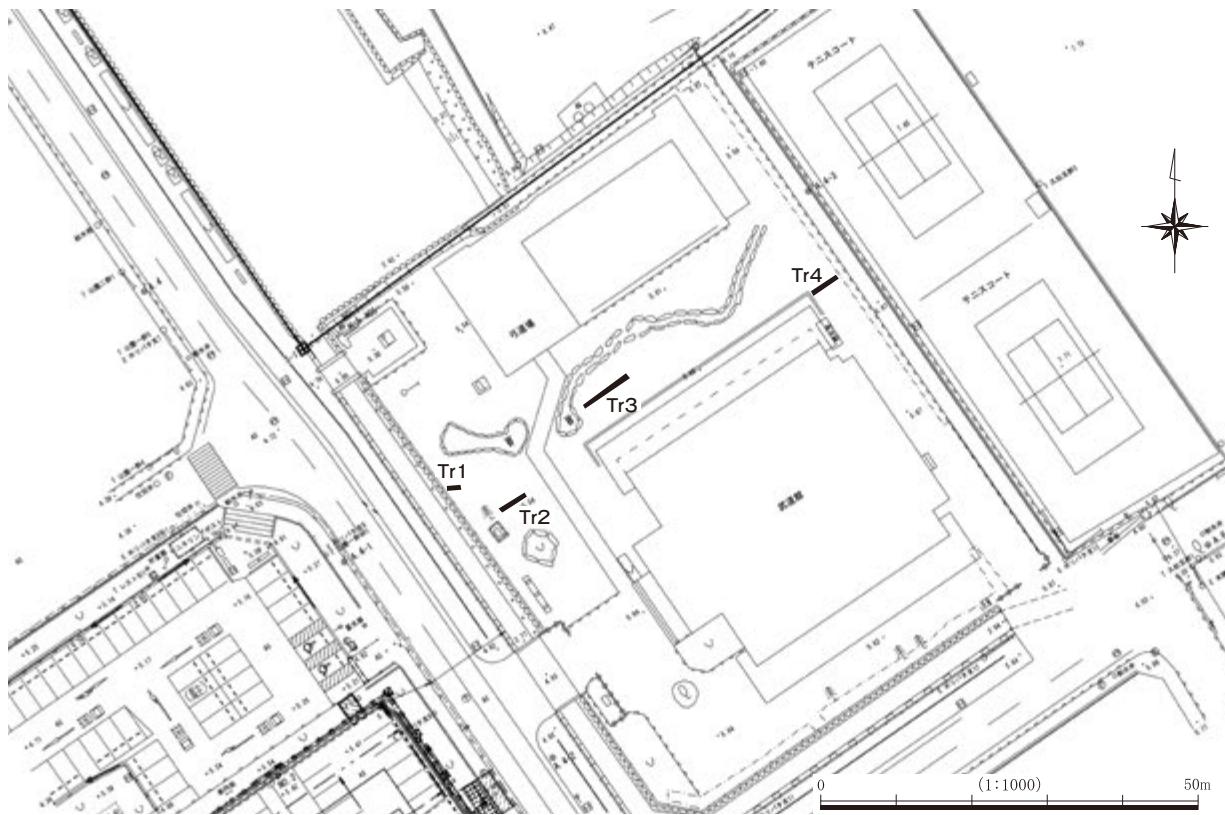
第13節 鳥取城下町遺跡(第4次)

鳥取城下町遺跡第4次調査区は、武道館と弓道場との間に位置する。この調査は、鳥取県立鳥取西高等学校整備事業に伴う南通路敷設において遺構面保護を前提とした調整を図るために、近世以前の遺構面の範囲、高さ等を確認することを目的として実施したものである。

調査は南通路敷設範囲のうち、開発計画に伴って掘削深度の調整が予想される4ヶ所に、トレンチを設定した。なお、調査区のうち第1～3トレンチは絵図等によれば、18世紀以前は武家屋敷、以後は「御勘定所」、「在御用場」、「御会所」で、第4トレンチは南御門へ通じる通路部分に相当する。

第1トレンチ(Tr 1)[第59・60図 図版12]

武道館正面の水路に接して設けた1.6×0.7mのトレンチである。水路の護岸はコンクリートの間知積みで築かれており、トレンチはその後方にあたる。第2～4層は真砂土等に由来するものである。第4層にはコンクリートブロックや比較的大きな礫が含まれ、下部には瓦片が集積していることから、第4層以上は武道館などの建設に伴う後世の造成と考えられた。また第6・7層は隣接する水路の裏込土に相当する。第8～11層は整地土、第12層は盛土層と考えられる。第9層以下は近代以降の遺物を含まない。



第59図 鳥取城下町遺跡(第4次) 調査トレンチ位置図

いため、近世以前の堆積層と考えた。

第2トレンチ(Tr2) [第59・60図 図版12]

武道館中庭に設けた $4.0 \times 0.7\text{m}$ のトレンチである。第1層(表土)を除いて第2～9層までは真砂土等を伴うことから整地、造成に伴う土と推定した。第10層以下は、上層に比べ固く締まる土層が連続する。また、近代以降の遺物を含まないことから、近世以前の堆積層と推定した。

第3トレンチ(Tr3) [第59・60図 図版12]

武道館と弓道場に挟まれた中庭に設けた $7.1 \times 0.7\text{m}$ のトレンチである。第1層(表土)を除き第2～15層には真砂土が主体となる造成土で、近代以降の遺物を含む。第16層以下は、上層に比べ固く締まり、真砂土と暗灰色土が互層となる。また、近代以降の遺物を含まないため、近世以前の堆積層と推定した。

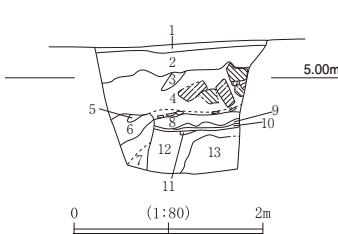
第4トレンチ(Tr4) [第59・60図 図版12]

武道館北側に設けた $3.9 \times 0.7\text{m}$ のトレンチである。第1～5層までは、真砂土と腐植土が互層となる。トレンチ短軸に並行して近代以降の鉛管等の敷設に伴う攪乱が著しい。第18層上面は表面が硬化した様子が確認でき、南御門に通じる路面に相当する可能性も考えられる。第18層以下は近代以降の遺物を含まないため、近世以前の堆積と推定した。

小結

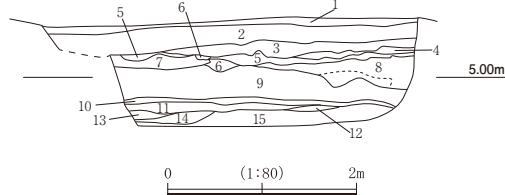
いずれのトレンチからも鳥取城下町に関連する遺構は確認できていない。トレンチから出土した遺物もほとんど無く、近代以降の遺物を含まないことや、整地土の状況から、時期を推定している。トレンチ全体を通じて、上層にあたる近代以降の造成や攪乱に伴う堆積は真砂土を中心とし、コンクリート片、瓦片、ガラス片などを含む。上層は武道館など近代以降の建築物に伴う土地改変による堆積層と考えた。また、下層の堆積は層厚の薄い暗色系の土層が連続し、固く締まる。上層と大きく性状が異なり、近代以降の遺物を含まないため、近世以前の堆積と考え、開発事業との調整を行った。

第1トレンチ



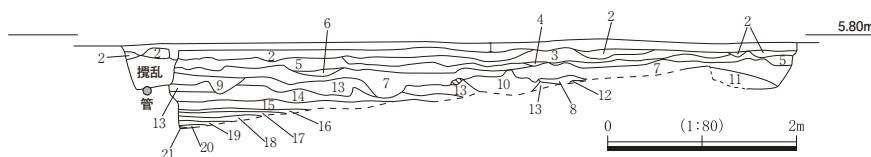
1. 表土
2. 真砂土 (造成土か)
3. 真砂土 (2色で白を呈す)
4. 盛土 (RC片、石を含む。下部に瓦片の集積あり)
5. 黒色土 (腐植土)
6. 真砂土
7. 灰色土 (やや赤みを帯びる。暗灰色土の偽縞を含む。盛土か)
8. 灰色土 (やや赤みを帯びる。0.5~1cm大の縞、赤レンガ片、真砂土の偽縞、炭化物を含む)
9. 灰色土 (8と類似するが、炭化物を多く含むもの)
10. 真砂 (3mm以下の砂礫からなる。整地土か)
11. 暗灰色土 (炭を含みやや里みを帯びる)
12. 灰色土 (炭片・赤色風化縞片を含む。盛土か)
13. 暗灰色土 (炭片、下部に貝片が混入される)

第2トレンチ



1. 表土
2. 真砂土
3. 暗褐色砂質土
4. 黄褐色土 (真砂土)
5. 白色砂質土
6. 白色砂質土 (5に類似。暗灰色砂質土の偽縞が混じる)
7. 暗灰色砂質土
8. 暗灰色砂質土 (土質は7と類似。下部に縞多い)
9. 真砂土 (黄褐色。締固め。縞多い。整地層か)
10. 暗灰色砂質土 (赤みを帯びる。下半は固く締まる)
11. 暗灰色土 (粘性ややあり) 中央から西側に互層状の堆積あり
12. 暗灰色砂 (やや黄色味を帯びる)
13. 橙褐色砂質土 (炭片・赤色土・風化した偽縞状岩岩縞等が混じる。盛土か)
14. 灰色砂質土 (炭片・赤色土・炭化物を含む)
15. 暗灰色土 (炭灰岩粒・炭化物を含む。盛土か)

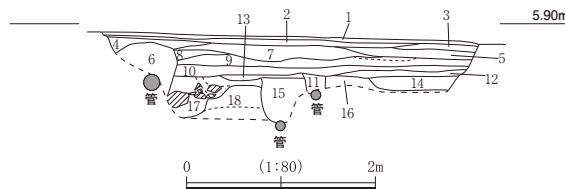
第3トレンチ



1. 表土
2. 真砂土 (黄~白色。白色やや強い。1~4mm大の縞多い)
3. 真砂土 (黄色味を帯びる。5~10cm大の縞を含む)
4. 灰色縞 (2~3mm大)
5. 灰色砂質土 (1~3mm大の砂を多く含む。黒色土ブロックを含む)
6. 真砂土 (風化縞。2~4mm大の縞多い)
7. 黄色砂
8. 暗灰色土 (風化縞を含む。ガラス片・木片を含む)
9. 真砂土 (黄色味を帯びる。3mm前後の粒子多い。粗い印象あり)
10. 真砂土 (9と同じ)
11. 真砂土 (風化花崗岩縞を含む)

12. 青灰色難じり土 (風化したコンクリートのような質感あり。鉄管・木片含む)
13. 青灰色難じり土 (風化したコンクリートのような質感あり。針金・木片あり)
14. 暗灰色土 (底部に炭化物を多く含む。木片を含む。レンガ片あり)
15. 真砂土 (固く締まる)
16. 暗灰色土 (やや赤みを帯びる。炭化物、赤色土ブロックを含む)
17. 真砂土 (固く締まる。地山由来と考えられる岩盤片を含む)
18. 暗灰色土 (やや赤みを帯びる)
19. 真砂土 (固く締まる)
20. 暗灰色土 (やや赤みを帯びる)
21. 真砂土 (固く締まる。やや赤みを帯びる)

第4トレンチ

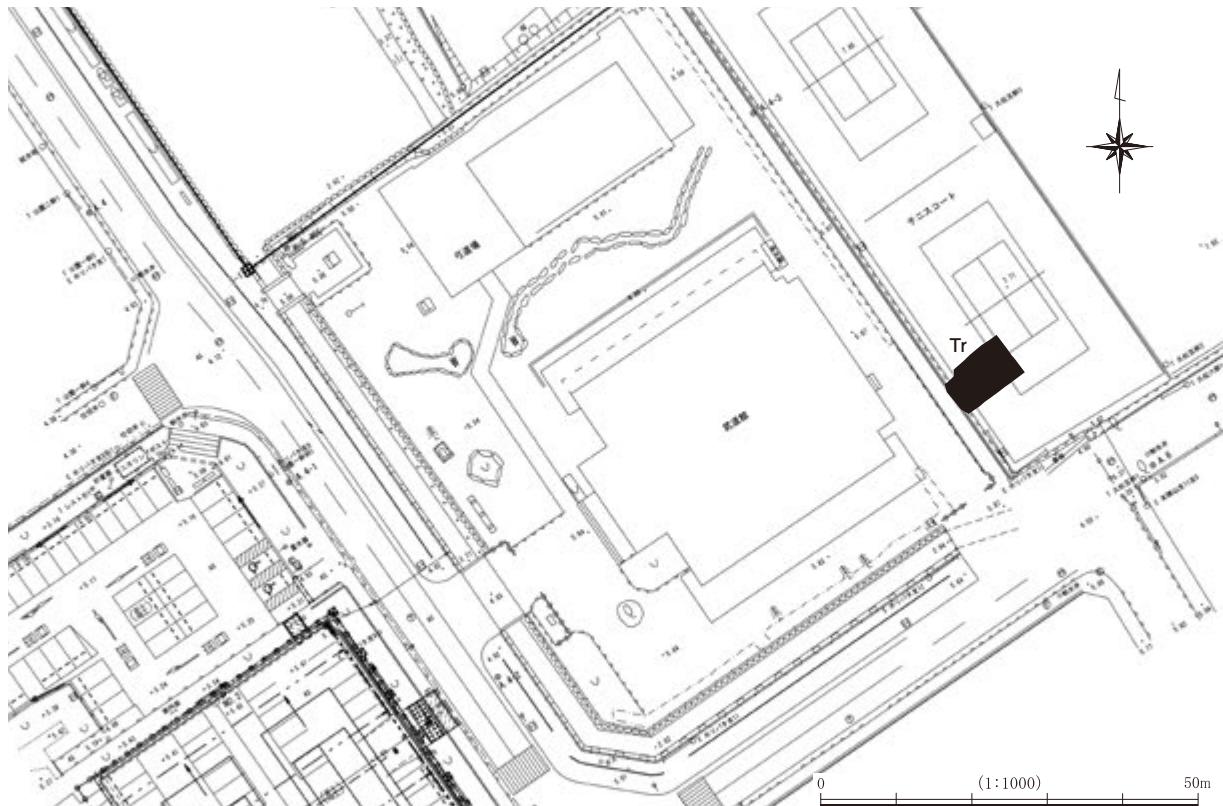


1. 表土
2. 真砂土
3. 腐植土
4. 真砂土 (上部は腐植土)
5. 真砂土
6. 搾乱土 (管埋設に伴う)
7. 暗灰色土 (ビニール・プラスチック・真砂土が混じる)
8. 暗灰色土 (プラスチックを含む)
9. 黄灰色砂 (プラスチックを多く含む)
10. 暗灰色土 (プラスチック片を含む)
11. 搾乱土 (管埋設に伴う)
12. 暗灰色土 (プラスチックを含む。上部に薄く砂が入る)
13. 灰色砂質土
14. 暗灰色土 (白色石灰分・シジミ・木炭片を含む)
15. 搾乱土 (管埋設に伴う)
16. 灰色土縞より土 (1~5mm大の縞多い。土器・瓦片多い。固く締まる)
17. 褐色土 (2~3mm大の縞・10~15mm大の縞を含む)
18. 褐色土 (上部固く締まる。青灰色土の部分や炭が多く混じる部分あり)

第60図 鳥取城下町遺跡(第4次) 第1・2・3・4トレンチ実測図

第14節 鳥取城下町遺跡(第5次)

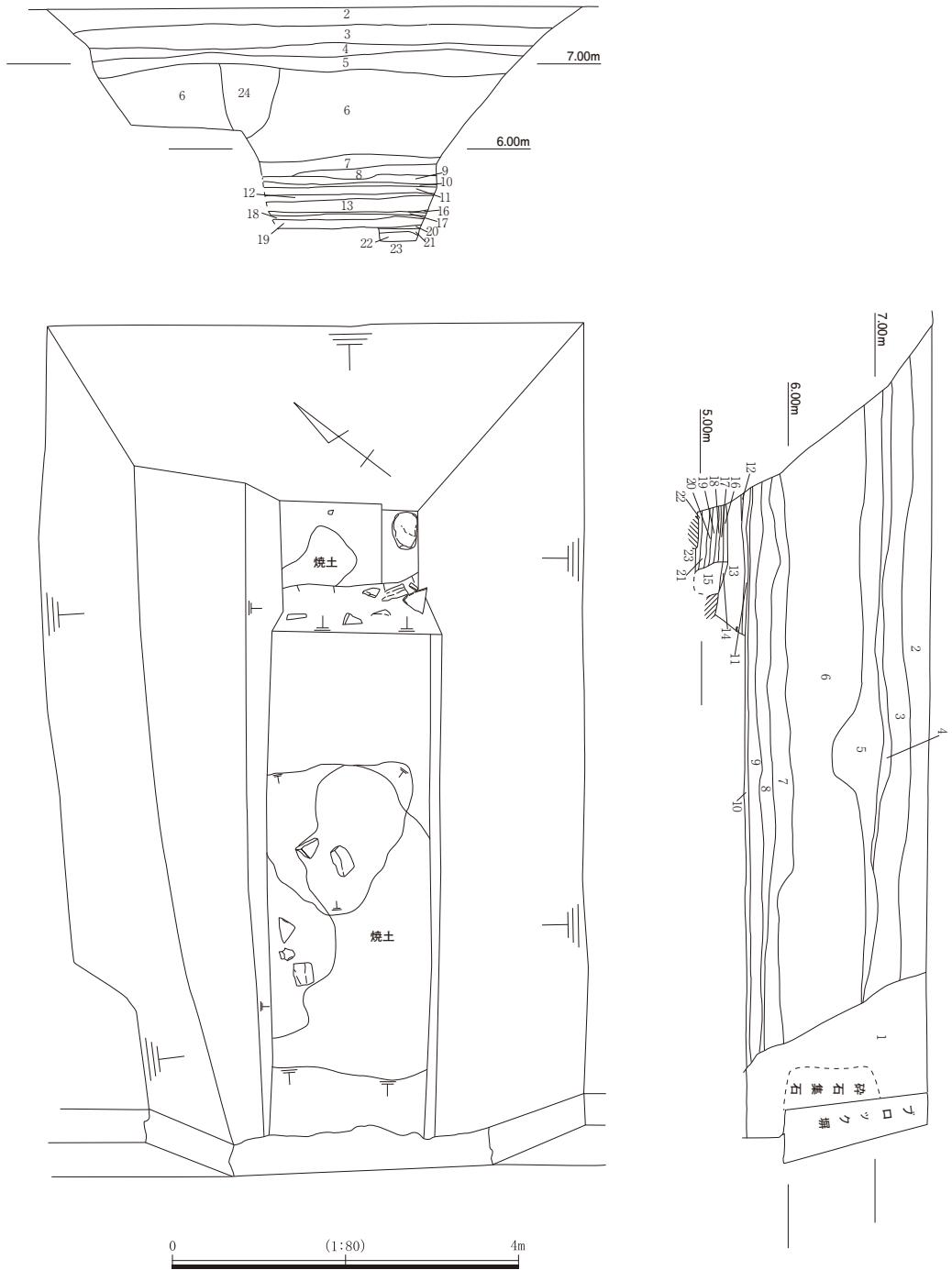
鳥取城下町遺跡第5次調査区は、鳥取県立鳥取西高等学校改築に伴う自転車小屋新設のための事前調査として第2グラウンド内テニスコート内に設定した 6×9 mのトレンチである。史跡境界(第61図太線)の外にあり、昭和40年代後半に大規模な盛土を行いテニスコートを設置するまでは、現況より2m程低い位置に道路が走っていた。調査区周辺の近世当時の状況は、城前の通路部分にあたり、大手門であった中ノ御門に次ぎ、城の主要な出入口であった南北両御門のひとつ南御門の南東側隣接地にあたり、幕末期にあっては糀蔵群の前面部分であった。土地の性格は城内同様であるが、わずかに城郭石垣の外側にあたるため、城下町遺跡として取り扱った。



第61図 鳥取城下町遺跡(第5次) 調査トレンチ位置図

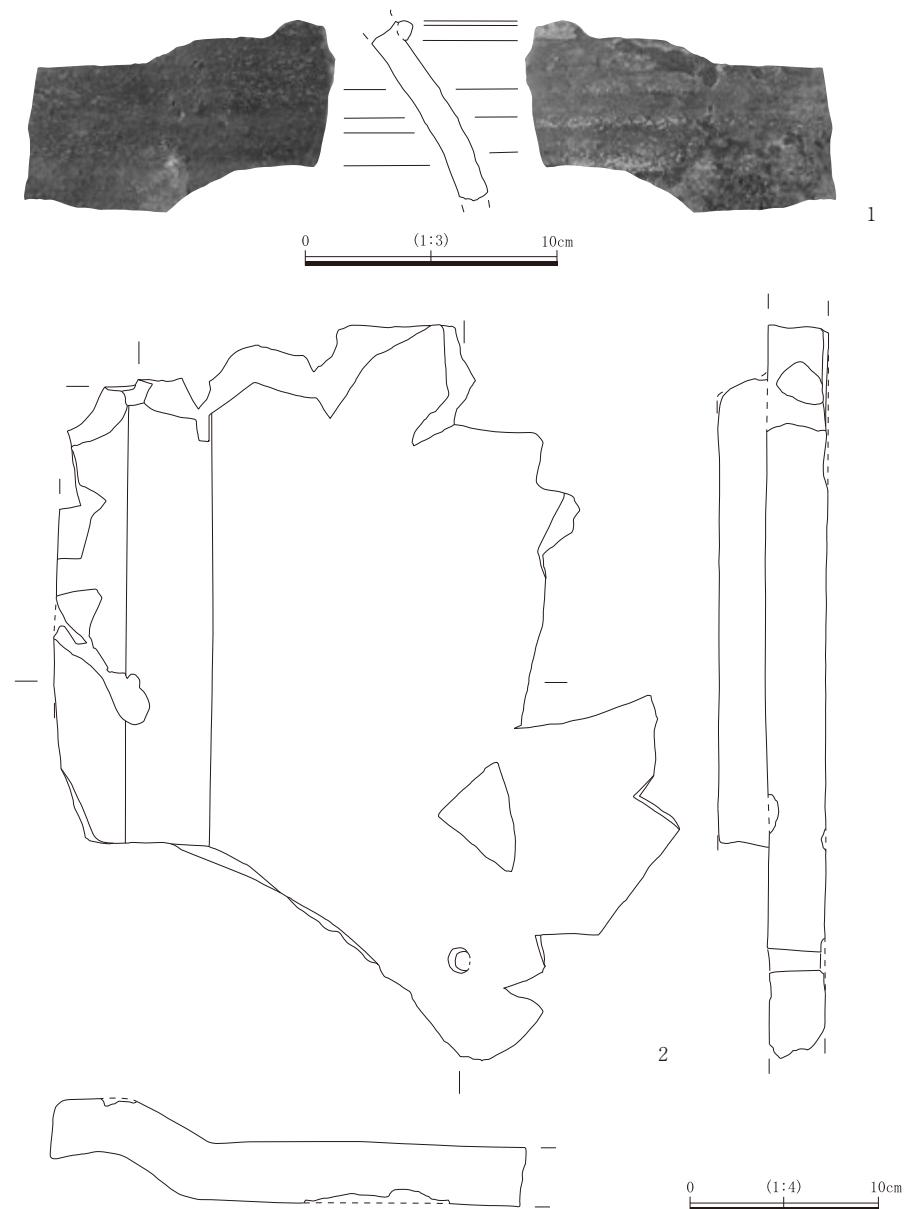
トレンチ(Tr)[第61・62図 図版13]

現地表面高7.7mから下へ1.9m、1～7層はすべてテニスコート設置のためのブロック塀およびグラウンド造成土である。これらを除去すると、昭和40年代まで使用されていた道路面、8・9層が広がる。さらにその下、標高5.7mを上面とする10層以下になると様相が異なり、旧路盤面とみられる砂礫を主体とした薄く硬化した土質となる。10層は砂利を多く含み、11層の上面には被熱の痕跡が広範囲に認められ、近世遺物のみが多数含まれていることから、近世遺構面である可能性が高いと考え、この面までで掘削を止め、トレンチ北東側を一部さらに掘り下げて下層の状況を確認した。12層の硬化面を挟み、13層は厚さが20cmにもなる比較的厚めの整地層である。その下16層を切り込む形で掘り込みがみられ、その埋土である14・15層には掌大の石が多く含まれる。16層以下は厚みが5～10cm程度の薄い整地層が互層状に重なりあっており、16～18層は砂質、粘質の19層を挟み20～23層は土質である。中でも17・20層は薄いながらも、かなりの硬化面である。また、20・22層は炭片を多く含む焼土層であり、21層を含め一連の層である可能性がある。22層直下には、上面標高4.96mとし、被熱し赤変した平面形が30×40cm程度の礎石状の石がみられる。



- | | |
|---|------------------------------------|
| 1. 黄灰色砂土 2.5Y6/1(ブロック層) | 13. 暗灰色土 10YR4/1(整地層) |
| 2. 淡黄色砂礫 2.5Y7/4 | 14. にぶい黄色砂礫土 2.5Y6/3(15層も一連) |
| 3. 黄色砂礫 7.5YR7/8 | 15. 暗灰色土 2.5Y4/2(擦り込み、ブロック状に混ざり合う) |
| 4. 暗灰色土 10YR4/1(瓦片を含む) | 16. 暗黄色砂土 2.5Y6/2(整地層) |
| 5. にぶい橙色砂礫 7.5YR6/4 | 17. にぶい黄褐色砂礫土 10YR4/3(鉄分沈着、硬化面) |
| 6. にぶい黄橙色砂 10YR6/4 | 18. にぶい黄色砂 2.5Y6/3(整地面) |
| 7. 灰黄橙色砂 10YR5/2 | 19. 灰黄色粘質土 2.5Y6/2(整地面) |
| 8. 灰色玉砂利 N4/(近代道路面) | 20. 黑色土 10YR2/1(炭片を多く含む、焼土層、硬化面) |
| 9. 灰色砂 7.5Y4/1(近代道路面) | 21. 暗灰色土 2.5Y4/2 |
| 10. 灰色砂土 5Y4/1(砂利を多く含む硬化面、近世の可能性あり) | 22. 黑色土 2.5Y2/1(木や粘性あり) |
| 11. 灰褐色砂礫土 7.5YR4/2(硬化面、一部被熱による赤変り炭片多く含む) | 23. 暗灰色土 2.5Y4/2(炭片を多く含む) |
| 12. 黄褐色砂土 2.5Y5/3(硬化面) | 24. 暗黄色砂 2.5YR6/2(暗渠の掘方) |

第62図 鳥取城下町遺跡(第5次) トレンチ実測図



第63図 鳥取城下町遺跡(第5次) 出土遺物実測図

遺物〔第63図 図版14〕

1は19層付近より出土した備前系の壺肩部である。2は11層上に散在していた右棧の目板瓦である。棧後方に切欠き、中央前方には孔があり、本来は三角形に3孔であったとみられる。

小結

土層の堆積状況は、城内と共通する部分が多く、瓦片等が散在する11層は城解体時の層であると考えられる。10層もまた近代遺物は含まないことからも或いは近世層である可能性も残る。下部の状況は特に城内と似ており、互層状に何度も整地が行われ、少しずつ路盤面が上昇して行く様子が確認できた。また20~22層および焼けた石材は、その検出状況からも大規模な火災が想定され、城内外で度々起こっている火事との関連を想起させる。11層より40cmも低く、主に近世前半頃までに集中する備前系の土器より低い位置に広がる焼土層であるため、古い段階のものと考えられる。

写 真 図 版



下味野所在遺跡 第1トレンチ掘下げ状況(北から)



曳田所在遺跡 第1トレンチ掘下げ後(北東から)



曳田所在遺跡 第2トレンチ掘下げ状況(西から)



曳田所在遺跡 第3トレンチ掘下げ状況(南から)



曳田所在遺跡 第4トレンチ掘下げ状況(西から)



曳田所在遺跡 第5トレンチ完掘状況(北西から)



曳田所在遺跡 第5トレンチ杭検出状況(北北東から)



曳田所在遺跡 第6トレンチ完掘状況(南南東から)

図版2



曳田所在遺跡 第7トレンチ完掘状況(南西から)



曳田所在遺跡 第8トレンチ完掘状況(南南東から)



曳田所在遺跡 第9トレンチ完掘状況(北西から)



曳田所在遺跡 第10トレンチ完掘状況(北東から)



曳田所在遺跡 第11トレンチ完掘状況(東北東から)



曳田所在遺跡 第12トレンチ完掘状況(東北東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第1トレンチ完掘状況(南西から)



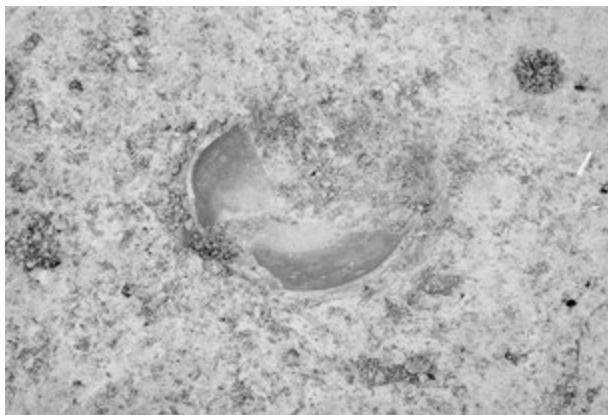
宮長竹ヶ鼻遺跡 第2トレンチ遺構検出状況(北東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第2トレンチ土層断面(北西から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第2トレンチ土層断面(南西から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第2トレンチ遺物検出状況(北東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第2トレンチ遺物検出状況(北東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第3トレンチ完掘状況(北東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第4トレンチ遺物検出状況(北東から)



宮長竹ヶ鼻遺跡 第4トレンチ完掘状況(南西から)



倉見古墳群 遠景(西から)

図版 4



倉見古墳群 第1トレンチ完掘状況(東から)



倉見古墳群 第1トレンチ土層断面(南から)



乙亥正屋敷廻遺跡 遠景(東から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第11トレンチ完掘状況(西から)



乙亥正屋敷廻遺跡 第11トレンチ土層断面(南から)



山手地ユノ谷上分遺跡 遠景(南東から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第1トレンチ完掘状況(東から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第1トレンチ土層断面(南から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第2トレンチ完掘状況(東から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第2トレンチ土層断面(南から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチピット検出状況(北東から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ遺構検出状況(北西から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ遺構検出状況(南東から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ完掘状況(北西から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ遺物検出状況(西から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ焼土面検出状況(北東から)

図版 6



山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ土層断面(南から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第3トレンチ溝状遺構(SD02)検出状況(北から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第4トレンチ土層断面(西から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第4トレンチ土層断面(南から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第5トレンチ完掘状況(南西から)



山手地ユノ谷上分遺跡 第5トレンチ土層断面(北西から)



天神山遺跡 第1トレンチ掘下げ状況(西から)



天神山遺跡 第1トレンチ土層断面(北から)



天神山遺跡 第2トレンチ掘下げ状況(北から)



天神山遺跡 第2トレンチ土層断面(西から)



天神山遺跡 第3トレンチ土層断面(南から)



天神山遺跡 第3トレンチ土層断面(西北西から)



天神山遺跡 第4トレンチ土層断面(南から)



天神山遺跡 第4トレンチ土層断面(北西から)



天神山遺跡 第5トレンチ第1面SD01掘下げ状況(北から)



天神山遺跡 第5トレンチ最終掘下げ状況(北から)

図版 8



天神山遺跡 第5トレンチ土層断面(南西から)



天神山遺跡 第5トレンチ泥炭層付近遺物出土状況(北から)



天神山遺跡 第6トレンチ土層断面(北から)



天神山遺跡 第6トレンチ土層断面(西から)



天神山遺跡 第7トレンチ土層断面(北から)



天神山遺跡 第7トレンチ土層断面(西から)



天神山遺跡 第8トレンチ土層断面(北から)



天神山遺跡 第8トレンチ土層断面(西から)



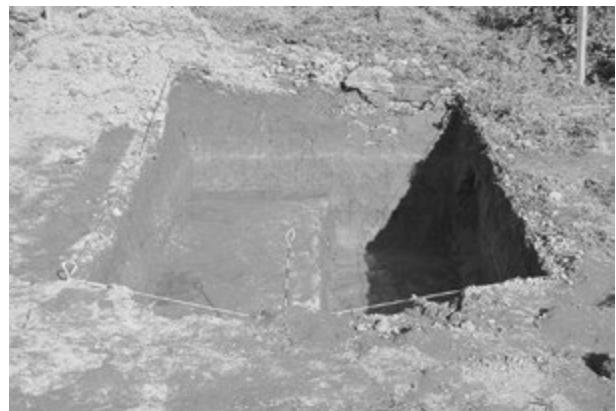
天神山遺跡 第9トレンチ土層断面(北から)



天神山遺跡 第9トレンチ土層断面(東から)



岩吉遺跡 遠景(北から)



岩吉遺跡 第8トレンチ完掘状況(西から)



岩吉遺跡 第8トレンチ土層断面(北から)



岩吉遺跡 第9トレンチ完掘状況(西から)



岩吉遺跡 第9トレンチ土層断面(北から)



岩吉遺跡 第10トレンチ完掘状況(東から)

図版 10



岩吉遺跡 第10トレンチ土層断面(東から)



岩吉遺跡 第11トレンチ完掘状況(北から)



岩吉遺跡 第11トレンチ土層断面(東から)



岩吉遺跡 第12トレンチ完掘状況(東から)



岩吉遺跡 第12トレンチ土層断面(東から)



鳥取城跡(第35次) 第1トレンチ全景(南から)



鳥取城跡(第35次) 第1トレンチ土層断面(南東から)



鳥取城跡(第35次) 第2トレンチ土層断面(南西から)



鳥取城跡(第36次) トレンチ土層断面(北東から)



鳥取城跡(第36次) 石垣検出状況(南東から)



鳥取城跡(第37次) 第1トレンチ全景(南西から)



鳥取城跡(第37次) 第1トレンチ土層断面(南東から)



鳥取城跡(第37次) 第1トレンチ(南から)



鳥取城跡(第37次) 第2トレンチ土層断面(南東から)



鳥取城跡(第37次) 第2トレンチ石垣検出状況(南から)



鳥取城跡(第37次) 第3トレンチ全景(南東から)

図版 12



鳥取城跡(第37次) 第3トレンチ土層断面(南西から)



鳥取城跡(第37次) 調査区遠景(西から)



鳥取城跡(第38次) トレンチ全景(北西から)



鳥取城跡(第38次) トレンチ土層断面(南東から)



鳥取城下町遺跡(第4次) 第1トレンチ全景(西から)



鳥取城下町遺跡(第4次) 第2トレンチ全景(南から)



鳥取城下町遺跡(第4次) 第3トレンチ全景(西から)



鳥取城下町遺跡(第4次) 第4トレンチ全景(南東から)



鳥取城下町遺跡(第5次) トレンチ全景(北東から)



鳥取城下町遺跡(第5次) トレンチ土層断面(南西から)



1



2

曳田所在遺跡 出土遺物



3

曳田所在遺跡 出土遺物

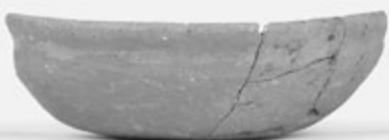


1

宮長竹ヶ鼻遺跡 出土遺物



2



3

宮長竹ヶ鼻遺跡 出土遺物

図版 14



4



5

宮長竹ヶ鼻遺跡 出土遺物



1



2

山手地ユノ谷上分遺跡 出土遺物



3



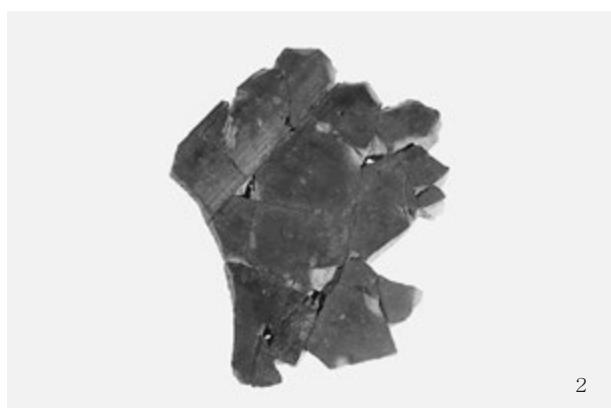
2

山手地ユノ谷上分遺跡 出土遺物

鳥取城跡(第37次) 出土遺物



1



2

鳥取城下町遺跡(第5次) 出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいせい28(2016)ねんど とつとりしないいせきはつくつちょうさがいようほうこくしょ						
書名	平成28(2016)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	加川崇 坂田邦彦 山田真宏 野崎欽五 神谷伊鈴 横山聖 谷岡陽一 大川泰広						
編集機関	鳥取市教育委員会						
所在地	〒680-8571 鳥取県鳥取市上魚町39番地						
発行年月日	平成29(2017)年3月28日						
所取り遺跡名	所取り在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)
		市町村	遺跡				
下味野所在遺跡	鳥取市下味野	31201		35°28'3"	134°11'56"	20150428～20150430	15.0
鉄塔建設							
曳田所在遺跡	鳥取市河原町曳田・天神原	31201	10-245	35°23'30"	134°11'44"	20150224～20150313 20160226～20160318	240.0
道路事業							
宮長竹ヶ鼻遺跡	鳥取市かわ葉	31201	4-70	35°28'27"	134°13'19"	20151019～20151113	59.7
宅地造成							
倉見古墳群	鳥取市桂見	31201	1-428	35°29'45"	134°9'55"	20150831～20150903	4.2
道路事業							
乙亥正屋敷廻り遺跡	鳥取市鹿野町乙亥正	31201	16-244	35°29'53"	134°2'56"	20151120～20151201	15.0
道路事業							
山手地ユノ谷上分遺跡	鳥取市河原町山手	31201	10-227	35°23'10"	134°12'36"	20150423～20150511	57.0
建物建設							
天神山遺跡	鳥取市湖山町南	31201	1-327	35°30'29"	134°10'44"	20150522～20150613 20151116～20151117	81.7
宅地造成下水道事業							
岩吉遺跡	鳥取市岩吉	31201	1-315	35°30'42"	134°11'44"	20150827～20151218	48.0
宅地造成建物建設							
鳥取城跡(第35次)	鳥取市東町	31201	2-211	35°30'20"	134°14'23"	20140408～20140421	15.3
学校改築							
鳥取城跡(第36次)	鳥取市東町	31201	2-211	35°30'21"	134°14'22"	20140729	4.2
学校改築							
鳥取城跡(第37次)	鳥取市東町	31201	2-211	35°30'24"	134°14'20"	20141007～20141016	12.0
学校改築							
鳥取城跡(第38次)	鳥取市東町	31201	2-211	35°30'18"	134°14'15"	20150106～20150107	8.3
道路事業							
鳥取城下町遺跡(第4次)	鳥取市東町	31201	2-385	35°30'17"	134°14'16"	20140210～20140214	11.6
学校改築							
鳥取城下町遺跡(第5次)	鳥取市東町	31201	2-385	35°30'17"	134°14'19"	20140227～20140312	54.0
学校改築							

所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
下味野所在遺跡	散布地		なし	土師器・陶磁器	試掘調査として実施
曳田所在遺跡	散布地	古代～中世	ピット・石列・杭列	土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・土錐	試掘調査として実施
宮長竹ヶ鼻遺跡	散布地	古代	ピット	縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器	試掘調査として実施
倉見古墳群	古墳	古墳	周溝	なし	試掘調査として実施
乙亥正屋敷廻遺跡	集落跡		なし	なし	試掘調査として実施
山手地ユノ谷上分遺跡	集落跡	古墳	住居跡	土師器・須恵器	試掘調査として実施
天神山遺跡	散布地	弥生～中世	溝状遺構	弥生土器・土師器・須恵器・青磁・白磁・陶器・田舟・五輪塔	試掘調査として実施
岩吉遺跡	集落跡	古墳	溝状遺構	土師器・須恵器	試掘調査として実施
鳥取城跡(第35次)	城跡	近世	溝状遺構	陶磁器・瓦	試掘調査として実施
鳥取城跡(第36次)	城跡	近世	石垣	陶磁器・瓦	試掘調査として実施
鳥取城跡(第37次)	城跡	近世	石垣	陶磁器・瓦	試掘調査として実施
鳥取城跡(第38次)	城跡	近世	石垣・水路	陶磁器・瓦	試掘調査として実施
鳥取城下町遺跡(第4次)	城下町	近世	なし	陶磁器・瓦	試掘調査として実施
鳥取城下町遺跡(第5次)	城下町	近世	礎石	陶磁器・瓦	試掘調査として実施

平成28(2016)年度
鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成29(2017)年3月28日

編集 鳥取市教育委員会
発行 〒680-8571 鳥取県鳥取市上魚町39番地
TEL(0857)20-3367

株式会社鳥取平版社
印刷 〒680-0845 鳥取県鳥取市富安1丁目79
TEL(0857)24-7311
